
君の言葉にアンダーライン ～ 聖夜の歌姫～

ヒロユキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君の言葉にアンダーライン ～ 聖夜の歌姫～

【Nコード】

N8380I

【作者名】

ヒロユキ

【あらすじ】

前作のあらすじ、登場人物紹介を追加しました。あの文化祭の事件から一ヶ月。人の言葉にアンダーラインを引ける少年、小野村薫は未だ須藤君恵への想いを打ち明けられずにいた。そんなある日、悪友山下に呼び出される薫と親友の堂野。彼はクリスマスに行われるという演劇部の公演に薫を呼び、君恵にアタックさせるという計画を企てていた。いつもながら、彼の話に胡散臭さを感じる薫と堂野。しかし、その背後には演劇部部长、有川の思惑もあり……。小さくて女っぽい少年、薫。果たして、彼の想いはきららかなる聖

夜、君恵に伝わるのか!?

前作のあらすじ（前書き）

12/6 前作のあらすじ、登場人物紹介を追加しました。

初めてお目にかかる読者の皆様、こんにちは。以前も僕の作品をお読みいただいた方々、毎度ありがとうございます。作者のヒロユキです。

今回の作品は、僕の作品中で初の続編に挑戦しようということで、いささか緊張しております。

作品の中の時間の経過具合をお話ししますと、文化祭での出来事から一カ月後、年の瀬迫るクリスマス。そこで薫たちに起こる騒動を描いていこうと思っております。

それで今回はクリスマスの時期の話でございますので、目標として、クリスマスイブに完結できるよう、執筆したいと思っております。なるべく、がんばりたいと思います。

読者の皆様につきましては、どうか、温かく見守っていただければ幸いです。

前作のあらすじ

前作のあらすじを追加いたしました。ネタバレになる内容を多分に含みますので、お読みになる場合はご注意ください。

『君の言葉にアンダーライン』のあらすじ

小さく、華奢で、幼い顔つきをした小野村薫は男らしくないことに劣等感を持った中学生。しかし彼は他人の声を完璧に記憶し（アンダーラインを引く）、同時にその声を忠実に再現できるという能力の持ち主だった。

彼は親友である堂野と共に、悪友である山下のイタズラに加担させられながらも、それなりに楽しい学校生活を送っていた。

そんな折、彼らの通う綾坂中学校も秋が近づき、次第に文化祭ム

ードが高まってくる。帰宅部である薫と堂野は文化祭の材料集めの係に任命され、材料の買出しに出かけるが、ある日、その途中で、事故に遭遇してしまう。

車と人との交通事故である。その事故によって、不運にも病院に運ばれたのは、薫が日ごろから密かに思いを寄せている須藤君恵という少女。彼女は綾坂中学の演劇部に所属し、文化祭では劇のヒロインを演じるはずだったが、この事故によって足を骨折し、止む無く降板となる。

事故発生時、気が動転してしまい、自分は何も出来なかったと薫は自己嫌悪に陥るが、親友堂野の力を借りて、再び自信を取り戻す。そんな彼に目を付けたのは演劇部部長の有川久美だった。彼女は薫の人の声を真似る能力と女のような容姿を見、なんと彼を男ながら、君恵の代役としてヒロイン役に抜擢する。

困惑する薫だったが、渋々ながら劇の練習に参加し、君恵や演劇部の面々の協力を受けながら、特訓することになった。

これで上手くいくかに思われたが、そこで新たな問題が発生する。以前、山下と共にイタズラを仕掛けた相手、教師の村松が薫をイタズラの犯人ではないかと目を付け始めたのだ。

それを察知した山下と堂野は、演劇部の馬場浩太、奥山紗江を使い、村松を呼び出して罠にはめるといふ、薫から目を逸らさせるための一計を案じる。

その目論見は無事に成功し、村松は薫に近づくことをやめた。

問題はこれですべて過ぎ去ったかに見えたが、それは違った。文化祭当日、劇の上演中に長期の練習のためか、薫の声が出なくなる

というハプニングが起こったのだ。

絶体絶命かと思われたその時、薫の耳に届いたのは自分の代わりに台詞を読んだ天使の声。堂野の機転により、須藤君恵が舞台横でマイクを握り、台詞を読んでいたのだった。

結果、文化祭は無事に終了した。急遽の代役で抜擢された薫は見事、役を演じきったのである。

その後、それぞれが今回の成功の余韻に浸っている中、薫と君恵は人影のない体育館にいた。薫は今回の一件で自身の心境の変化を彼女に述べた。彼は代役を演じきったことで、自身も成長していたことに気付くのだ。

そこで君恵は今回の劇で見事ヒロイン役を演じきった薫にお礼としてキスをする。

突然のことに動揺する薫だったが、結局その場で自らの想いを打ち明けることが出来ず、ただ、彼女の言葉にアンダーラインを引くに留まった。今作へ。

登場人物紹介（前書き）

12 / 6 登場人物を追加いたしました。

登場人物紹介

登場人物の紹介です。

おのむらかおる
小野村薫……主人公。中学二年生。小さくて華奢、女顔のため、いつも周囲からかわられる対象の少年。他人の声を完璧に記憶し（アンダーラインを引く）、同時にその声を忠実に再現できるという能力の持ち主で、文化祭ではその能力をフルに活用した。君恵のことが好き。

とじつじょうすけ
堂野亮介……薫の親友で、長身、頭脳明晰、読書家で、周りのことに普段はあまり興味がない。しかし事が起こると、臨機応変に動き回り、非の打ち所のない頭のキレを見せる。ザ・いざという時、頼れる男。

すどつぎみえ
須藤君恵……薫の隣のクラスの可憐な少女。小さい頃に家族で見た演劇が忘れられず、中学に入学と共に演劇部に入部している。薫曰く、淑やかな笑顔、天使のような澄んだ声を持った少女だということ。

あrikawakumi
有川久美……眼光鋭き敏腕演劇部部长。その計算高さ、えげつなさは校内で知らない人はいないらしい。一度決めたらとことんやり通す性格で、そのためには手段を選ばない。君恵とは友達。

やました
山下……クラスメイトの中で唯一名前がないという不幸な人物。トラブルメイカーで、薫や堂野をいつも自身のイタズラに巻き込む。自分勝手に、頭が悪いなどと周囲からは思われているが、自信を失

った薫を本気で叱りつけるといった、熱い一面もある。

馬場浩太……一年生で、薫たちの後輩。演劇部に所属しており、馬鹿でかい声で話す。人柄は明るく温厚。

奥山紗江……浩太と同じく一年生で、同じく演劇部所属。責任感が強く、言われたことはきちんと最後まで行う誠実さがある。下馬評では次期部長候補。浩太とは反りが合わないらしく、大雑把な彼にいつも目くじらを立てている。

芦沢千葉……二年生で、吹奏楽部部长。文化祭の事件において、山下の責任で巻き込まれてしまった不運な人物。他人に厳しく、思ったことははずけずけと言うが、その反面、幽霊が怖いという女の子らしいところもある。

村松先生……綾坂中学校の教師。演劇部の顧問で、山下と堂野のお化け作戦にはまってからは、薫に近づかなくなった。しかし、指示を守らなかった人間には厳重な罰を加えるという意思の固い教師。

第一話 マッチ売りにアンダーライン

街の輝きは魔法のようだった。

今日という日のために、一斉に光を放つ呪文をかけられていたかのようで、街に張り巡らされたイルミネーションが、家を、木々を、ビルを、人を照らし出している。揺れ動く光と影の輪舞に人々は皆、酔いしれていた。

おのむらかおる
小野村薫は狭い石段の上に座り、手のひらを擦り合わせていた。

「はあー」

息を吹きかけることで、僅かな熱が放出され、凍りついた指先を僅かに溶かす。

今日は全国的に、12月24日。

ついでに言うなら、世間一般的に、クリスマスイブである。

街のメインストリートには軽やかなクリスマスソングが流れ、行き交う人々の表情はもれなく、華やかである。子供達は駆け回り、カップルは手をつなぎ、大人たちはプレゼントを求め、歩く。

浮かれ気分満載のこの夜は、世界中の憂鬱が密かに身を寄せる場所を求めて、僻地をさ迷っているのかもしれない、と思えるほどなのだ。周囲は喜びのムードに満ち満ちている。不機嫌、憂鬱の感情はこの場から排除されるべき存在であった。

しかし、薫は白くくすんだ息を吐く。

どこか自分がその雰囲気に取り残された気分なのである。泣いてしまいたい、この疎外感。今薫の恰好も、その気分をさらに助長し

た。

「何やってんのかな。俺」

ぼやき、そして、頭をすっぽりと覆う頭巾を両手で引っ張る。少しでも視界が隠れ、クリスマスソングが遠のく。

「何で、こんなことしてんだろ？」

もう一度、無意味なことをかみ締めると、ぐったりとう頂垂れた。ふいに、人の足音が聞こえ、はっと顔を上げる。石段の真上、公園へと続く並木通りを誰かが歩いてくるようだ。たっぷり五秒迷つてから、薫は腰を上げた。

自分には仕事がある。それを放棄するわけにはいかない。
道の真ん中まで歩き、勇気を出して声をかける。

「あ、あの」

目の前を歩いていたのは、三人の若い女性だった。これからショッピングにでも行くのか、きゃっきゃと笑いながら談笑している。その一人の視線が薫に向いた。

「どうしたの？」

どうやら薫に気がついたようである。駆け寄って、腕に提げたバスケットからチラシを一枚差し出した。緊張に頬を強張らせながらも、微笑んでみる。

「実は、この先の泉田いずみだ中学校の体育館で、特別に綾坂中学演劇部の

舞台が上演されるんです」

「……なになに、聖夜の歌姫？」

チラシを覗きこんだ一人の女性が言う。それは今回上演される演劇の題名だった。

「は、はい。入場無料で、七時から上演です。もしよろしければ、観に来てください」

「へえ……そんなことしてるんだ。ポラントイア？」

「ね、ねえそれよりキミ」

すると、三人の一番左、ポニーテールの女性が薫の顔をのぞきこんできた。

驚いて後ずさる。きた、やっぱりだ。

「もしかして、その恰好、マッチ売りの少女？」

「え、やっぱり？ 私もそう思ったんだ」

隣の女性も目を輝かせ、同意する。薫は顔が赤くなるのを感じた。そうなのだ。今の薫を見る人には間違いなく、頭巾を被り、みすばらしいぼろ服を着て、マッチのかごを持った某物語中の少女にしか見えないのである。そんな姿をしている。もとい、させられているのだった。

「え、えっと……」

「うわー、すごくかわいい」

「何？ コスプレ？」

「小さいし、この服とっても似合ってるね。どこの子？ 小学生だよね」

動揺する薫を無視して、女性三人は薫の服を触ったり、口々に勝手に好きなことを言っている。逸れに対し、チクチクと心に突き刺さっているのは男としての薫のプライドだろう。

かわいい。

小さい。

女の子みたい。

昔から自分が嫌というほど浴びせかけられてきた負の三大賞賛文句である。それというのも、自分が生まれ持った体のせいであるのだが、薫はそのことに強いコンプレックスを持って生きてきた。

可愛らしい顔。

小さな体。

声変わりしていない高い声。

そんなものを持っているがために、薫は今までどれだけストレスを感じていたことが。きつとそれはどんなに才知に富み、流麗なすばらしい文章を書く小説家にだって、書き表せないほどのものだ。

「す、すいません。そろそろ違う場所に行かないといけないので」

薫は身の危険を感じ、女性たちから背を向けて走り出す。こついつときは逃げるが勝ちである。

「え、ちょっと待ってよ。写メ撮らせて」

「一枚、一枚だけでいいからさ」

降りかかるひき止めの声をすいませんの楯で振り払い、公園のベンチの影まで息つく間もなく走りきった。背後から追いかけてくる

足音は聞こえない。どうやら、薫のことは諦めたようだ。ほっと安堵する。

「だからこんな役、嫌だって言っただよ」

肩を落とすと、抱えていたバスケットのチラシがずれ、その下に忍ばせていた赤いリボンが見えた。クリスマスの柄の包装紙に包まれた箱である。

はっとして、その上のチラシの位置を戻した。それは、薫の淡い恋の色で敷き詰められた想い人へのプレゼントであった。

彼は今日、それをその人物へ渡す算段だったのである。

だが、それは、見事に裏切られた。予想外の事態によって。

ふと、公園の周囲を見渡した。この辺りは近くに大きな通りもなはいせいか、人々の姿はあまり見受けられない。誰も滑らない滑り台を不健康そうな色をした外灯が照らし出している。横断歩道の向こう、車のいない交差点の信号の色が青、今黄色に、そして赤になった。どこからか、クラクションが聞こえ、それに重なり、人々の歓声上がる。

衣服の下から忍び寄る冷たい夜気に薫は身震いする。

「あーあ……」

そして、薫がこうなったのは誰のせいであるのかを思い出し、情けなくなった。

「くそ、何もかも全部山下のせいだ！」

第二話 山下の計画にアンダーライン

物語は数週間前に遡る。

場所は、綾坂中学校。

放課後で、本日の授業を終えた薫は帰宅部の帰宅部たる所以^{ゆえん}である、帰宅をするために昇降口に向かっていた。

クラブ活動に精を出したり、当番の掃除に割り当てられていたりする生徒たちがいる中で、薫はすれ違う彼らに適当に手を振られ、振り返し、挨拶をする。

それには同学年の生徒もいれば、後輩の生徒もいる。中には上級生、三年の生徒からも声をかけられることもあった。

しかし、今まではそんなことはなかった。薫がこの中学に入学してから一年と半年、校内における彼の他の生徒からの扱いは、あまり芳^{かんば}しいものとは言えなかったのである。

大抵は、廊下で他の生徒とすれ違っても、ちらりと一瞥される程度だったり、または薄ら笑いされるか、女子の生徒に至ってはひそひそと自分の噂をし、小さく手を振ったり、「かわいい」と頭を撫で、からかってきたりするものだった。

その態度が変わったのはここ一ヶ月ほどの間だ。

それには事情があるわけだが、その事情というのが、一ヶ月ほど前に行われた文化祭を巡る一騒動にある。

文化祭のとある一件があったから、彼の名前は一躍、学校中に知れ渡った。

それは正直、男としてはあまり名誉なこととも思えないが、間違はなくあの時の薫は演劇部の危機を救ったわけで、文化祭における

全校の注目の的となったわけだ。

それは、良いことだろうと思う。

が、こつも学校中の人間から物珍しい視線を向けられるのは、やはりくすぐつたい。そういった世間の熱というのは、放っておけばいつしか冷めてしまうのが常だが、こつという状況に慣れていない薫は、どうにもやり辛い空気を感じてしまうのである。

「はあ……」

まあ、それも少しの辛抱だろう。

薫は階段を下りながら、頭を切り替えた。

きつと昇降口にはすでに同じ帰宅部で、親友の堂野亮介（だうのりやうすけ）の姿があるはずだ。彼のことを思うと心が弾んだ。

彼とはこの学校に入学したところからの付き合いで、親しい間柄である。

自分よりもずっと高い身長、物静かで、頭脳明晰、薫が厚い信頼を置いている人物なのだ。

きつと文庫本でも読みながら自分のことを待っていることだろう。あまり待たせるのもまずい。急ごう。

しかし、その途中、薫の目の前に立ちふさがった人物がいた。

「よお、薫君」

不快なほどに馴れ馴れしさを撒き散らして敬礼めいたことをしている少年だ。

あまり思い出したくはないが、一ヶ月前の文化祭において騒動の一つの元凶を作り出した人物という形容も出来る。

クラスメイトの山下だった。

「何か用か？」

薫はその小さな体全体で進路を妨害している少年に嫌悪の感情を示した。

「なんだよ、つれない顔するなよ」

それに気圧されたのか、彼の顔が引きつった。

「用はないんだな。じゃあ、帰る。またな、山下。達者で暮らせ」

駆け足でそう言って、彼の脇をすり抜ける。しかし、そうは問屋が卸さなかったらしい。がっしと細い肩を掴まれた。

「待てよ、親友」

「シンユウ？ 誰のことだそれは。人違いだ。他を当たれ」

薫は彼の手を振りほどこうともがく。

「待て待て。堂野と一緒に帰るんだろう？」

「ああ、そうだ。だからここでお前と絡んでいる暇はない」

「いや、しかし、堂野と帰りたいなら、俺の話を聞く必要はあるぞ」

彼はふふんと鼻を鳴らす。

「どっという意味だ？」

これには薫、顔色を変えて動きを止める。何か不穏な空気を感じ

ただ。

するとしてやったりと山下が下卑た笑い方をした。毎度ながら、本当に嫌気が差す。

「彼はすでに俺の手中にあるんだよ」

何を言い出すかと思えば、山下は片手を宙に伸ばし、ぐっと空を掴む素振りをして、そんなこと言った。

「はあ？」

「昇降口に彼はいない。俺がそこで薫を待っている堂野を捕まえて、ある教室に閉じ込めたからな」

「それで？」

「きつと、今頃泣いてるぞ。薫が助けに来ることを待っているはずだ」

彼は目頭を擦り、泣いている演技をする。その幼稚さ加減が、薫の癪に障った。

「お前、絶対頭悪いだろう？」

「今さら何を言う。ともかく、堂野は向こうにはいない。俺について来れば彼の居場所を教えよう」

「……」

不服だが、事実、堂野は昇降口には居なかつたために、薫は大人しく山下に従った。

山下が向かったのは、二階の美術教室の準備室だった。廊下に掃除用具入れが無造作に設置されている細い通路の先にある。

準備室と言えば、大抵は専門教科の教師が使用することがほとん

どで、普段はあまり入れないのだが、ここだけは例外だ。美術の教師だけはそこをただの物置としか使っていないのである。どうにもその教師は頻尿なのか、トイレが近くにあると安心できるとかいった理由で、校長にかけあつた結果、他の空き教室を利用させてもらっているらしい。

まあそのため、ここだけは学校の人間ならば好きに利用できる。ここそと隠れて密談するにはもってこいのスペースだ。

山下が先にドアを開けると、堂野は狭い部屋で椅子に座って本を読んでいた。

「あれ、薫」

「亮介、何でこんなところに？」

彼はぼさぼさと頭を搔く。

「いや、山下が薫がここにいるからって呼び出されたんだ」

はあ、と薫はため息をつく。山下が何かよからぬことを企んでいるのは明白だった。

こうして自分たちを人が来ない場所に連れてきたのだ。何も無いはずはない。

「山下」

「なんだ？」

「用事はなんだ。すぐに済ませろ」

早く帰りたい一心で、薫は彼を急かした。

「もう、せっかちなんだから。今日は井上先生の声まねはしてくれ

ないのか？」

山下は妙に色っぽい粘着性のある声をだした。ちなみに、井上先生というのは、若い女の先生だ。

しかし、薫は断固として了解するつもりはなかった。

「お前の頼みなんてまともに取り合えるかよ」

「はいはい。いきなりだが、本題に入りますよ」

それは彼も予想していたようで、壁際にあつたホワイトボードを反転させる。

「諸君！ 分かっているとは思いますが、もうすぐクリスマスだ」

彼は街頭演説の政治家よろしく、ペンをマイク代わりにして、薫たちを順に指差す。さも、若者よ、そこにたむろしている場合ではないと、諭さんばかりだ。

「ああ、山下に指摘されるまでもなくな」

椅子に座って足を組み、堂野は冷めた口調で言う。

「ちなみに期末テストは明後日からだ」

「余計な補足はいらんよ、堂野君」

言いながらも、山下の額にじんわりと汗が滲んだのが分かる。おそらく、勉強は思い通りに捗っていないものと見える。

「問題はクリスマスだ。クリスマス、クリスマス。ああ、クリスマス

ス！」

「山下、一度言えば分かる。それともなにか、お前は何度もそう言
つてないと、クリスマスという言葉を忘れるのか？ 馬鹿だから」
「……」

薫の突っ込みを彼は無言のまま受け流した。代わりにホワイトボ
ードに「クリスマス」と文字を書き殴り、質問してくる。

「薫、クリスマスとは何だ？」

唐突で驚いたが、頭の中の知識を掘り返して答える。

「……キリストが生まれた日だろ？」

「はあ、お礼口さんの面白みのない答えだな」

「でも、事実だろ。俺はそれを述べたまでだ。批判をされる筋合い
はない」

「いいか、薫。クリスマスとは、聖なる夜だ。一年の内、年の最後
を締めくくるに相応しい大きなイベントだ。町は賑わい、ツリーが
輝き、靴下のプレゼントもある。分かるか？」

彼は口角沫「しゅかくあわを飛ばす勢いで話す。

「言いたいことは、なんとなくな」

「それで、続きは？」

堂野が先を促した。

「言われなくても、今からする」

山下が派手なジェスチャーを繰り返しながら、ホワイトボードの

前を行ったり来たりしながら話します。

「それは、世界の恋する人々にとっても、それはそれは欠かすことの出来ない、一大行事だ。手と手を取り合い、頬を染め、一緒にダンス。クリスマスケーキに、宝石のような町の灯。プレゼントのりボンに、温かな暖炉……」

「はあ……」

「ロウソクの火を吹き消し、普段は言えない想いを打ち明け、愛を語らい、息を止め、見詰め合えばそれだけでいい！ 聖なる鐘の音が二人の間を満たし、揺れ、こだまし、愛は燃え上がる！」

彼はそこまでまくしたてるように一気に喋った。

すると、その熱弁に感心したのか、堂野が拍手を始める。薫もなんだかよく理解できない、猛烈で凄まじい熱意を感じたので、手を叩いてやった。なんだか、今の彼なら総理大臣にでもなれそうに思ったから不思議だった。

「クリスマスのすばらしさを理解していただけたようだな」

「……半分、脅迫じみてたがな」

ぼそりと言った愚痴は聞こえなかったようだ。山下が高らかに言い放った。

「そこでだ、小野村薫。君に尋ねたい！」

「何だ？」

「君には、想いを寄せる女性がいるね」

百発百中の占い師さながらに不気味に声を潜ませ、彼は言う。薫の額に嫌な汗が垂れた。

「いったい誰だよ。こいつに話をばらしたのは。」

「それは、隣のクラスの、須藤君恵さんだ」

勢い余った山下の指が薫のおでこを突いた。

「痛っ……」

「どっよ」

「どっよ、ってどっよ」

「どっよ、ってどっよ、ってどっよ……止めよう。不毛な争いだ」

山下は口をへの字にして、肩を落とす。

薫はというと、胸の内に微かに舞い上がる甘い匂いに顔を逸らした。俯いて、鼻を擦る。

山下の言うとおり、薫は隣のクラスの君恵のことが以前から好きだった。あの鈴の音のような澄み渡った声が、あの優しい笑みが、自分にとって他の女性とは違う、特別なものに見えていた。

文化祭の終わり、後片付けの最中、彼女と二人きりになったときのことを思い出す。あの時の甘く、ほろ苦い想いをかみ締めた。

きつと誰が見ても、絶好の告白のチャンスだったに違いない。が、薫はその千載一遇のチャンスを逃してしまっていたのだ。

あの時、薫は彼女とキス（お礼という名目ではあるが）までしたのに、である。それを思うと、胸が熱くなって、しゅんとしぼむ。

「いいか、薫。君はいつまで経っても煮え切らない。打ち明けるべき想いがあるのならば、可及的速やかに打ち明けるべきだ。胸の内
にいつまでも押し込めているのは辛いだろう？ 人間とは往々にしてとてもおしゃべりな生き物だ。その欲求に反して生活するのは、かなり大変なはず。どうだい？」

「う、うるせえ」

そんなことを山下に諭されたくはなかった。やるべきことを出来ていない不甲斐なさなら、充分痛感している。しかし、

「簡単に出来るなら、そうしてるよ。でも、いまさらだし。失敗するかも……」

その不安が脳裏をちらついている。

「だろうな。不安になるのは分かる。成功のためにはそれなりの準備は必要だ。特に告白にはシチュエーションの準備だ。愛する人への告白を成功させるには、普段の学校の教室とか、車の排気ガスが舞う帰り道なんていうシチュエーションは不粋。いいか、薰」

「何だ？」

「だからこそ、クリスマスなのだよ」

山下がバシバシとホワイトボードを叩いた。

「山下、今のでクリスマスという単語の消費回数は十回だ。いくらなんでも使いすぎだと思うぞ」

妙なタイミングで堂野の突っ込みともいえない突っ込みが入る。

山下が前につんのめりそうになった。

「そんな計算してたのか、堂野。どうでもいいだろ」

「どうでもよくない！ 堂野だ！」

「いや、どう考えてもどうでもいいだろ」

「……俺も、どうやらそんな気がしてきた。どうも申し訳ない」

薫は心の中で数える。この二人、『どう』を、この短い会話で八回も使いやがった。どう《・・》かんがえても、韻の踏みすぎだった。

山下が首を振って仕切りなおす。

「とにかく、薫。チャンスはクリスマスだ。その日に彼女へ思いの丈を打ち明けてみてはどうだね」

これには、薫は意外な表情で首を傾げた。彼には珍しく、純粹に自分のお膳立てをしてくれようとしているのだろうか。

しかし、素直にそれを受けするのはプライドが許さなかった。こいつに借りを作るのは心底気持ちが悪い。そうなるくらいなら、現状維持でもいい。そう思ったのである。

「よ、余計なお世話だよ。そもそも誰だよ、こいつに俺が須藤さんを好きだって教えたの」

「薫が余計なお世話と言おうが言うまいが、すべての計画は決まっているのだよ。俺の完璧なスパコン頭脳によつてね」

「お前、また妙なことをしてるんじゃないのか」

薫は唇を噛んで、彼を睨みつける。彼が計画という言葉を口にするとき、何かよからぬことが絡んでいるのが常だ。

しかし、彼は自慢げにこう言った。

「ふふん、聞いて驚け。実は、すでにクリスマスイヴの君恵嬢のスケジュールを俺が押さえているのだ」

「な、なにー！」

それは真か、と薫は自分の耳を疑った。しかし、驚いている薫の隣で、堂野は静かに首を振った。

「正確には違う。山下は彼女のスケジュールを押さええているわけじゃない、ただ知っているに過ぎない。有川から呼ばれてるんだろ？クリスマスライブのボランティア公演の手伝い」

「何で、お前が、知っている？」

山下の口があんぐりと開いた。

「有川から聞いたんだよ。彼女から時々演劇部の二人目の副部長にならないかって、未だに話しかけられるしな」

「……」

「何でも、文化祭の後、罰で部の手伝いをしてて、小道具を壊したんだって？ その分の貸しがあるんだろ？」

「どういうことだ。山下？」

沈黙したまま何も語らない山下に対し、読んでいた本をぱたりと閉じ、堂野が落ち着き払った様子で口を開く。このとき、彼の推理はすでに結論を導き出していた。

「つまり、お前はただ薫に、クリスマスに須藤さんに会わせてやるという名目で、引っ付いてくるであろう俺もろとも呼び出し、少しでも楽するために、一人でも多くイベントの手伝いをさせるつもりだったな？」

「そ、そうなのか。山下！」

彼の目が焦点を失う。明らかに堂野が放った矢は彼の目論見を射抜いていたようだ。無様に、足元から崩れ落ちる。

「どつやら、完落ち。正解と受け取っていいな？」

「じゃあ、亮介。こんな奴放っておいてさっさと帰ろうぜ。そんな面倒なこと、付き合ってられるか。自分の責任は自分で取れ」

四つんばいのままの彼を無視して、薫と堂野は立ち上がり、出口の取っ手に手をかける。別れの挨拶をしようとして振り返ると、山下は苦渋の表情のままこちらを見上げていた。

「それで、お前はいいのか？」

「はあ？」

「そうやって、一人寂しいクリスマスを過ごすのか？」

「……だったら、なんだ」

「確かに、お前らを俺の勝手な計画に巻き込もうとしたことは謝ろう。だがな、薫。このクリスマスイブ、彼女の近くに行ける切符を俺は持っている」

取っ手を引つ張ろうとした手が緩む。薫には確かに、彼の言葉が魅力的に響いたのだ。

「確かに、イベントでいろいろと雑用をさせられるかもしれない。でも、舞台裏で彼女に一番接近できるチャンスだぞ。これを逃せば、次はいつになるのかな？ 恋の神様はそう何度も微笑んではくれないぞ」

「……ぐ、ぐう」

迫り来る山下の言葉に、今や薫の気持ちは大きく揺らいでいた。彼が自分たちを罫にかけようとしたことも事実だが、同時に、これが思いがけず舞い込んできたチャンスであることも事実だ。

「さあ、どうする。俺が差し出した手を取るか？ はたまた、振り

払うか？」

薫の隣に立っている堂野は興味なさそうな顔で外を見ていた。

「どっする、薫君？」

薫は苦い表情で、歯軋りをして悩んでいる。地団太を踏んだ。

「……え、と……あ、こ、この……」

山下の目が獲物を見つけたトラのようにぎらぎらしく。

「さあ答えを。か、お、る、君？」

第三話 二人の帰り道にアンダーライン 1 (前書き)

作者のヒロユキです。

今回は君恵の視点で書いてます。

前作では、彼女の視点のパートが少なかったなので、今回は多めに書けたら、と思っています。

第三話 二人の帰り道にアンダーライン 1

教室では担任教師からのテスト勉強に対する事前の心構えなる退屈な説明が繰り返し広げられていた。

生徒がだらけきった本日の最後を締めくくるホームルームで、単調な男性教師の声だけに張りがある。

しかし、その声の張りとは裏腹に、言っていることはごく普通の少し下をいく水準の説明で、英単語を覚えろとか、ノートをまとめろとか、間違えた問題の総復習しろ、などなどその程度だった。生徒にとつては、いまさらあなたに言われるまでもない、だから、僕は机の上でスライムになっているんだ、というムード満載である。

そんな中、窓際に座った須藤君恵も、退屈にあくびをしていた。耳にかかった柔らかな髪を掻き揚げ、もう一度、黒板に目を向ける。そこには「公式」やら、「練習問題」などの文字が並び始め、退屈な説明にさらに補足が付くという悪夢のような局面を迎えていた。

教師はぶつぶつと独り言のように、数学の説明を始めるが、多くの生徒は一樣に、教師の指し棒ではなく、時計の針を凝視している。

と、そこでお待ちかねのチャイムが鳴った。机に突っ伏し、とろとろのプリンよろしくだらけていた生徒たちが途端に背筋を伸ばす。先生、早く終わりましたよう、と無言の圧力を投げかけているのだ。君恵も同じ気分だった。なにしろ今日はずいぶんと疲れている。どういった理由なのかは知らないが、体育が二時間続けてあり、その間、たっぷりとバスケットボールをさせられたのだ。

正直、へとへとなのである。

教師がチヨークを置く。

「じゃあ、今日はここまでで」

すると、教師が素晴らしい終わらないうちに、号令の係が前後左右からせつつかれ、立ち上がり、

「起立、礼！」

と、すばやく号令をかけた。

こういつときの生徒たちの連携プレーは正確で迅速だった。

うわあ、早い。

そう思いながらも、君恵も遅れないように立って座った。

お前ら、と眼鏡の教師は説教の口を開きかけたが、すでに生徒達は和気藹々《わきあいあい》の放課後空間にすっぽりと埋没している。口を挟む余地はないと悟ったが、そそくさと退散していった。

君恵は横を向く。

「ねえねえ、美香ちゃん。私、今日部活ないから一緒に帰ろうよ」

隣の友人に声をそうかけた。

しかし、彼女は目の前で両手を合わせて頭を下げる。

「ごめん、君恵。今日は委員会の仕事があるんだ」

「え、そうだったの？」

「うん、今朝言われてさ。会議の予定が入ってたんだ」

「そう……」

君恵はがっかりして肩を落とす。せつかく今日はゆっくりとおしやべりの帰り道を堪能できるとおもっていたのに。が、仕方のないことだ。

すると、彼女は背後を振り返る。

「じゃあ、久美ちゃんと一緒に帰ったら？」

教室の隅で、後輩となにやら話しこんでいる少女を指差した。

彼女の名前は有川久美^{あしかわくみ}。君恵が所属している演劇部の部長を勤めていて、頭の回転も早く、リーダー役にぴったりのしっかり人類だった。今日も凛々しく眼鏡のフレームが光っている。

「あ、でも……」

君恵は額に皺を寄せて、言葉を濁らす。

「何？」

「久美ちゃん、最近忙しいんだ。ほら、前に言ったでしょ？ クリスマスの演劇部の舞台のこと。その準備でいろいろと走り回ってるみたいなの」

「へえ、久美ちゃんも相変わらず大変なんだ」

彼女がそう言ったそばから、有川久美は数人を教室を出て行ってしまった。打ち合わせでもあるのだろう。

ね、と君恵は彼女に目で合図する。

「あの調子だから、一緒に帰る余裕ないんだ。手伝おうかって言っても、久美ちゃん全部一人でやりたがるし」

「あの子の性格だし、それに部長だからねえ。すべてのことに責任を持つことは大切だとは思っけど。でも、がんばりすぎるのもね」「うん。私もそう思う。けど、今回はいつも以上にがんばってるんだ」

「いつも以上に？」

それを疑問に思ったのか、彼女が聞き返してくるが、同時に教室の外から彼女をを呼ぶ声がした。

「美香、早くしないと委員会始まるよ！」

数名の生徒が入り口付近で彼女を手招きしている。時間が差し迫っているらしい。

「あ、ごめん。忘れてた」

彼女は立ち上がり、手を振る。

「いまいくー！」

そして、くるりと君恵に向き直り、

「じゃあね。明日は一緒に帰れると思うから」

それだけ言って、荷物を持ち、小走りで行っていった。

すると君恵はぼつりと取り残される。誰か代わりの人間に声をかけようかと思うが、右も左もすでに自分たちの放課後の目的のために動いているようだ。

こうなれば仕方がない。

君恵は帰る支度を始めた。いつもならば、演劇部の練習があるのだけれど、今日はたまたま休みなのである。

しかし、君恵は教科書をカバンに入れながら思いとどまる。このまま帰るのはなんとなく忍びない。久美もがんばっているのだ。

やっぱり練習してから帰ろうかな。いつもの空いた教室で誰かが練習しているかもしれない。

そう考え、よし、と机の中の台本を掴んだ。それはクリスマスに上演することになっている舞台の台本だった。

「今回は、せっかく久美ちゃんが指名してくれた役だし」

小さく、君恵は微笑む。

『聖夜の歌姫』

そう大きく銘打たれた劇で、君恵はその劇中でヒロインを演じることになっている。その役は突然に決まった。

文化祭が終わったある日、突然久美に肩を叩かれ、その役に抜擢されたのである。予想外ではあったが、とてもうれしかった。

また《・・・》チャンスをもたらしたのである。

というのも、一ヶ月前の文化祭で上演された白雪姫は、本来であれば君恵が演じるはずだったものが、急遽降板せざるを得なくなつたという事情があるのだ。

君恵は今は元通りになっている足を触った。

あのときは交通事故で足の骨を折ってしまい、止む無く降板したのである。

現在はようやく普通に歩けるようになるまで回復していたが、やはり、その劇のことが心残りではないと言えば嘘になる。

おそらく久美は役をやり通せなかったそんな君恵を不憫に思ったのだろう。その決定に、周りの皆も賛成してくれ、異論を唱えたものはいなかった。

だからこそ、君恵にとっては、

「今回こそ、しっかりやり切らなくちゃ！」

ということなのである。

第三話 二人の帰り道にアンダーライン 2 (前書き)

作者のヒロユキです。

第四話なのですが、前回の三話で、小説の一部(続き)を投稿して
いなかったことに気がつきました。
そのため、今回の話の最初に一緒に載せています。以上、作者から
でした。

第三話 二人の帰り道にアンダーライン 2

しかし、その予定は早々に中止となる。教室から廊下に出たところで、とある少年に出会ったのだ。

「あ、須藤さん」

「小野村君」

小柄な少年の表情が自分の顔を見て一瞬ほころびかけ、目が合う瞬間、すっと頬を緊張させた。

「えっと、今から帰るの？」

遠慮がちにそう訊いてくる。

「うん、そのつもりだったんだけど……」

君恵は言いかけて止まる。

頭に浮かんでいるのは、劇の自主練だったが、それを優先すべきかと逡巡する。なぜなら、目の前の少年が「だけど」という逆接を用いたことで、少し寂しそうに表情を曇らせたのを見たからだ。君恵としてはそんな顔を彼にさせることを望んでいない。なにしろ彼は一ヶ月前、窮地に陥った演劇部を救ってくれたヒーローなのである。

それだけでももちろん無下に扱うわけにはいかないのだが、君恵にはそれ以外に彼への特別な感情もあった。胸の内にあるその温かな気持ちに触れると、ふと彼とのキスを思い出し、隠しようもなく胸が高鳴る。無意識に唇に触れていた。

「ううん、やっぱりなんでもない」
「へ？」

彼は面食らったようだ。君恵はそんな彼に微笑みかける。

「ねえ、もしよかったら、一緒に帰ろうよ」

「い、一緒に？」

「もしも、よければだけど」

「ええと」

緊張しているのか、彼はひとしきり視線を泳がせた後で、どもりながら承諾する。

「え、いや、ええと、是非、一緒に帰りましょう」

「ふふ、ありがとう」

君恵はうれしくなり、頷いてまた微笑んだ。

「そつえば、堂野君はいないの？ いつも一緒にいるでしょ？」

校門を出た辺りで君恵が薫にそう訊いてきた。町並みに続くゆつたりとした坂道には、冷たい木枯らしのせい、木々の紅葉が日に日に進み、枝を離れた落ち葉たちがまだら模様には散らばっている。

「ああ、亮介？」

薫の足が茶褐色に変色した落ち葉を蹴った。

「あいつは、今日は図書室にいるよ。本の整理をしてるんだ」
「あれ？ 堂野君って図書委員だった？」

君恵は首を傾げながら言う。薫は首を振った。

「いや、違うよ。これは亮介の趣味みたいなもんでさ。月に一度の蔵本整理って聞くと飛んでいって図書委員の手伝いをするんだよ」

薫は彼の本にかける熱い思いをよく知っている。彼が四六時中、暇なときはいつだって片手に本を開いているところを見ているし、薫と友人関係になる以前は、本が第一の親友と呼んでも過言ではない状態だったことも聞いていた。事実かどうかはさておき、一ヶ月に三十冊も本を読むという話も知っている。

ともかく、彼の心は常に文学に接していたいらしかった。文字と文字の間に横たわる深遠なる宇宙の神秘に触れ、それと戯れることを心の喜びとしているのである。

まあ、とにかく薫にはすっかりさっぱり分からないことだ。口の悪い山下に言わせると、あれは「本の虫ならぬ本のストーリーカー」ということだそうだ。

「へえ、変わった趣味だね」

「そう。それをすると、普段は見ているようで見えない本を見つけることがあるらしくって、それは亮介にとって無上の幸福ってやつらしいよ」

説明すると、君恵もやはりその楽しみを理解するに至らなかったよじりで、

「新しい出会いはいいことだよな」

とそれだけ言う。

「まあ、だから今日は一人なんだ」

「ふうん」

しばらくすると、稲が刈られた寂しげな田んぼが見えてくる。冷たい風の中、半ズボンの小学生たちがその中で鬼ごっこで遊んでいた。

鬼がなぜか二人いて、固まっている集団を挟み撃ちにしている。そんな中、逃げ回っている一人がつかまらずいて転ぶと、渴いた空気に笑いが広がった。

薫はそれを見ながら、自分には走り回るなどとても無理だと寒さに首をすぼめた。ちらりと隣の君恵を側め見る。

すると、彼女も薫と同じように身体を縮めると、ふうと短い息を吐き出す。そして、制服の袖を引っ張ると指で掴んで、熱の放出をなるべく防いでいるようだった。

「もうずいぶん寒くなったよね」

君恵がしみじみと言う。

「あ、ああ。うん。だから、家にはコタツが出てるんだ。気持ちよくて、いつも入り込んで寝ちゃうよ」

「コタツねえ、コタツかあ。ほかほかだね、ぬくぬくだね。私も大好きなんだ」

君恵はまるで鼻歌を歌うように、リズムをつけて話した。まるで、小鳥のさえずりのようだ。

唐突な彼女の「大好き」という言葉に、薫は胸がきゅんと反応しアンダーラインを引きかけるが、思いとどまる。そんなことをしては、なんだか、男として失格な気がしたのである。

気を逸らそうと、別のことを考えた。コタツのことだ。

「そ、そうだね。俺はぬくぬくとコタツに入ってテレビ見ながらお菓子を食べてると、すごく贅沢って気がする」

「ああ、分かるなあ。私は最近ハマってるドラマがあるから、お母さんと一緒にそれを見ながらコタツに入るの。そこでアイスなんて食べてると、やっぱり贅沢だよな」

「へえ、コタツでアイス食べるのかあ」

確かに、と薫は頷く。冬場に冷たいアイスを食べられるのは身を温めるコタツがあつてこそだろう。

「そういえば、そのドラマって、例のアレ？」

思い当たる節があり、訊く。

「そう、『都那賀一郎の事件簿』だよ。あれ、とっても面白いよね」

彼女が言ったのは、最近流行っているテレビドラマのことである。コメディを交えたミステリードラマで、クラスメイトたちが話題にしているのを薫も何度か耳に挟んだ。

とある街の中心地にある豪邸。そこに住んでいる富豪の一家。主人公の都那賀一郎はその家の執事をしているのだが、そこで毎日のように事件が起こる。

その富豪の一人娘が、親子喧嘩の末、毎度のように家出をしてし

まづのだ。普通の家の子供なら友達の家へ逃げ込むといったことが常套手段だろうが、そこは富豪の娘、ただの家出でも桁が違う。

あるときは、有名な三ツ星ホテルに泊まっていたり、またあるときは、豪華客船に乗ったり、またあるときは、常夏の南国の島に逃げ込んでいたりする。

都那賀一郎はそのたびに富豪の主人から命じられ、彼女を探しに向かうのだが、毎度やっかいなことに、彼女を見つけた先で謎の殺人事件が起こる。好奇心旺盛なその富豪の娘は事件の顛末を知るまで頑固に居座ろうとし、都那賀は毎度その事件の真相を解き明かす羽目になるのである。

これがワンパターンながら、中々に面白く、薫も見ていたりする。

「ストーリーも面白いけど、都那賀一郎役の船見朔太郎ふなみさくたろうさんがカッコイイよね」

彼女は嬉々として言う。最近ドラマやバラエティなど、引つ張りダコの俳優だった。もともとは確か雑誌のモデルをしていたはずだが、若い女性を中心に徐々に人気に火がつき始め、最近では彼をテレビで目にしない日はないほどである。

「とても男前の人でしょ？」

「そうそう、特にあのお決まりの台詞があるじゃない。『お嬢様、お迎えに上がりました』っていう」

そう語る君恵の瞳は夢を見るようにうつとりとしていた。それをじっと見つめながら、薫はそのシーンを脳内で再生してみる。

なるほど。彼女の言う通り、あれほどのイケメンが手を差し伸べ、そんな台詞を吐けば、文句なしで恋に落ちてしまいかもれない。

自分とその俳優を重ね合わせようと薫は努力したが、どう考えても大きな不和を感じてやめた。どこか勝っている部分も見当たらない。身長も顔も男らしさもどれをとっても清清しいほどに負けている。

まあ、それもそうか。薫は肩をすくめる。

相手は今をときめく人気若手俳優で、こっちはただの小柄で幼い顔した中学二年生だ。勝負は端からついている。

とりあえず、男としての勝負は諦め、薫は他の話を振る。

「そ、そうだ。須藤さん、今度のクリスマスに演劇部の舞台があるんでしょ？」

「うん。そうだよ。『聖夜の歌姫』っていうの。もう話してたっけ？」

「ううん、亮介から聞いた。多分当日は、俺と亮介、山下が劇の手伝いとして参上することになってるはずだから」

薫は先日の山下との会話を思い出す。あの後結局薫たちは、追いつがる山下と共に参加することに決めていたのだ。やはりクリスマスイブに君恵の近くに行けるといふ事実は薫にとって魅力的だった。すると、君恵も合点がいったようである。

「ああそうだ。久美ちゃんもそう言った。当日作業人員が増えるから仕事が楽になるって。小野村君たちのことだったんだ」

「それで、須藤さん。今回はどんな役なわけ？」

薫はドキドキしながら聞いた。すると、彼女は恥ずかしそうに少し俯きながら答える。

「ええとね。なんだか、前回の時はすぐくはしゃいで言っちゃった

から、また言うのは恥ずかしいんだけどね、その、歌姫……主人公の役なんだ」

「ええ！ ヒロインなの！？」

薫は目を丸くする。

「う、うん。でも、あんまり大きな声で言っちゃやだよ」

「あ、ごめん」

君恵は面映そうに口元を隠した。目を伏せ、そっぽを向く。きつと文化祭の劇でヒロインを演じることをあれほど喜んでいながら、結果、出演できなかったことを思い出し、恥ずかしいのだろう。それが分かった薫は、そっと励まそうとした。

「大丈夫だよ。須藤さんなら、今度は必ず上手くいく」

「え？」

「あんまり説得力ないかもしれないけど。でも、絶対、成功するよ」

「小野村君……」

「ええと」

「うん、ありがとう」

彼女はそう言って優しく微笑んだ。それを見て、薫も無条件にうれしくなる。笑顔の彼女は本当に可愛い。いつまでもこうして傍で見たいほどだ。しかし、その表情が少し寂しげに曇った。

「でも、残念だね。本番、小野村君たち見れないんでしょう？」

「何で？ 劇の準備作業ならずと舞台裏にいると思うから見れると思うけど？」

「小野村君、聞いてないの？」

腑に落ちない思いに、薫は妙な汗を掻く。嫌な予感だ。

「な、何を？」

恐る恐る訊いた。すると、彼女は人差し指を立ててこう言った。

「作業人員ってのは、街頭でのチラシ配り人員ってことだよ」

その途端、薫が二の句を継げなくなったのは言うまでもない。

第四話 有川の思惑にアンダーライン 1

「はい、はい。当日の予定はそういうことでよろしかったですね？」
「ああ、それでいいと思うよ」

「それからおそらく、次の日の午前中には全て片づけを終えていると思われますので、その点もご承知おきください」

「うむ、了解だ。そうだ、劇の大道具などの運搬はどうなったね？」
「そちらも抜かりなく手配してあります。演劇部の生徒の保護者の方が、当日、トラックを回してくださるそうで」

「なるほど、やはり段取りがいい。わざわざ指摘するまでもなかったね」

「いえ、これくらい演劇部の部長なら当然成すべき仕事です。褒められるほどのことではありませんよ」

「何を、謙遜せんでもよろしい。褒めたわしが言うのもなんだが、中学生なら中学生らしく素直に褒められてみるものだよ」

「そうでしょうか？」

「ああ、君のようにてきぱきと物事に取り組める人間というのは、大人にもそれほど多くないと思う」

「は、はあ」

「うちの教師の中にもまだまだ考えが甘い楽観主義なやつらがある。どうにかなるさ、なんとかなるさで、この世の中渡つては行けんというのに。その点、君は本当に非の打ち所のない素晴らしい働きっぷりだ。是非、うちの生徒に欲しいくらいだよ」

「いえ、そんな」

「まあ、今日のところはもう話すこともないだろう。それじゃあ、当日は楽しみにしているよ」

「あ、あの、申し遅れておりましたが……」

「どうしたね？」

「例の約束は……」

「約束、ああ分かっているよ。当日の劇が好評であれば、だったね。どうなるかは分からんが、その結果によっては『君の願い』を叶えてあげよう。約束する」

「本当ですか!？」

「わしは嘘はつかんさ。上手くいった暁にはきちんと話を通しておく。なら、失礼させてもらうよ」

「はい、それでは失礼します。泉田中学校長様」

ふう、受話器を下ろして有川久実は胸の内に鬱積していた重たい息を吐く。気持ちを落ち着けるために前髪を撫で付けた。

いくら多くの人間から恐れられている彼女と言えど、他校の学校長と話すとなれば、それなりに緊張する。肩が重くなった気がして、首の辺りを揉んだ。

「問題ないようだね」

椅子に腰掛けたまま、静かにそう言ってお茶を飲んだのは演劇部顧問の村松だ。ごつごつとした黒縁の眼鏡をかけ、貫禄ある髭を生やした中年の男性教師である。職員室の机の上で、書類に何かを書き込みながら、久美のほうへ目を向けていた。

「有川君、君の手際によさにはいつも感心するよ」

「そんな、先生まで、よして下さい」

久美は恥ずかしさ紛れに、咳払いする。

「何を言う、本来であれば向こうの校長への連絡も、すべて私がやらねばならないというのに、まさかその役を君が買って出るとは思

わなかつたよ」

「それは部長として……」

「当然のことです、か？」

村松の口元がにやりと笑う。

「……」

台詞の先を越され、居心地が悪くなった久美はつい、閉口してしまった。その台詞はいつものことだが、ここ最近はずっと何度も使っている気がする。おそらく、部長としての意識が高まったせいなのだろう。それくらい、久美は今回の劇にかけていた。

「まあ、がんばることはいいことだ。特に学生時代というのはな。

熱中して事に当たることは人生の大きな糧となる」

「人生の糧。そうですね」

「しかし、あまりがんばりすぎることもしいかんぞ。目の前の事物に視界を塞がれ、周りが見えなくなる」

そう言う、村松は少々久美のことを案じているようだ。その気遣いに素直に頷く。

「はい、分かっています」

「それならいいが」

「では、失礼しました」

そう言って、職員室の出口に向かって歩き出そうとすると、村松が呼び止めた。

「ちょっと待ってくれ」

「はい、なんででしょうか？」

「少し、小耳に挟んだことなのだが」

「はい？」

すると、眼鏡の奥で村松の目が縮こまった気がした。

「君は、お、小野村薫という生徒を演劇部に入れようとしていたそうだが、あれはどうなった？」

急にどもり始めた彼の顔は少々青ざめている。然もありません、と久美は心の中でせせら笑った。

この教師は、およそ一月前に小野村薫のことを調べようと探りを入れ始めるといふ、余計なことをした。そして、それを察知した山下と堂野によって見事その目論見を打ち崩されたのである。

確か、幽霊の声によって脅されたのであるが、どうやら未だにそのことを信じているらしい。

小野村薫が怖いのだろう。

あんなチビがねえ。

久美は首を振る。

「いえ、もう諦めましたよ。彼は別に演劇がやりたいわけではないと言っていました」

「そ、そうか」

すると、あからさまに村松は安堵の表情をする。もし、彼が演劇部に入ったらと思つて、夜も寝られない心持ちだったのだろう。

「それでは」

「ああ、行きたまえ」

久美は職員室のドアを開けた。

第四話 有川の思惑にアンダーライン 2

廊下に出ると、どこからともなく誰かが駆け寄ってくる音が聞こえた。久美は振り返る。

「有川部長！」

ようやく見つけたといった表情で、息を切らして名前を呼んだのは、後輩の奥山紗江おくやまのえだった。目の前で立ち止まり、廊下の壁に手を着くと、肩を上下させて苦しそうに呼吸している。

「さ、探しましたよ」

「あら、どうしたの？」

久美は暢気だ。

「どうしたのじゃありません。よ、ようやく吹奏楽部の方から了承するという返事を頂きました」

彼女は天井を、つまり音楽室の方を指差しながら、息を吸いつつ報告する。

「それは朗報ね。わたしが直談判する手間が省けたわ」

「でも、説得に二時間もかかりましたよ。大変だったんです」

紗江は口を尖らせる。

「芦沢あしぞさんはやっぱりご立腹だったかしら？」

「クリスマススイブに他のクラブの行事に付き合わされるなんて、言

語道断だと咆えてました」

「ふふ、彼女らしいわね」

「らしいとからしくないとかいう問題じゃありません。私、胃が干切れそうでしたよ。先輩からあんな剣幕で怒鳴られたら、普通シヨツクのあまり引きこもりになります」

いつも目上の人間に対して礼節を重んじる彼女が珍しく久美に対して怒りを露わにしているようだ。心なしか襟元も乱れている気がする。

久美はさすがに芦沢千葉あしざわかずはの相手を後輩にやらせるには少々荷が重すぎたか、と反省した。

「はいはい、後から愚痴を聞いてあげるから。それより、どのくらい集まったの？」

紗江はまだ何か言い足りなさそうだったが、渋々口を開く。

「……はい。強制はしないという自主参加で、なんとか、十名ほど」「何とかなるって？ それで劇のBGMは奏でられそう？」

「はい。楽譜をお渡ししたら、鬼の形相で譜面を睨んでましたが、すぐに準備を始めると言っていました」

楽譜を漬すように掴み、皺寄せた芦沢の顔が目には浮かびそうだ。心中でほくそ笑む。

「何もそんなに怒らなくてもねえ」

「いえ、怒りますよ、普通は」

紗江の目が呆れたように細くなった。

それを側め見てから、久美は廊下を歩き出す。すぐに彼女が後ろ

を追ってきて、こう質問した。

「あのおう、吹奏楽部のことですが、少々知りたいことが」

「何かしら？」

「どうしていつも通り、CDでのBGMではなく、わざわざ吹奏楽部に依頼を？」

「何よ、その方が直に楽器の音が入って、臨場感というか、雰囲気が出るじゃない。そのためよ」

「はあ、確かにそうですね」

「質問は終わり？」

訊くと、紗江の眉はまだ不満そうに曲がっている。程なく口を開いた。

「そもそもどうして今回はこの中学校ではなく、街の泉田中学校で舞台を行うんですか？」

久美はその質問に眼鏡の縁を持ち上げる。レンズに光が反射した。

「それはもちろん、こんな場所でやるよりも一般の人も向こうの生徒も大勢集まるでしょうが。いくら演劇が上手くても、それを人が見てくれないとやる意味はないわ」

「まあ、確かにそうですね。でも、どうやって、その校長さんにお話しを？ よく場所を貸してくれましたね」

確かに、彼女が疑問に思うのも無理はないと思った。普通、他校の生徒同士が仲良くなることはあっても、校長と懇意になり、場所を貸してくれることなど、訊いたことがないのだろう。

「実は去年の文化祭、あそこの校長先生、うちの演劇を見に来てた

のよ」

「あ、私が居ない時ですね」

そう、その当時は、今は部長をしている久美もまだ一年で、上級生がやっている劇を傍から眺めている程度だった。しかし、その頃からいつかは自分が部長となり、この演劇部を綺麗に指揮することを野心として抱いていた。それこそ、自分がこの部に対して成すべきことだと思っていたのだ。

そして、文化祭の劇の最中、舞台の隅で座っているそんな久美に話しかけてきたのが、その校長先生だったのである。

『君は劇には出演しないのかね?』

確か、こんな言葉だったと思う。

そんなきっかけで、久美と泉田中学の校長との会話が始まった。久美が劇が好きなのだというと、校長も頷いた。話が弾み始めると先輩たちが演劇をしているのを二人で眺めながら、これは演技が臭いとか、台詞が長すぎるとか、展開が冗長だの、久美はおよそ後輩にあるまじき辛口の批判を繰り広げた。

『いつかは、絶対私がこの部の部長になって見せます』

そうして、こつ高らかに宣言すると、校長は白い歯を見せ手を叩いて喜んだ。

『若い者はそのくらい威勢がいいほうがいい』

そして、別れ際にはこつも言った。

『もしも、本当に君が部長になったのなら、是非うちの中学に舞台

をしに来てくれないか？』
『そちらの学校にですが』

久美はさすがに驚嘆の声を出した。

『もしも、その気があればだが。わしは君が部長になった演劇部の舞台を間近で見て見たいのだよ。そして、うちの生徒たちにもね。と言っても、君が部長になれば、だがな』

『な、なりません。絶対に！』

『ふふ、ではがんばりたまえよ。未来の部長君』

そう言って、彼は帰っていった。

そして、時が流れ、一年後の現在。久美は立派に演劇部の部長として活躍していた。

泉田中学の校長はその話を忘れずに覚えていたようで、その事実を知ると、つい数ヶ月前に連絡があったのだ。ボランティアでいいなら、クリスマスにうちの体育館を使って舞台をしないか、と。

そして、部員が劇をする機会が増えるなら、と久美は二つ返事でオーケーしたのだ。

「へえ、そんなことがあったんですね」

話を聞いて、紗江は目を丸くしている。関心したように、久美をまじまじと見つめた。

「やっぱり、昔から部長は部長だったんですね」

「何よそれ」

「そのまんまの意味ですけど？ で、だから今回は力を入れている、と？」

「やっぱり大勢の人に見てもらおうからね」

「はあ」

しかし、紗江は未だに消化不良の難しい顔をしている。おそらく、大勢の人に見てもらおうという理由を差し引いても、久美の熱の入りようには不審感があるのだろう。

なにしろ、たった今、半強制的に吹奏楽部に頼みごとをしてきたばかりなのだ。いくら久美でも普段なら他のクラブを自分の都合に巻き込むようなことはしない。

いつでも暇な帰宅部の少年を無理やり劇に参加させたことはあるが、その程度である。

紗江の眉間に皺が深くなっていた。

久美はそんな彼女をちらちらと見ながら、どこまで話すべきかと逡巡したが、いずれは全て分かることなのだ。素直に話しておくべきだろう。

「……他にも、理由があるわ」

「他にもですか？」

「今回の劇で、観客が大勢入り、好評だったなら、今度はもっと大きな場所、大きなホールを貸しきって劇をやらせてくれるって」

「へ？ そ、それって、すごいじゃないですか！」

彼女は興奮を抑えきれないのか、その場ではたばたと足踏みをした。

「何でも、その校長の弟さんがね、大きな会社の社長さんらしくて、その会社の経営の中でイベントに使うホールの会場提供の仕事もしてるっていうのよ。だから、その弟さんに頼んで、そこを使わせてくれるって」

「は、はあ」

夢見心地の彼女は曖昧な返事だ。

「やっぱりそういった場所で劇をすることには大きな意味があると思うの。設備が整っているし、実際の演劇に近い状態だとも思う。皆でやればいい経験になるわ。演劇部の部長ならそんな場所を貸しきって劇を出来るなら本願成就よ」

野望の持つ執念というか、そんなものを感じさせる久美の声に紗江は目を瞬かせた。

「それで今回はこんなに無茶をやってるんですね」
「もちろんよ。出来ることはとことんやらなきゃ」

すると、廊下の向こうからまたしても、久美に駆け寄ってくる体格のいい少年が現れた。どたばたと盛大な足音を立てている。久美は顔をしかめた。

「有川部長ー！」
「あれ、馬場君？」

なにやら、数十枚のコピー紙の束を持っている。紗江が有川の後ろに隠れた。きっとそれはガサツな彼を少しでも自分の視界に入れたくないためなのだろう。

「どうしたの？」
「どうしたのじゃないですよ。ほら、言われてたこと、裁縫部に注文してきました」

彼が持っているのは演劇部が毎度、裁縫部に衣装の発注する際の

注文表の束だった。

「これ、裁縫部に無理言って作ってもらいましたよ」

「ご苦労、ご苦労」

「ご苦労じゃないつすよ。俺、部長さんに門前払いにされかけたんですから、文化祭も終わったばかりなのに、そんな無理な注文請け合ってもらえるかって、寝耳に水だって」

「そんなに怒ってた？」

げに不思議なことじゃ、そういわんばかりに久美は首を傾げてみせた。もちろん、そう思っている振りである。

「当たり前ですよ。俺の立場も考えてください。いくら部長から頼まれたことと言っても、俺は向ここの部長の前ではただの後輩ですからね」

「ふうん」

「説得に一時間もかかりました。お前はともかくそのでかい図体を削って来いという理不尽この上ない要求も突きつけられましたよ」

それを聞いて、背後の紗江がくっくと笑っている。すると、彼が持っている注文表の一部が見えたのか、彼女が指差す。

「うん？ 馬場君、それ何？」

「この衣装のことか？」

見ると、ペンで簡単に描かれた衣装のデザインの上に「マッチ売りの少女」と名前がつけられている。もちろん、今回の劇には登場しないキャラクターだ。

「部長、これは？」

「ふふふ、それは今回の秘密兵器よ」

久美はそう言って不敵な笑みを浮かべた。

第五話 亮介の不安にアンダーライン

数日後の日曜日。

人々の行き交う町の商店街にはポケットに手をつ突っ込みつつ歩く、クラスメイトの三人の少年たちの姿があった。

しかし、妙なのは全員が同じ年齢でありながら、そうとは思えないほどでんでばらばらの体格をしていることだ。一人の背丈は三人の中で一番大きく、一人はとても小さいため、三人組は不釣り合いにでこぼこしている。まるでこれでは、携帯電話の受信棒のようだ。

すると、一番背の小さい少年が大きなため息を吐き、背中を丸めて小さくなった。ただでさえ小さい体がさらに縮こまる。

「なんだかなあ。山下に従ったせいだよな」

薫はそう言って、隣の少年の腰の辺りを小突いた。

「う、うるさいな。俺だって後から聞いたんだよ。街でチラシ配りだなんてな。劇場に居られないのかよ」

「何が彼女に一番近い切符だよ。須藤さんは劇場でヒロインを演じ、俺は寒空の下でビラ配りだ。これじゃあんまりだ」

「まあまあ。決まったことを今さらくたぐだ言っただってしょうがないだろう?」

「それは、亮介の言う通りだけど」

薫は山下の横を歩いている亮介を見上げる。彼はいつだって冷静で、落ち着いて物事を見定めている。

しかし、彼の淡然とした態度は、薫の中のくすぶりまでをなくし

てくれることはない。それに薫には彼女の傍にいられない以上にシ
ョックなことがあった。

「俺たちは本番の劇も見られないって、須藤さんそう言ってたぞ」
「あん？ それはまたどういう意味だ？」

山下が眉をひそめる。やはり彼も初耳だったようだ。

「今回は有川の指示でチラシ配りつてのを劇の開始ギリギリまで行
う。それが終わって体育館に戻ってきてても、舞台は本番中。邪魔に
なるから舞台裏には入れてもらえないんだって」
「……それでも、観客の席があるだろ？」

彼は言い返してくるが、薫は力なく否定した。

「それは観客用だから、俺たちは座らせてもらえないだろうって」

「な、なんだあそりゃ」

「有川が言ってたそうだ」

「何？」

「今回は間違いなく座席を満席にしてみせるって。つまり、本番は
満席で座れないんだろっな」

それを聞いて、山下は意味が分かったようで、なるほど、と絶望
の声を漏らした。

「一度決めたことは何が何でもやり通す、か」

堂野は、俳句を詠むように調子をつけて言う。そう。それが、あ
の有川のやり方で、彼女が学校で恐れられている大きな理由だった。
彼女は目的のためならば、どんな手段をとることも厭わない。

彼女が満席にすると宣言している以上、結果もそうなるに違いないことはほぼ確定だった。

「となると、残された劇鑑賞の道は立ち見ぐらいか？」

「どうだろうね。それを聞いたら、須藤さんはとても微妙な返事だったよ」

「何て言ってた？」

「立ち見だって邪魔になるかもしれないし、チラシ配りの人材は仕事が終わると受付の係と交替させられるかも、とか言ってたし」

「俺たちが受付の仕事をするのか!？」

驚嘆した山下に薫は自身もうんざりしながら説明した。

「今回はとにかく人手が足りないんだってさ。当日がクリスマスイブってだけあって、他のクラブに頼んでみても、予定がある人が多くて、ほとんど演劇部の人間だけで乗り切らないといけない。たまたまそこに手を貸している俺たちを、有川は散々使いまわすつもりなんだろうな」

言いながら、その儂き事実で大粒の涙でもこぼしてやろうかと思った。結局自分は好きな女の子の傍に行くことなど許されず、魔王の手によって引き離されている映像がくつきりと目に浮かんだ。その魔王が誰であるかは言うまでもない。そしてその魔王の手に誘った魔王の手下も目の前にいた。

そいつは、なぜか笑った。

「いったい、今の話のどこに笑える要素があった？ ああ？」

「ハハ、有川らしいぜ」

「山下、笑えないぞ！ 何が悲しくて、クリスマスイブに須藤さんの劇も見れず、寒空の下で受付なんてしなくちゃいけないんだよ！」

「そうだな。深刻だな。これじゃあ小野村が須藤さんにアタックするチャンスが劇の後片付けの後しかないな」

突如彼の口から飛び出した、思いよらぬ言葉に薫はたじろぐ。

「おい、いつから告白することが前提になってるんだよ」

「なんだ、しないのか？ そのために今日は戦略会議をしてるんだろっ？」

「……彼女へのプレゼントを買いに来ただけだ」

薫は自分のポケットに入っている財布を触った。そこには薫が溜めている金額中、最大限に引き出せるだけの金額が入っている。

「それはもはや告白という選択を選び取ったに等しい」

山下は人差し指を立てる。

「何で？」

「須藤さんの気持ちを考えてみるよ。なんと言ってもクリスマススイブ、前回の文化祭の劇を救ってくれた小野村君から、クリスマスプレゼントをもらう。そんなことがあれば、その先を想像して期待するってもんだろっ？」

「告白、なんて。俺がそんな大それたことが出来ると思ってるのか？」

「まあ、そうだよな。小野村君、彼女からご褒美のキスをされても、それでも告白できなかったんだもん」

山下は頭の後ろで腕を組み、口笛を吹くかのごとく、さらりと言う。しかし、その一言は薫の胸に突き刺さった。

「お前、なんだ、その憎たらしいほどの情報収集能力は！」

「ふっふっふ。小野村君、なめちゃあ困るな。いまや全国に散らばり構築された俺の信頼安全情報ネットワークは、ホワイトハウスの今日の昼食メニューでさえ容易に把握できるんだぜ」

「じゃあ、ちなみに聞いておこつ。大統領の今日の昼食は？」

「無論、味噌カツ弁当だ」

「……山下、お前のおかげで日本の未来は明るいよ」

「ありがとうな。今後も平和主義、山下党をよろしく！」

「今日の目的は俺らのだらだらゆるゆる弁を思う存分發揮することではなかったはずだ」

山下がそう言い出したのは、それから数十分後だった。

商店街の片隅で比較的静かに営まれている小さなファーストフード店に入り、コーヒーを啜っている薫たちがいた。若者達が集う店には珍しく、穏やかなクラシックがBGMに流れている。

カップに砂糖を入れ、山下はかちやかちやとスプーンで混ぜている。

「来るべき作戦決行日に向けて、戦地の下見を兼ね、この薫戦闘員にしかるべき武器を品定めに来たのだつたな？」

「にやにやと迂遠^{うえん}な表現をするのはよせ、気分が悪くなる。繰り返すが、ただ須藤さんへのクリスマスプレゼントを買いに来ただけだ」

フライドポテトにソースをつけながら、薫は手で払う仕草をした。

「とりあえず、泉田中学校はこの商店街の近くにあるらしい。向こうに公園があつてそこを通り抜けて、交差点を直進をした先だ」

山下が言う。それに頷きつつ、堂野が話した。

「有川のことだから、ピラを配る場所はもうあらかた目星をつけてるだろう。俺の予想だが、人通りが多い、この商店街から駅に向かう通りを重点的にピラを配るんじゃないかな」

「ピラ配りか……。なあ、山下、有川に頼めないのか？ どうにか劇場での道具の運搬の仕事をさせてくれないか、とか」

「無理だと。とりつくしまなし」

彼は器用に片目だけ開けて、薫を見た。

「何で？」

「さあな。特に薫は絶対にピラ配りの仕事で固定だそうだ」

「な、なんだよそれ。こつちは手伝ってあげてるのに融通が利かないな。その上、何だか俺の役目が最初から決まってたみたいだし」

薫、そのことだが、と堂野が顔を上げる。真剣な表情で顎の下で手を組んだ。どうやら彼には最初から考えがあつたようだ。

「おそらく、有川は最初からなんらかの理由で山下に今回の劇の準備を手伝わせ、その付属品として俺たちを巻き込むことが計算にあつたようだ」

「な、計算済み？」

「山下なら、大方俺たちに声をかけると考えてたんだよ。もしそうでなければ、自分から頼みに来てただろうな。山下の奴だけじゃ不安だからとかなんとか。理由つけてな」

「は？ 何の恨みでだ？」

すると、彼は間を置き、窓の向こうの行き交う人々の方に視線を向けた。今年も終わりに近づき、新年を迎える準備をしているのか、

人々は皆一様に急がしそうで、早足に見える。
彼が言う。

「俺たちは良くも悪くも、文化祭の件で有川に目を付けられてんだよ。有川は自らの目的のためにはありとあらゆる手段を講じる。薫だつて前に同じようなこと言つてたろ？」

「う、うん」

彼女が周囲の反応を歯牙にもかけず、自ら決めた方法を貫き通すことは自分だけでなく、多くの生徒が知る事実だ。

「有川、また何か企んでる？」

「この劇を行う上で、何か裏の目的のようなものがあるのかもしれない」

山下が、ずっと冷えたコーヒーを飲みかけて止めた。意味ありげにカップをおく。

「それなら、なんとなく聞いてることがある」

「何だ？」

薫が興味を示すと、彼は今回の劇場がどうして泉田中学で行われるのか、有川とこの校長との仲、それから先、今回の劇が好評であれば、さらに大きな劇場で劇をさせたいという約束をその校長としているらしい、という話をした。

「なるほどな」

「彼女には次なる野望があるってことだ」

すると、その話を聞いた堂野の目が急に険しくなる。そうか、そ

れであんなに、と呟いた。

「どうかしたか？」

「実は、この前彼女に会った」

「は？ いつ？」

唐突に彼が言うので薫は面食らう。

「この前の、図書室の蔵本整理の日だ」

「何か話したのか？」

「何て言ってた？」

山下も気になるのか、口にスプーンをくわえて顔を近づける。

「いや。俺は遠くから見ただけだ。だから会ったではなくて、見かけたという表現が正しいな」

「何か気になることが？」

すると、急に堂野は黙り込む。彼らしくないその釈然としない態度に薫は疑念を感じた。

「どうしたんだよ？」

「彼女はいつも通り、いや、いつも以上に頑張ってたんだ」

「それが？ 普通だろ？ 目的があるんだし」

「違う。俺は感じたんだよ。今回の劇に彼女が全力を傾け過ぎてるっていうか、その情熱が強すぎるというか。ともかく、それらを総合して考えた結果、彼女は一生懸命すぎなんだ。一片の配慮なく他を無視して、何から何まで自分でコントロールしようとしている」

「……」

「そういう目的があったとすれば、そこまでしているのも納得がい

くが……」

薫には彼が何を言おうとしているのかが分からない。

そして、この言葉に続く彼の台詞がさらに彼らしくないものだった。

「どうにも俺は、彼女のことか心配だ」

薫は思わずアンダーラインを引いてしまった。

第六話 君恵と千葉にアンダーライン 1 (前書き)

作者のヒロユキです。

すいません、ずいぶん更新が止まっていたでしたね。

最近、執筆スピードに急ブレーキがかかっておりまして、この有様です。

この六話は一話で終わリたかったのですが、そのブレーキのせいか、まだ書ききれれておりません。

そのため、とりあえず、書けているところまで掲載しようと思いません。

第六話 君恵と千葉にアンダーライン 1

薫たちが町をだらだらと歩いている頃、休日の綾坂中学校では、演劇部による練習が行われていた。

その舞台の前で、腕を組んで屹立し、部員に隙のない喝を飛ばす、有川久実の姿があった。

長い髪を頭の後ろできりりと結び、眼鏡の奥には容赦のない峻烈な瞳が光ってる。今の彼女ににらまれては、百獣の王もその牙を見せる前に慄き、尻尾を巻いて逃げ帰ってしまうに違いない。そんな尋常ならざる空気が舞台には渦巻いている。

「ほら！　そこ、端が引き摺られてるわよ。ちゃんと支えなさいよ！」

「は、はい」

「通行人！　台詞のタイミングが早い！　商人が舞台の袖へ消えたのをしっかりと見送ってから、ぼそりと呟くように！」

「分かりました！」

「ちよつと、衣装係、何してるの？　王子役の服に皺寄ってるわよ。きちんと確認して！」

「すいません。すぐに直します」

彼女に注意された部員たちは半分悲鳴を上げるように返事をし、ばたばたと舞台の上で慌てふためく。そうではなかった他の部員たちは、ほつと胸を撫で下ろすと同時に、今に自分が名指しで攻撃されるのではないかと、戦々恐々だ。

ライトが当てられた舞台の上では逃げ場などどこにもなく、観客の居ない周囲の暗闇でさえ、固唾を呑んで有川の動向を見つめているようである。

演劇部の練習が楽なものではないのは毎度のことだが、今回の練習ではいつも以上に、殊更に、厳しさに拍車がかかっていた。

舞台裏で自分の出番を待つ須藤君恵も、いつものようではない、張り詰めた緊張に、僅かながら手が震えていた。

本番でもないのに、胸がドキドキと脈打ち、失敗をしないようにと何度も脳内で台詞を繰り返した。少しでもしくじれば、彼女からこっぴどく叱られそうで、冷や汗が垂れる。友人でも舞台の上では、彼女に躊躇の二文字はない。

「おい、須藤、大丈夫か？」

ふいに、名前を呼んできた人物がいる。

「はい？」

振り返ると、そこにいたのは同じ二年の男子部員だった。

「妙に顔色が悪いぞ」

「え、そ、そうかな？」

掌を頬に当て、体温を確かめてみた。血の巡りが悪いのか、確かにひんやりとしている気がする。

「深呼吸しろよ。首をほぐして、リラックスするんだ」

君恵は言われた通り、首を回し、ゆっくりと両手を振り上げ、1、2、と回す。ふつつと長いが出た。しかし、肺の底面に横たわる、不安の源は頑固で、簡単に剥がれてくれそうにもない。

それを男子部員は看破したのか、

「むしろ、緊張度が増しているように見えるが？」

そう言った。

「ええと、どうしてだろうね？ へへ」

原因は分かっているものの、君恵は苦笑いしてみた。

彼は憂鬱そうに肩をすくめ、そつと幕の隙間から舞台の下に目を向ける。

「まあ、有川があの様子じゃ、仕方ないか」

「やつぱり、久美ちゃん。いつもより張り切ってるよね」

君恵が言うと、彼は振り返って目をあわせ、首を僅かに横に振る。苦々しげに口をへの字にした。

「張り切ってるなんてもんじゃねえよ。こりゃやり過ぎってもんだ」

「やり過ぎ……」

「見れば分かるだろ？ 場の空気が重たすぎる。部員の皆の顔も引きつってるぜ。これじゃいい演技もできやしねし、適切な演出も意味がねえ」

やり過ぎなどという批判には、君恵としては簡単に首肯しかねるものだったが、まるで舞台が泥沼に浸かっているかのような重量感は何ともしがたかった。

その根源は間違いなく、未だ舞台の前で腰に手を当て、大声を張り上げる少女である。

「あいつが何を考えてるのか知らないけどよ。全く、うぜえったらねえよ」

「……う、うざいって」

友人への批難に君恵は眉をひそめた。

「ああ、ごめん。少し言いすぎか」

すると、彼はばつが悪そうにこめかみの辺りを指で搔くが、すぐにこうつづけた。

「でもな、今回そう思ってるのは俺だけじゃないはずだぜ。他の部員だって、二年生は特にな」

「……」

君恵はその発言に言い返せず、閉口する。確かに、彼が言っていることは事実には違いなかったのだ。毎日の練習の後、部員たちがひそひそと久美への不満を漏らすのを聞いている。

いつもならば、厳しいながらも、きちんと部長の役目を果たす彼女に、部員たちは尊敬や頼りがいを感じているようだが、今回、それはない。むしろ、彼女にとって逆風が訪れている。

「普段のあいつならこんなことはしねえだろうによ。いったい何だっつてんだ」

こうなっている原因が分からないため、彼は声に不快感をあらわにする。

「演劇部だけじゃなく、他の部からも苦情が届いてる。これじゃ、

劇を作ってるんじゃない、敵を量産してるようなもんだ」
「……久美、ちゃん」

君恵は不機嫌そうに腕を組んでいる久美を見つめる。

君恵としてはどうにか、久美と対話し、この緊張状態を緩和させたい気持ちがあった。しかし、彼女に演劇の話をするのは怖い。

どんな案を出しても、彼女に却下される気がしたのである。

だって。

だって、久美ちゃんのほうが誰よりも劇を知っているんだもの。

「お、ありゃ……」

突然、その男子部員が興味深そうな声を出す。

「どうしたの？」

「ほら、見てみるよ。吹奏楽部部长、芦沢千葉の登場だ」

彼の指差す先、体育館の入り口から、確かに見覚えのある顔の少女が歩いてくる。背後に他の吹奏楽部員を従えて、どこか物々しい行進だ。

「こりゃ、面白くなりそうだな。文化祭以来の芦沢と有川のご対面だ。芦沢の奴、クリスマスライブに有川に呼び出されてカンカンだって聞いているし」

「え、喧嘩？」

「……に、なるかもなあ。この中学校の、二大文化部の部長同士だし。お互い譲り合いの精神に欠けるところがあるしな。自らの領域を侵されれば、はいそうですかと甘んじる人間ではないだろ」

はわわわ、君恵はごくりと唾を飲んだ。

こうなれば、どうなってしまうか本当に予測できない。

久美は背後から歩み寄ってくる芦沢に気がついたようで、練習を一時中断し、彼女に向いた。

歩いてくる芦沢が、久美の数歩手前で止まる。そして、挨拶の一つなく、彼女たちは対峙した。

まさに竜虎相搏りゅうこつしやうの図である。

周囲の空気が急に圧縮され、めきめきとありもしない音を生じさせるのを君恵は肌で感じる。冷や汗が頬を伝い、背筋に悪寒が走った。

間違いなく、二人の間に滞留している空間の流れは、今まさにどちらがどちらに跳びかかっても不思議ではない殺伐としたものとなっている。

「こんにちは、有川さん」

先に口を開いたのは芦沢だった。

「ごきげんよう、芦沢さん」

「本当に、人使いが荒いんですね。自らが率いる演劇部員に対しても、そして、他の部活の部員に対しても。急に連絡が入ったんで来てみれば、もう練習を始めてたんですね」

「私は、自分にも他人にも世間にも厳しいという有川主義を貫いているの。あ、休みの日だっというのに、わざわざ来てもらって悪いわね」

久美はわざとらしく、とってつけたように言う。

「いえ、お気遣いは無用です。私としても一度吹奏楽部として仕事を引き受けた以上、やり通す義務がありますから、それを途中で放棄することは私のやり方に反するわ」

「あら、さすが芦沢さんね。頼もしいわ。これで劇のBGMは完璧ね」

「私が指揮をするんですもの。当たり前じゃない」

「それでは、準備の方を頼んでよろしいかしら？ 練習の成果を知りたいし」

「ふふん、望むところよ」

そのやり取りを見て、君恵は汗を拭う。彼女たち二人が喧嘩にでもなりでもしたら、誰が止めに入れるというのだろう。

すると、二人はこれからの練習について、少し言葉を交わすと、自分たちの部員に指示を与え始めた。

部長の久美が振り返って、説明する。五分の休憩の後、最初から、吹奏楽部の演奏も入れて、通し稽古をするということだった。

「いい？ きつかり五分よ。吹奏楽部もそれで準備できるらしいから」

まるで、何かの挑戦であるように久美は大声で言う。

吹奏楽部はそれぞれに持ってきた楽器と楽譜を持ち、スタンバイに入り始めていた。
と、

「あれ？」

君恵は目を見張る。

吹奏楽部の部長である芦沢が準備を行う部員には目もくれず、真っ直ぐに舞台に向かってくる。

「なんだ？」

隣で見っていた彼も怪訝そうである。

君恵たちが呆然としている間に、彼女は袖の入り口から舞台裏にまで入って来ていた。幕の中では他の部員が道具の出し入れを行い、雑然としている。その中で、彼女は人を探しているように見えた。

「どうしたんだろ？」

そう呟いた矢先、君恵は彼女と目が合う。するとなぜか彼女は、目当ての物を見つけたような顔をして近寄ってきた。

「須藤さん、ここにいたのね。お久しぶり」

第六話 君恵と千葉にアンダーライン 2

「須藤さん、ここにいたのね。お久しぶり」

「あ……お久しぶり、です。芦沢さん」

一先ず笑顔で挨拶を返しながら、君恵は困惑を胸の内に隠した。なぜ自分が彼女から話しかけられるのか、理由が判然としなかったのだ。

確かに、例の文化祭の件で、芦沢も関わっていたことは知っているが、君恵と彼女の間では特に親しく話をすることもなく、その後も特に接点はなかった。ただ見知った顔同士だから様子を見に来たのだろうか。

しかし、部長の彼女が演奏の準備もろくにせず、今、わざわざ自分を探しにくるとは考えにくい。

すると、彼女は目で隣の男子部員を追い払った。

君恵は確信する。やはり、ただご機嫌伺いに来たわけではなさそうだ。

「何か、私に用ですか？」

「ああ、あなたに用というよりも、あなたの周りにもいられるかもしれない人に、ちよつとね」

「はい？」

君恵は何を言われているのか、ピンと来ない。

「今日は、小野村君とか、堂野君、やまし……じゃない。あの人たちはいないの？」

「え？」

「今回の劇に、彼らも参加するらしいって聞いてたから」

彼女は小首を傾げて聞く。どうやら彼女の目的は彼らにあったらしい。

君恵は首を振った。

「確かに、今回の劇では手伝ってもらうことになってるけど。今日は、いないよ。当日にチラシ配りを手伝ってもらうことになってるの」

それを聞くと、彼女は気の毒そうに、というよりもどこか楽しげに驚いた。

「小野村君たち、チラシ配りなんてさせられるの？」

「うん、久美ちゃんがそうさせるって決めちゃってて」

「へえ、寒空の下でかわいそうにね」

そんな言葉を彼女はあまり感情を含ませずに言う。有川ほどではないが、君恵に彼女の反応は、淡然としていて、冷ややかに見えた。

「でも、とにかく参加するって話は本当なのね」

「うん、本当だよ」

彼女は小刻みに頷いて、何かを考えている素振りをする。君恵にはよく事態が飲み込めないが、どうやら彼女はその情報の真偽が確かめたかったらしい。

しかし、それとは別に、君恵には一つだけ腑に落ちないことがある。彼女の先ほどの言動だ。

「あの、どうして私の周りに小野村君たちがいるって思ったの？」

すると、彼女はそんな質問をされると思っていなかったのか、きよんとした後に口を開く。まるで、本当に知らないのか、という様子で君恵をまじまじと見た。

「だって、小野村君は、あなたのことを……」

「わ、わたしのことを？」

「……」

と、突然に言いかけて止まった彼女は、先を話すかどうか逡巡したようで、結果としてそっぽを向いた。

「……なんでもないわ」

「え？」

「ともかく、それだけ聞ければ十分よ。私は、そろそろ戻るから」

「あ、ちよっと待って」

舞台の外へ向かおうとする彼女を、君恵はふと思いついて呼び止めた。

「何？」

「あ、あのう、芦沢さん」

先ほど久美と対峙し、火花を散らしていた彼女の姿が蘇っている。それを考えて、君恵にはどうしても言っておきたいことがあったのだ。

「何？」

「芦沢さんに、謝っておきたくて」

すると、彼女は目を丸くした。意味が分からないようで、下唇を噛んでいる。

「謝る？ どうしてあなたが？ 何を謝るの？」

君恵はおずおずと頭を下げる。

「く、久美ちゃんのこと。今回は突然にイブに劇での演奏をお頼みして、怒ってらっしゃいますよね？」

「……まあね」

意外にも彼女はあっさりと言った。答えは肯定であったが、その口調に怒りの熱は含まれていない。もしかすると、いまさらどうでもいいと思っているのかもしれない。

君恵は推測するが、しかし、そうだとしても、ここはきちんと謝らなくては。

毅然とした顔で君恵は彼女を見つめた。

「私、久美ちゃんの友達として、あなたに謝ります。今回は演劇部の勝手なお願いで、吹奏楽部までわがままを聞いてもらって、ごめんなさい」

「……須藤、さん？」

「私、吹奏楽部の演奏のことが決まった後で知ったので、彼女を止める暇がなくて。えっと、言い訳のつもりはないんですけど。その、本当に、ごめんなさい」

芦沢はしばし無言で頭を下げた君恵を見ていたが、やがて、落ちて着いて諭すように口を開いた。

「……友達として謝るのなら、その必要はないわ」

「へ？」

君恵は顔を上げ、彼女の言葉に首を傾げる。

友人としてなら、謝る必要がない？

これはいったいどういうことなのだろう。

すると、芦沢は人差し指を立て、話し始めた。

「私は今回、吹奏楽部の部長、部の代表として、話を受けた。そして、代理の奥山さんではあったけれど、話を持ちかけたのも演劇部の部の代表である有川さんからのもの。これは分かるわよね」

「う、うん」

「つまり、これは部と部問題であって、だからそこで『友人として謝るとか、そんな話じゃないの』」

「部と部の、問題？」

すると、芦沢は目を細めて、とんと君恵の胸の上に人差し指を置く。

「今回の件で演劇部がいろいろと周囲に不和を抱え、それを問題と捉えているのなら、あなたが対話すべきなのは、私じゃない。有川さんよ」

「久美ちゃんに？」

「一部員として、部長のやっていることに納得がいかないのなら、きちんと彼女と話をして、それで、演劇部として謝りに来るなら、謝りに来なさい」

君恵は胸にずしんと重りが落ちたように、感じた。

確かに、ここで君恵が勝手な判断で彼女に謝ったところで、彼女にとってはそれがどうした、ということなのだろう。これは君恵と

いう個人のレベルで解決できる問題ではないのだ。

でも、それを君恵だつて心の奥では分かっていたのではないだろうか。

自分の考えを伝えるべきなのは、久美なのだ。

しかし、それにしり込みをしている自分がいることを君恵は認識している。

なぜなら、彼女と演劇のことで対立したくはないという切実な気持ちがあるのだ。

彼女と穏やかな関係を望むあまり、一線を踏み越えられないでいる。

他の話題でならば問題なく話せるというのに、こればかりは歯がゆい感情を禁じえなかった。

「……わ、わたし」

そのもどかしさを見抜いていたのか、芦沢が言った。

「彼女に、話にくいんでしょ？」

否定は出来なかった。

「……う、うん」

「まあ、謝罪なんて今でなくてもいいし、別に来なくてもいいわ。彼女にも言ったけど、一度引き受けたことだし」

帰るつもりなのか、くるりと彼女はきびすを返す。

「でも、あなたが彼女のことを思うのなら、きちんと、嫌なことでも、言い合える仲にならないとね」

「そ、そうだよ。わたし、久美ちゃんの友達としてまだまだだね」
すると、しゅんと頂垂れた君恵を見かねたのか、突然に芦沢は自身の演説を申し訳思ったようだった。急に頬を真っ赤にして俯く。

「あ、え、偉そうなこと、言っちゃったわね。わ、私だって、そういう人間関係を築けてるかっていうと、そうじゃないと思うし。むしろ、避けられてばかりだし」

「芦沢さん」

「こ、これは、あくまで理想の話よ。そうよ、そうなの。だから、そんなに深刻に捉えないでもいいんだから、ね」

手を大げさに振って彼女は必死に自分を元気付けようとしている。君恵にはそれが新鮮に見え、ずいぶん可愛らしい表情をするのだと、ほほえましく思った。

そのおかげか、緊張し暗くなっていた気持ちが少し上向いた気がする。

自然に笑える余裕が出来た。

「うん、分かった」

「……ふう」

「ふう、でも、芦沢さんって、そこまで考えてくれるなんて、とても優しい人なんだね。正直もつと怖い人かと思ってたから」

すると、今度は褒められたのがうれしかったのか、それとも予想外だったのか、彼女はさらにあたふたと狼狽する。

「や、や、優しくなんてないわよ。ただ、私はあなたたちの部のことと思って……」

「ほら、やっぱり、私達のことを思ってくれてるんだ」

「あ、あう……。と、ともかく、そろそろ時間だわ」
「あ、本当だ」

舞台袖の時計の針は練習再開の時間を指している。じきに久美が集合をかけるだろう。

「じゃあ、これで。須藤さん、主役なんでしょ？ がんばってね」
「うん。芦沢さんも演奏よろしくお願いね」

君恵は逃げるように持ち場に戻っていく彼女に手を振る。
「なんだが、芦沢さんとは仲良くなれそうだな。」
そう思って、自身がこれから踏み出す舞台に向き直る。
リラックスした気持ちでゆっくりと深呼吸をし、久美が指示を出すのを待つことにした。

第七話 薫のプレゼントにアンダーライン

簡単な昼食を取った後、薫たちの姿は人々が右へ左へ北へ南へと往来するアーケード街にあった。

首を巡らせばそこかこの店先は、クリスマス一色のイルミネーションで飾られ、昼間だというのに、目がちかちかと忙しい。

薫は歩きながら、ポケットに手を突っ込んで寒い手を温めている。

結局、先ほどの話し合いでは、君恵のプレゼントをどうするかということまで、具体的に決めることが出来なかった。

そのため、薫はまだ、彼女に何を送るか、考えあぐねていた。

先頭を歩く山下はぐいぐいと自分勝手に人ごみを掻き分けて進んでいく。薫と堂野は追いかけるのに必死だ。

故に、プレゼントのことをろくに考える暇もない。

加えて、薫にはそれ以上に不安なことがある。

そもそも、自分はプレゼントを買ったとして、彼女に渡すタイミングはあるのか、さらに、状況によっては告白もするのか、という、薫の未来を大きく変えるかもしれない、悩みだ。

告白、かあ。

薫は重い息を吐く。

山下の案に両手を挙げて賛成、などとは言いたくないが、彼のイブという絶好のチャンスに思いを告げるといふ意見はとても的を射ていると思う。想いを告げるにはまたとない好機だろう。

だが、しかし。

今の自分でそれをやってのけるだけの度胸を有しているかという

とすんなり首肯できない。

以前よりは、幾分、マシになった気はするが、薫の心の奥には未だ、コンプレックスの影がちらついていた。彼女が、自分のことを恋愛可能な対象としてみてくれているのか、ということにも一抹の不安がある。

おそらく、この思いを完璧に克服することなどは生きている以上、不可能なのだろう。

だが、それで怖気づき、彼女に何も言えないまま時を無為に過ごすことは情けない。

「おい、薫。あれを見ろよ」

ふいに、山下が目の前に立っていて、あごでしゃくって彼の斜め後ろの店を示した。

薬局とコンビニに挟まれたごちんまりとした店である。黒い看板に英語の羅列。明るい光に照らされた店内は白で統一されていていかにも高級そうな雰囲気だ。透明なショーケースには、光の反射できらめく石や時計が並べられている。

「女性へのプレゼントと言えば、やっぱり宝石だろ」

彼は平然とそんなことを言う。

こいつ、俺の財布の中身知ってるのか。

「山下、それは大人の相場であって、中学生で手が出せる代物じゃないだろうが！」

「何言ってるの、小野村君。いくら中学生だからって、愛しの須藤さんのためじゃないか。これくらいどーんと借金してでも買うべきだよ」

聞いている薫は三白眼だ。

「あのな、もらう相手だって中学生なんだよ。須藤さんだってこんなもの、もらうにもらえないだろ」

「じゃあ、代わりに俺に買ってくれよ。日ごろから俺には感謝しても感謝しつくせないほどの恩義を感じているはずだ。宝石の一つや二つ、俺なら喜んで受け取るぜ」

どこまでも自分の欲求に正直な奴だ。

薫がそんなことをするなど、地球が真つ二つに分断されることがあっても、それだけはないと言い切れる。

第一、彼には感謝どころか、一時間やそこらじゃ語り尽くせないトラブルによる苦勞しか感じていない気がする。

そう思って、日ごろの恨みが心の中で掘り返された。

ふざけるな、と憤って彼の足を踏む。

「痛っ」

「行こう、亮介。こいつを先に歩かせてたら、どこに連れて行かれるか分からない」

薫は堂野の服の袖を引っ張る。背後の山下を無視して、ジグザグに人の海を渡っていく。

大きな人垣がところどころの店先で形成されており、進行を速度を鈍化させていた。薫は小さい背ながら、精一杯伸びをして、未然に察知し、大きく迂回ルートを歩いた。

アーケード街の出口はすぐそこだ。

「しかし、薫」

堂野の音がする。

「何だ？」

ふと、返事をして、道の真ん中で立ち止まった。

「どこか当てがあるのか？ 彼女へのプレゼントを購入するんだろ

う」

「……」

薫は絶句する。

当てがあるのか、と言われれば、もちろんそんなものなどない。

薫自身がどんなものを選べば最適なのか、まだ考えをまとめていないのだ。

だが、適当にふらふら歩いて、これはというものを見つけられるとも限らない。

困った薫は堂野を見上げる。

「亮介は、どう思う？」

「うん？」

「その、好きな人にさ。贈り物をするとき、亮介だったら、何をかう？」

「俺が、か？」

いつも平常心で滅多に取り乱さない彼の瞳が当惑で少々大きく開かれた。

「例えば、の話だよ。亮介、本をたくさん読んでるだろ。小説とか、そういうお話の中ではどんな風なんだ？」

難しい顔をして、彼は顎に手を当てる。

「……小説と現実ではいろいろとギャップが生じる。向こうは作り話だから、やるのが大げさなんだ。薫がやって、それで上手いくとは思えない」

「……そうか」

薫は肩を落とす。

「でも、俺は、気持ちさえ込めれば、どんなものでもいいと思うよ。値段に関わらずな」

自分の意見では何の役にも立たないと思ったようで、堂野は慌てそう付け足す。しかし、それでも、これといった方針が立つわけでもない。

再びがっかりすると、耳障りな周囲の騒音が際立った気がした。

「そっだ、こっつうのはどうかな」

すると、急に堂野が背中を叩いた。

「お気に入りの本をプレゼントするんだ」

「……ハハ、亮介らしいな」

「変な顔をするなよ。他にアイデアもないんだろ。とりあえず、書店を覗いてみないか？」

多少、しぶしぶではあったものの、薫は彼に従うことにした。思

いもよらぬことで大きな発見に繋がることだつてある。

そういえば、山下の姿が先ほどから見えないが、特に気にしなかった。きつと薫たちに付き合うのも飽きたのだろう。

もし用事があるのでならば、携帯に電話をしてくるはずなので、このまま放っておくことにした。

堂野が案内したのは彼が足しげく通うという大型書店だった。アーケード街を抜け、車の通りが激しい交差点の歩道橋を渡ると、右手に見えてくる大きな本がでかでかと描かれた建物である。

ここまで来ていまさらと思われるかもしれないが、薫としてはこんな場所を見回っても、やはり、お誂え向きの品物があるとも思えなかった。

だが、外はとにかく寒い。

とりあえず、暖房の効いた温かい場所に入れるのなら、と自動ドアをくぐった。

ふわりとした空気が薫の頬を暖め、店の置くへと誘う。

しかし、ここでも先ほどのアーケード街と等しく人で煩雑としていて、動きづらい。

本を探す前に気力を搾り取られてしまいそうな状態ではあったものの、隣の堂野は違った。

立ち並ぶ本の棚に、珍しく目を生き生きと輝かせ、先ほどの山下同様勝手にずいずいと進んでいく。

「おい、待てよ」

と薫が呼びかけても、

「お、向こうにも面白そうな本が」

という具合で、もはや、薫のプレゼント探しどころではない。この自分そっちのけのやり取りにも、数十分で断念し、薫は一人で書店を出た。

こうなれば、堂野ですら当てにはならない。

プレゼントは自分で見つけるしかないのだ。

しかし、行き交う人々を前に、薫は立ち止まる。

空を仰ぎ、汚れた水を含んだ、雑巾のような雲を眺めた。

いったいどうするべきか。

とりあえず、道を歩き出してみたものの、右にも左にも、心を惹かれるものはなかった。ただ時間を浪費するばかりで無防備な掌が凍え、かじかんでくる。

世界中がこの寒さならば、きっと冷蔵庫などその内、無意味になっってしまうに違いない。それほどに、今日は寒い。

君恵は、今頃、学校の舞台で練習をしているのだろうか。

そうぼんやり思い、うろつろつしていると、聞き覚えのある声が聞こえた。

若い、男性の声である。

ふと目を向けると、そこは小さな電気店の前だった。電飾がちりばめられたクリスマスツリーが飾ってある入り口の横には、商品を陳列するショーウィンドーがあり、並べられたテレビから、男の声がしていたのだ。

「犯人はあなたですね」

自信と確信に満ち溢れた迷いのない決め台詞。

テレビ画面の中で、最近流行りの若手俳優が映っていた。

都那賀一郎の事件簿。

俳優、船見朔太郎だ。

びしりと着こなしたタキシードは彼のニヒルな笑みを何倍にも引き立てるものがある。

「ふはあ……」

薫は思わずため息をついた。

この時間にドラマはやっていないから、おそらくドラマの宣伝をかねた特集番組なのだろう。

これまでの話のハイライトシーンが流れている。彼が犯人を華麗に追い詰め、言葉巧みに打ち負かす、見せ場が次々に映し出された。

きつと、彼なら好きな女性にも、迷わずアタックできてしまうのだろうか。

薫は思う。

こんな風に、寒い町の中を歩き回り、うだうだとプレゼントを決めかねている自分では、到底、何が出来るわけでもない。

きつと告白など、遠い夢だ。

そんな自分が不甲斐なくて、頭を小突く。

自分は、あの一ヶ月前の出来事で変わったのではなかったのか、強くなったのではなかったのか。

馬鹿やろう。何をもたついている？

早く、彼女に渡すべきものを見つけないければ。

そう気持ちが急いたとき、テレビの中の都那賀一郎の言葉が耳に届いた。

「お嬢様、そんな恰好で外に出られてはいけません」

振り返ってみる。

場面がいつの間にか変わっていた。

親子喧嘩の末、家出し、今度は一面の白銀世界が見たいと、極寒の地に向かった富豪の娘を、都那賀一郎が見つけ、ホテルの前で彼女に何かを差し出している。

ふわふわとした真つ赤な毛糸のマフラーだ。

「子供っぽくて嫌よ」

ふん、と鼻であしらう彼女に、彼はそつと優しくマフラーを巻く。

「大切なお嬢様にこんなことで風邪を引かれては、私は執事失格です。その上、お父上からこっぴどくしかられ、私はお暇を出されてしまいます」

「まさか。あんな父親が、私の心配なんてしてはるはずないわ」

「まあまあ、そんなことをおっしゃらず。よくお似合いですよ」

そこまで見て、薫の足が動いた。

数日前の出来事がフラッシュバックする。

君恵との二人きりの帰り道、首をすぼめ、寒そうに手を擦り合わせていた彼女がいた。

そうだ。

プレゼントはマフラーがいい。

薫は閃いた。

彼女に似合う、可愛らしいマフラーを探そう。それくらいなら、手持ちのお金で事足りるはずだ。

電気屋の前から、足早に駆け出す。

目的が見つかり、寒さに動きが固まっていた薫の小さな体に、急に力が漲ってくる気がした。

どこか、そわそわした落ち着かない気持ち^が薫の足を先へ先へと進ませる。

彼女の言ふ顔^が目の前に浮かんだ気がして、心が弾んだ。

きつと、いや、絶対。

彼女にプレゼントを渡そう。

そして、その後は

第七話 薫のプレゼントにアンダーライン（後書き）

ようやく、演劇が始まるまでの物語が終わりです。

次回からは、クリスマスイブでの劇本番の話、本題に入っていきます。

言い忘れてました。

読者の皆様、良いお年を。それでは、また来年ノシ

第八話 逆転のシナリオにアンダーライン 1 (前書き)

作者のヒロユキです。2010年、明けましておめでとございませす。

これからもこの未熟者をどうかよろしくお願いいたします。

ええ、新年明けてから初めての更新となりますが、推敲の作業が追いついておりません。そのため、毎度同じく書けている部分だけ投稿します。

第八話 逆転のシナリオにアンダーライン 1

足元の青黒いコンクリートの表面を見て、堂野亮介は背筋が震える。ダウンジャケットのチャックを引き上げ、少しでも保温性を高めようと試みた。

街でチラシ配りをしてきた亮介は、公園へと続く緩やかな坂道を上っていた。数分前に薫と携帯で連絡を取り、そこで合流する約束になっていたのである。

「ずいぶん軽くなったな」

亮介はそう一人ごちる。

脇に抱えたチラシの量は、当初に手渡されたものよりも十分の1ほどの枚数になっていた。

正直なところ、道行く人に物を配るなど、亮介にとっては未体験の作業であったので、心に抵抗を感じていた。ただでさえ、普段から口数の多い人間ではない。見知らぬ人に話しかけられるかどうか、不安だったのだ。

しかし、それとは裏腹に心配することはこれ一つなかった。

すれ違う人に、特に脈がありそうな人間に対し、一声かけ、ぴらりと差し出す。

この作業の繰り返しである。難しいことはない。

読書が趣味の亮介には、久しぶりにこれほど多くの人間の顔を見たものだと、不思議な気分だった。改めて、世の中には本当にいろいろな顔をした人間たちがひしめき合っていることを確認した。

すれ違い様に彼らの表情の裏に隠された人格を推測するのも楽しい。

当初予想していたものと違い、実に有意義な一日になったことを、亮介はこれ以上ない収穫を得た気持ちになっていた。

そんなことを思っていると、公園の入り口に差し掛かっていた。赤いレンガ造りの小さな塀が円形の公園の周りを囲んでおり、レトロな印象を与える。よく見れば、塀に沿って並んだ外灯の形もどこか洋風な雰囲気だ。柔らかいオレンジの光が手入れされた植え込みを照らしている。

等間隔を置いて円周上に四つの出入り口があるらしく、亮介はその一つ、道路に近い入り口から入った。

公園の中には、子供達の姿はなかった。陽が落ちて辺りは暗いし、最近は何かと物騒だから、帰宅の時間も早まっているのだろう。

だから、薫の姿を探そうと目を凝らすと、ものの数秒で彼の姿は見つかった。ベンチに座り、疲れているのか俯いている。着ている服のため、そのわびしさというか、惨めさというか、それらがさらに際立っていた。亮介は駆け出そうとする足を止めた。

チラシ配り、なかなか楽しかったな、などとはとてもではないが言えない。彼の疲労ぶりを見れば、そんな言葉も消え去ってしまう。

「おい、薫……」

呼びかけると、彼はワントempo遅れて顔を上げる。

その目が、自分を捉えて、何者かを判断したのち、警戒を解いたように笑いかけてきた。

「もう、配り終わったか？」

「ああ、大方な。こんな服なんて着せられているから、街にいたら何もなくても人がわんさか寄ってくるし」

むず痒そうに鼻を動かし、薫は言う。

「それは……大変だったな」

チラシ配りの開始前、泉田中学校に呼び出された亮介たちは、有川から今日のスケジュールについて大雑把な説明を受けた。要するに、さぼることなく、ただひたすらに、ピラ配りを続ける、というシンプル且つ、脅迫のような勢いが混じった命令を告げられたわけだ。

そして、それぞれに山のようなチラシの束を渡された後で、薫だけが更衣室に呼び出された。

亮介と山下はどうしたことかと顔を見合わせていたが、数分後、マツチ売りの少女をして、こちらに歩いてきた薫を見て、さもありませんと頷いたのである。

薫はげんなりと沈み込み、有川はその姿を褒めちぎった。

『どこからどう見てもみすばらしい女の子よね。これで、道行く人はこみ上げる涙をせき止められないに違いないわ』

隣で見ていた奥山紗江にも同意を求め、ますますご満悦の様子だった。

話によると、薫にはわざわざ裁縫部に頼みで作ったこの衣装を着せることで、さらに集客効果を高めようという魂胆だったらしい。

薫をこの仕事に固定させていたのは、こういうわけだったのか、と亮介は納得した。そして、同時に、有川という少女の抜かりなさに脱帽した。

利用できるものは誰が何と意見しようと可能な限り利用する。

彼女のその、目的に対する有り余る熱意、剛胆さ、強気な姿勢には目を見張ってしまう。

しかし、それは同時に、薫から目に見えない気力というものを奪っていった。一日の働きにくたびれた親友の横顔を見ながら、亮介は思う。

これは単純な疲れだけではない。

男であるにも関わらず、意に沿わぬ女装をさせられ、それでも仕事をこなさなければならなかった羞恥と混乱の疲労だ。

「亮介……」

「何だ？」

「せつかく買ったマフラー。俺、渡せそうにない」

弱弱しい声には、一月前の文化祭の時のような敢然とした自信は、見る影もない。

「弱気になるなって。演劇が終わったら、彼女をちよつと呼び出して、メリークリスマス、そう手渡すだけだ。たったそれだけだ。彼女だって喜んでくれるはずだって」

「本当か？ こんな俺からもらったものでも？」

「自分を卑下するな。チラシ配りが終わったら、とつとそんな服着替えて、気分を切り替えよう」

亮介の必死の励ましは届いているのか、やるせなく頷いた。しかし、それは彼の問いかけに対する単なる情性の肯定だった。

彼の気持ちは沈んだままだ。

「元気だせよ。ここまできて諦めるのかよ。マフラーも捨てるわけにもいかないだろ」

「そうだけど、よ……」

「大丈夫、薫は充分に男らしいよ」

背中をさすりながら、せめてもの励ましを口にしたときだった。

「あら、こんなところで仲良くおしゃべりとは、仕事の方は済んだのかしら？」

高飛車な女性の声が聞こえ、首を上げると、見覚えのある眼鏡をかけた少女がこちらに歩いてくるところだった。

「有川……」

第八話 逆転のシナリオにアンダーライン 2 (前書き)

作者のヒロユキです。どうも。

昨日の続きです。

物語はそろそろ佳境に入っていく予定です。

第八話 逆転のシナリオにアンダーライン 2

亮介は驚いて彼女の名を呼ぶ。同時に膝に置いていた掌に力が籠もる。

制服の上にグレーのコートを羽織り、いつもの薄い笑いを浮かべた彼女は腕を組んでこちらを見つめている。

しかし、劇の開始時間前だというのにこんな場所になぜ彼女がいるのか、亮介には皆自分からなかった。隣の薫も同じ考えらしく、口を開けて怪訝そうに見ている。

「劇の準備の方はいいのか？」

亮介が質問した。

彼女はああ、そのことと軽く首を振る。

「万事問題ないわ。事前に綿密な計画を立てていたおかげで準備はスムーズに済んだの。私が指示した甲斐もあって皆無駄なく仕事ができ、リハーサルをする時間もたっぷりあったわ。おかげでこうして周囲を見回りにも来れたのよ」

言葉を切って眼鏡のフレームを指で押し上げる。

「そして、見回って正解だった。こうして、大事な宣伝要員が悠長にベンチでくつろいでいるんですもの」

「……悪かったな。こんな服でなければ、もう少しやる気もでるだろうにな」

不貞腐れたように薫が言い返した。そして、被っていた頭巾を払い除け、大きなため息をついた。

「何を言っているのよ？ そのマッチ売りの少女だからこそ、意味があるのよ。それが、人々の心をキャッチするんだから」
「まあ、確かに街中ではいろいろ騒がれたよ。でも、俺は男だ。女の役は女子がやればいい」

薫がそう言うのも無理はない。亮介は思う。二年間一緒にいて、彼が自分の容姿を、男として周りから見られないことを思い悩んでいたことは、自分のことのように知っている。

ここ数ヶ月で、その悩みの克服に向けて大きく前進をしていたというのに、有川はまたしても、彼に自身が抱える闇と向き合わせるようなことさせた。全く余計なことをしてくれたものだ。

ふいに、いつも静かなはずの亮介の胸に熱い何かが湧き出し始める。

「そうね。否定はしないわ。でも、他の女の子たちは本番の打ち合わせがあるし、手が空いてる子がいなかったの。だから、止む無く小野村君に頼んだのよ。これ以上の適役はいないんだから仕方ないじゃない」

「適役だとしても、俺はしたいとは言っていないぞ！」

「何よ、今日だけのことじゃない。そんなに怒らなくても」

その冷たい言葉が何かを破った気がした。

薫の心中など知ったことが、そういうことなのか？

亮介は膝を叩いてすっと立ち上がる。

「有川」

「何？ 堂野君」

「そういう言い方はないんじゃないのか？」

「あら、気に障るようなことを言ったかしら？」

悪びれず、有川は言う。

「俺たちは『ボランティア』として、演劇部の手伝いをしてるんだぞ」

すると、彼女は今までその事実を失念していたようで、驚いたように頬に手を当てた。

「ああ、そうだったわね。罰を受けているのは山下君だけか」

しかし、亮介からはその台詞が演技のように見えてならない。

「この寒さの中、こんな服装で、しかも、女装でビラ配りをさせられている。薫の気持ちが分かるのか。有川が薫の立場だったら、どう思う?」

難詰するような口調に、薫が驚いて顔を上げた。

「亮介?」

「……」

勢いに気圧されたのか、そこで初めて、有川は口ごもった。眼鏡の奥の目が一瞬、怯えを表したのを見逃さない。うろたえている、と踏んだ亮介は一歩足を踏み出し、さらに言葉を続けた。

「それに対して、感謝の言葉の一つくらい、あってもいいんじゃないのか? どうなんだ!」

「……堂野君、あなたの言う通りね。二人とも、今日はご協力ありがとうございました。でもね、それはそれ、こんな場所でサボっている時間なん

て、あなた達にはないの。ほら、さっさと持ち場に戻りなさい」

面倒くさくなつたように彼女は手をひらひらとさせ、向こうに行けと合図をした。自分たちの反論などに付き合っている暇はないということだろうか。すぐに、公園の外に向かつて歩き出そうとする。どうやら、逃げるつもりだ。そう判断した亮介は彼女を呼び止めた。

「有川、まだ話は終わってないぞ！」

途端、彼女の背中がびくりと震えた。まるで、臆病な猫が物音に反応するようだ。

ゆっくりと振り返る。

「いつになくけんか腰ね。堂野君。あなたらしくないわ」

その表情は落ち着き払っている。

だが、亮介にはその裏側に隠れている感情まで見透かしていた。以前、彼女を廊下で見かけたときに感じた違和感の根源が彼女を動揺させているのだ。

「余裕ぶる振りもやめたらどうだ？」

静かに提案する。

「何のこと？」

「今回の劇を本番に導くことに関して、有川、あんたはかなり切羽詰っている」

「私が？ 何よ。私はいつだって冷静沉着よ。それで虎視眈々と準備を行ってきた。現に今だって、きちんと劇の用意を済ませ、余裕

を持ってこうして見回りに来ている」

有川は腰に手を当てて、頷きながら話す。しかし、言いながらも僅かに声が上ずっているのを言葉の端に感じる。凶星だな。

「違う、逆だよ」

こちらの反撃の番だった。

「逆？」

「有川は、今回の劇を間違はなく成功させるために、それだけに心血を注ぎすぎたんだ。だから、俺たちを含めて数多の生徒や部に大きな迷惑をかけてる」

「そ、それが何よ。私のやり方はいつだってそうじゃない？ それ
が」

亮介の声がかぶさる。

「そうだな。いつもの有川なら、やりかねないことだ。だけど、今回はいつもより酷い」

「酷いって何よ」

「一切を持って、他人への配慮が皆無だ。血も涙もないとは言わないが、あんまりにもやるのが極端すぎる。聞いてるぞ、山下からもいろいろとな」

「いろいろと、ねえ」

「練習場所を確保するために、あれこれ難癖をつけてバスケット部に体育館を譲らせたり、文化祭の時から立て続けに裁縫部に衣装を作らせたり、吹奏楽部も突然にイブに呼び出されて激怒してるそうじゃないか。自分の部員に対しても、彼らの意見に全く耳を貸さず、一方的に押し付けるみたいだって。どうなんだ？」

そう問いかけて、彼女の次の反応を待つ。これで彼女が「やり過ぎだった」と過ちを認めてくれるのであれば、話は丸く収まるだろう。今の彼女が先ほど見せたように動揺しているのであれば、素直になっってくれるに違いない。

亮介はそう確信していた。

しかし、結果は違った。

「別に、私は普段からそういう感じですよ。血も涙もない女よ」

彼女は、無感情に言い放つ。

本気で、そう言っているのか。

「嘘だ」

思わず、言っていた。

「何それ、だだをこねる子供みたいね」

「有川は、そんな人間じゃないだろう？」

「あなたが私の何を知っているの？」

「もしも、有川がそんな人間なら、無理やりにも俺と薫を演劇部に入れてるはずだろ！」

「な！」

有川が顔色を失う。

「そつだ、そつなのだ。」

彼女からは文化祭の頃からずっと、演劇部に入らないかという勧誘を受けていた。受け続けていた。

「副部長にならないか。」

副部長になつてくれたら、助かる。

いろいろと待遇するわ、と。

二日に一度は必ずそうやって、亮介の元に来る。ほとんど欠かさず。

最初は面倒で、興味もなく、話に適当に相槌を打って帰ってもらっていた。演劇部の副部長になるよりは今まで通り薫と帰り道を歩いたり、本を読んでいるほうが楽しい。そう思っていたからだ。だが、何度も諦めずに亮介に会いに来る彼女を見て、不安になっていた。

彼女はさながらチーターのように、狙いを定めたら一直線、断わり続けてもその内、亮介にとって拒否できない交渉材料を持って向かってくるに違いないという懸念があつたのだ。

しかし、意外にもいつまで経ってもそんな事態には至らなかつた。彼女は強く迫らず、従来のように、無理強いをすることもない。ただ、亮介と一緒に演劇部をやりたいという、一つの確かな理由で問いかけてくるのだ。

イブの演劇の準備が始まってからは来なくなつてしまつたが、彼女の熱心な気持ちは水に浸した布のように少しずつ亮介に伝わっていた。硬化していた心は紐解かれ、彼女と話をするのがいつの間にか一つの楽しみにもなつていた。

そして、彼女とは演劇部だけではない、他愛もない日々の出来事も話すようにもなつた。

亮介は自分と友人としての、ごく普通関係を築きたいという彼女の思いがあることに気付いたのである。

そんな優しい歩み寄りの気持ちがあることを知っていたから。

だから、だから。

彼女のことを心配だつた。

「有川は違う。もっと他人への優しさを持つてる。俺と話をしてくれた有川はそんな奴じゃなかった」

「さあ、どうかしらね？」

「今回、周囲からどんな視線で見られているのか気付いてるか？かなり反感を買ってるぞ。皆から敵意の目で見られてる」

今度は苛立ち始めたようので有川の声が強まり、むきになり始めた。

「だから？」

「有川、あんたは目的のために切羽詰るあまり、目の前の物以外、見えていなかったんだ。盲目になっていたんだよ」

「……」

「こんなやり方は間違ってる。これまでの行動を振り返ってそう思わないか？」

亮介は身体をぴくりとも動かさず、前方の少女をしかと見つめた。その目の色は怒りを映さず、ただ、彼女からの肯定を待っている。

それは、彼の中の優しさであり、彼女に対する特別な歩み寄りだった。

しかし、有川は彼との視線を断ち切って、またしてもきびすを返す。

「堂野君、余計なお世話よ。一度決めたことだもの。前言撤回は私の辞書にはないわ」

そう言い放ったとき、彼女は止まる事無く歩き出し、公園の外の闇の中へ消えていった。

第八話 逆転のシナリオにアンダーライン 3 (前書き)

ちびちびとしか進まなくてすみません。

今年の目標が「しつかり丁寧」であるため、出来るだけ何度も内容を見直すようにしています。今までのように、ただだらだらと書くだけでなく、以前よりも少しでも良いものを作り上げていきたいと思っています。

続きは明日、遅くても明後日には更新します。

第八話 逆転のシナリオにアンダーライン 3

「おーい、小野村、堂野」

有川が去った後、突然、背後の植え込みの影から飛び出してきた人物がいた。薫の背後から駆け寄り、首元に抱きつく。ぐっと胸が圧迫され、呼吸が詰まった。

「や、山下」

「ふう、やっぱり十二月も末になると寒いなあ」

彼はそう言っつて、薫で暖を取るつもりなのか、さらに密着してこようとする。山下に引っ付かれるなど不快の極みである薫は、すぐさま、彼の腕を乱暴に振りほどいた。

「てめえ、いつからここにいたんだ？」

「てめえとはご挨拶じゃねえか、薫。亮介みたく下の名前で親しげに呼んでくれよ」

「残念だが、お前の下の名前なんて知らん」

突き放すように薫は素っ気無く返す。

「がーん、ダブルショックだ。小野村が粗雑な輩口調になった上、極度の物忘れ症状で、もうろくしているぞ。堂野、どうしよう」「……」

しかし、呼びかけに対し堂野は返事をせず、何か考えごとをしているようだった。

「堂野、お前も老化現象か？ 耳が遠くなったのか？ 亮介おじい
ちゃーん」

「……それより、山下。チラシは配り終わったのか？」

薫が訊く。

「うん、大半はな。有川に言われたから、真面目に取り組んでたさ
「そうか」

彼のことからサボって遊んでいたのではないかと思ったが、さ
すがに彼女のから命令ともなると、簡単に無視できないのだろう。
なによりも仕返しが怖い。想像しただけで身震いがする。

山下がベンチの背もたれに肘をついた。

「しかし、有川のやつ、相変わらずの冷血ぶりだな。ただでさえ寒
いんだ、あんな奴がこの辺りを歩いてたら、すぐにも大雪が降り
出すぞ。なあ、薫」

「さっきの話、聞いてたのか？」

相槌を打つ代わりに聞き返す。

「ああ、ずっと聞いてた。ハラハラドキドキサスペンスだったな。
どのタイミングで割って入ろうかと思計らっていたが、とてもじゃ
ないが、そんな勇氣はなかった」
「それで、正解だ」

薫としても二人の対立の線をいつ断ち切ろうかと考えていたが、
張り詰めた緊張に、手を握り締めながら見ているだけで精一杯だっ
た。

それに、たとえ止めに入ったとして、自分や山下では中途半端な

ことしか出来なかっただろう。

「じゃあ、これからどうする？」

すると、山下が質問した。

「どうするって？」

「大人しく有川のいうことを訊いて、このままピラを狂ったように配り続けるのか。それとも、反撃ののろしを上げるのかってことだ」

また、こいつは。

薫は半眼で彼を睨む。

そうやってまた、厄介ごとを起こそうとする。これは彼の悪い癖だ。思いつきで余計なことをして、そして、とばっちりを受けるのは薫たちなのだ。

「馬鹿言え、そんなことして」

「そうだな、このまま指をくわえているよりは、彼女に一矢報いるべきではないか？」

驚いて、薫は堂野を振り返る。

「亮介まで、何言ってるんだ？」

「山下の提案に乗るのは甚だ不服だが、今回の場合、それもありません」

「それもありません……」

いつもの「どうでもいい」はどうしたのか。そもそも、今日の彼はいったい何があったというのだろう。柄にもなく、積極的に、熱血漢の目をしている。

しかし、薫は彼のこんな目を一度だけ見た気がした。
あの文化祭の事件だ。

彼が劇を成功させるために、山下と組んで村松先生を黙らせようと画策していた時。心配ないからと計画からの薫を遠ざけようとした、強い意思によって輝いているあの瞳なのである。

きっとこうなれば、親友の薫の忠告でさえ、耳には入らないだろう。

「よし、決まりだな。あの有川にひと泡吹かせてやる」

「そうだな。ひと泡もふた泡も吹かせてやる」

「しかし、どうやって一矢報いる？」

「お、おい」

啞然としている薫をおいてけぼりにして、話が進んでいく。

「ううん、それが問題だな。劇の開始まであまり時間はないし、何か都合のいい情報を掴んでいればなあ」

「情報？」

「ああ、情報だ。有川の意表をつけるようなものだよ」

「うーん」

「彼女をぎゃふんと言わせるには演劇の上演中に想定外の事を起こさせるのがいい。でも、そのためにはせめて劇の内容の情報だとかあればいいんだが……」

誰もが黙り込んでしばらくしてから、何者かの声が出た。

「……あるわよ」

予期せぬ返事にその場の全員が絶句する。なぜならそれは、この場にいるはずのない女性の声だったのだ。

「へ？」

薫が間抜けに口を開け、周囲を見回すと、またしても別の人物がこの公園に現れたことに気がついた。

ベンチから見て右側の入り口から姿を見せた少女がいる。そして、外灯に照らされた彼女の正体を見て、目を疑った。

「あ、芦沢さん？」

第八話 逆転のシナリオにアンダーライン 4

「あ、芦沢さん？」

どうして？

「あなたたち、こんな場所にいたのね。街に居なかったから結構探し回ったのよ」

彼女は手を後ろで組み、不敵な笑みを浮かべ、公園の中央に歩み寄る。そして、大きく円形に囲まれたレンガの土留めの上に座った。そこには暗闇でよく見えないが、見上げるほど大きな針葉樹が植えてある。

「どうして、芦沢さんが俺たちを探すんだ？」

薫には理由が見当たらない。

「それは少し事情があるの。さっき堂野が言っていたように、私達吹奏楽部も演劇部からは多大なる迷惑を被ったわ」

「それは知ってる。でも、迷惑を被る前にどうして今回の劇の演奏を断わらなかったの？」

すると、芦沢は苦労を溜め込んだかのようなため息を吐く。

「もちろん突然劇のBGMの演奏をしてくれなんて、最初は門前払いにしてやろうかと思っただわ。けれど、彼女も考えたわね。後輩の奥山さんに話を持ってこさせて、もし私が承諾しなければ、彼女はこっぴどく有川さんに叱られてしまっただわよ」

「有川さんは、芦沢さんの情けに賭けようとしたってこと？」

彼女に情けがあるように思えないけど。そう心中でこっさり思った薫だったが、芦沢にはすっかり見透かされたようだった。眉間に皺を寄せ、じつりと見つめてくる。

「小野村君、今、失礼なことを思ったでしょう？」

「いや、そうじゃなくて」

気まずさに目を泳がせて言う。

「そうじゃないってどういうことよ」

「ええと、ハハ……」

芦沢は肩にかかった髪を払い除けて、公園のブランコの方を見る。

「わ、わたしだって、鬼じゃないのよ。あの子、有川さんに気に入られようと必死だったから、私が声を荒げて、すっかり肩落としちゃって、それで、ちよつと気の毒になって。言い過ぎたかなと。それで引き受けたのよ」

「ちよー意外だな」

山下が面白がるように目を丸くした。

「ち、超意外で悪かったわね！」

彼女は恥ずかしいのか、殴りかかるように山下に向かって腕を振り上げる。しかし、それは威嚇のようなもので、本気ではない。山下が「ひい」と、みっともない悲鳴を上げるとすぐに拳を下ろした。

堂野が先を促した。

「それで？」

「まあ、そんなこんなで引き受けた仕事だから、最後まで全うするつもりだけれど……」

彼女はそこで一度、言葉を止めて、

「でも、そんな無茶な仕事を押し付けてきた有川さんへの私の個人的な怒りが消えているわけじゃないわ。彼女には、それ相応の返しをしたいと思いますよ」

「……芦沢さんの仕返しか。有川ほどではないが、ただならぬ恐怖を感じるな」

薫は後頭部辺りにひりひりとした痛みを感じた。彼女が吹奏楽部でとても恐れられている存在であることは以前から知っている。

「それで、あなた達に協力してもらいたかったわけ」

「なるほどね」

「おう、あの芦沢がこんなやる気になるとはな。いいぜ、協力してやる」

山下は自信満々にぽんと胸を叩くが、間髪入れず、芦沢に言い返される。

「残念だけど、山下君には期待していないわ。せめて作戦を邪魔しないように、可能な限りかましい口を塞いでおいて」

「な、なんだよ、釣れねえな」

勢いを削がれた彼は足元のゴミを蹴飛ばして、不満そうに言った。
そんな彼はさておき、

「でも、芦沢さん本気なの？」

薫は彼女に問いかけた。

もちろん、彼女の考えていることは理解できる。同じ部を統括する部長という立場でありながら、有川はそれを蔑ろにした上で、指示に従えと、間接的に命令をしてきたのだ。彼女が激怒するのは最もなこと。

しかし、「仕返しをする」という表現が出たのに薫は驚いた。なぜなら、その言葉の裏には如何ともしがたい、暗いじとじとした陰湿性が付随している。正々堂々というイメージのある芦沢と大きく食い違うものだったのだ。薫はそれが彼女の流儀に反している、と思ったのである。

けれど、芦沢は即答した。

「本気よ。当たり前じゃない。小野村君は、悔しくないの？ こんな風に有川さんに利用されるだけされて」

芯のある声に圧迫され、薫は首を振る。

「そ、そりゃあ、悔しくないなんてことは、ないけどさ」

「だったら、男らしく頷きなさい。ちゃんと胸張って、有川さんにかつんと言ってやればいいのよ」

「う、うん」

反対にかつんと言い返されそうだが、頷いた。

すると、芦沢は土留めの上から立ち上がり、ベンチの方へ歩いてくる。そして、腰に手を当て、薫の顔を覗き込むところ言った。

「それに、あの子に言いたいことがあるんでしょ」

「あ、あの子？」

「須藤さんに決まってるじゃない。好きなんですよ？」

目が点になり、呆然と、腕が垂れた。

「……芦沢さんも知ってたの？」

「当たり前じゃない」

そのあまりにもあっけらかんとした様子に、もしかすると、この辺り一帯の一般常識なのだろうかと錯覚しそうになる。

「ちなみに、誰から聞いたの？」

なんとか気を持ち直すと、薫は切迫した危機感を感じつつ、訊いた。この情報がどこから漏れているのか、その詳細を掴み、迅速に封じ込まなければ、遅かれ早かれ君恵の耳にも届いてしまうことだろう。そうなれば大問題だ。

しかし、彼女は知らぬ素振りである。

「それじゃあ、情報を渡しましょう」

「あおう、質問、したんだけど」

「さあ、出番よ」

彼女は右を向いて、人を呼んだ。目を向けると、再び公園の外の闇の中から、体つきのいい少年がのそのそと歩いてくる。

「演劇部の馬場じゃないか。どうしたんだ？」

「どうしたもこうしたも、芦沢さんに呼び出されて」

頭を掻きながら、馬場少年は体格に似合わぬおどおどっぷりで声

沢の後ろに立った。

「お前、泉田中学校に居なくていいのか？」

「山下先輩、よくぞ心配してくれました。そう、僕はこんな場所に
いるべきではない！」

「ごもつともだけれど、私はあなたに用があるの」

有無を言わせない芦沢の淡然とした口調に抵抗の意思もなく、馬
場はすぐさま降参する。

「はい、僕が間違っていました」

「じゃあ、劇の台本を出しなさい」

「こちらにございます」

すると、彼は着ていたブレザーの懐から、冊子を取り出す。その
表紙に銘打たれた題名は当然、見覚えのあるものだった。

「……………聖夜の歌姫……………」

薫がつぶやく。

「堂野君、これが情報よ」

ほら、と芦沢は彼に手渡した。

「俺にどうしろと？」

「あなた、本をよく読むそつね」

「まあ、それなりに」

「一ヶ月に三十冊とか、一日に一冊の計算ね」

すると、肩をすくめ、堂野はうんざりするように首を振る。

「それはまた妙なゴシップだな。別に毎日一冊、規則正しく読んでいるわけじゃない」

「うん？ それはどういふこと？」

「調子がよければ二、三冊は読める時だってある」

「……」

あまりのことに一瞬場が硬直するが、芦沢が気を取り直すように咳を一つしてからつつじた。

「まあ、それだけの本を読破しているのなら、物語を書くことぐらい、お手の物よね？」

彼女の強い眼光がぶれることなく堂野に向けられ、何かを理解したかのように彼はぺろりと舌を出した。

「……つまり、劇の台本を書き換えると？」

「ええ、結末を書き換えて欲しいの。彼女が驚くようなものにね」

事も無げに彼女は言う。

「まさかそれで仕返しをするのか？」

「そうよ。面白いでしょう？」

なんだそれは、と山下が首を傾げた。

「回りくどい話だな。単純に劇の進行を邪魔する、なんていうのじや悪いのか？」

すると、彼女は不機嫌に眉を吊り上げた。彼を威嚇するように荒々しく腕組みをし、睨みつける。

「いかにも無鉄砲な山下君が考えそうな駄案ね。あなた理解してる？ 今回はポランティア演劇をやっているのよ。お客さんにまで不快な思いをさせるわけにはいかないし、そんなことをすれば単なる謝罪だけじゃすまないと思うわよ」

「芦沢さんの言う通りだ。申し訳ないが、山下は作戦に口出ししないでくれ」

堂野からも強めに釘を刺され、彼はしゅんとベンチに座り込む。そのまま、べたりと前屈したと思うと不貞腐れて寝た振りを始めた。当然のことながら薫たちはそんな彼に突っ込みを入れるような愚かなマネはしない。

「演劇馬鹿で、完べき主義の有川さんが一番ショックなのは、自分が作り上げた劇が思い描く筋書きとは違う方向に進んでしまうことよ」

「確かにその通りだな。単なる嫌がらせじゃあ、彼女は屁にも思わないだろう」

「だからこそ、堂野君に劇の内容を書き換えてほしい。もちろんめちゃくちゃ話にするんじゃない、新しい結末を用意して欲しいの。皆があつと驚くような、ね」

「うん、それは了解だ」

しかし、と堂野は顎に手を当てる。

「それを書いたとして、どうやって本番で実行するんだ？」

すると、ご心配なくと彼女は背後を振り返る。

「それは、この馬場君を通じて、部長と奥山さん以外の人間には伝えておくわ。事前に伝え聞いた話では、演劇部内の人間も、今の有川さんにいい感情を持ってない。仕返しになると思ったら彼らも力を貸してくれると見て間違いないわ。でしょ？ 馬場君」

すると、彼は半ば肯定を強要されたかのようにしきりに頷く。

「ああ、はい。今回はみんな部長の指示に従うのを本心では嫌がっていたようです」

「なら問題ないわね。でもそれはつまり、馬場君は責任重大であることを示すわ。失敗なんてしたら、有川さんから何をされるかしらね」

芦沢の言葉に馬場はまるで死の宣告をされた病院のように一気に表情が青ざめ、胸の前で手を組んだ。

「嗚呼、神様。僕は明日の朝陽をこの目で拝むことができるのでしょうか、どうか哀れな子羊をこの不可避の窮地からお救いください。アーメン」

「ふふふ、そんなに心配しなくても大丈夫。全ての責任は私がとるつもりよ。失敗しても、私がきちんと彼女に説明するわ。これは私の個人的な恨みだもの」

しかし、そこで、薫の真横ですぐさま反応した少年がいた。彼は台本を掌に打ち付けると、短くも鋭い、逆接の一言を放った。

「いや」

「何？ 堂野君」

「責任は俺に取らせてくれ」

彼女は戸惑いで眉をへの字に曲げた。薫も同じ気持ちで凜然たる面持ちの彼を見上げる。まさか、恰好つけようとしているのか、とも思ったが、彼の引き締まった頬には余裕ぶった気配はない。

断固たる意思に基づいて、彼は全てを引き受けようと提案しているのだ。

「な、何だよ。この作戦は私が提案したのよ」

「そうだ。でも、芦沢さん。君は吹奏楽部の部長だ。君が責任を取ることを厭わなくても、そのことで、吹奏楽部に悪影響が生じる可能性がある。仕返しを怒った有川は何をするか分からないぞ」

「でも、堂野君が？」

彼は自身の胸に手を当てながら話す。

「俺は帰宅部だし、別に失うものも特にないと思う。それに……」
「それに、何だ？」

いても立つてもいられず、薫が訊いた。彼が何を思って、何のためにそうするのか、真相を知りたかった。今の自信を喪失した薫にはとてもそんなマネは出来ない。

しかも、あの有川だぞ。

それをいとも容易く口にする理由は、いったい。

堂野は薫と目を合わせると、おもむろに口を開く。

「何より、有川のためを思っていることだ」

「有川の、ために？」

「そうだ、彼女は本当はこんなことをする人間じゃない。今回の劇だって、何より演劇部のためにやってきたんだ。そして、それを少

しやり過ぎた、ただそれだけだ。俺は彼女に間違っていたことを教えてやりたいと思う。いつもの彼女が一番いいと思うから、正しい方向へ体を向けてやりたい。そう思うから、だから、今回の作戦の首謀者は俺。それで問題ない」

「亮介、マジだな？」

ふっと肩の力を抜いて、薫が確認する。

「ああ」

「……そうか」

彼女のために、か。

薫は胸を掴まれたような、そんな強い衝撃に軽い虚脱感を覚えていた。亮介は有川のことを思っ、いつもよりも大胆なことに挑もうとしている。あの、いつも物静かな彼が、だ。

でも、一方で自分はどうか？

君恵のために、彼女を喜ばせるために、何かをしようとしているのか？

いや。

後ろ向きの不安に囚われて、逃げ出して、またしても自分の檻の中に閉じこもろうとしていただけだ。弱虫で、自分が嫌いで、自分が出ること、しない。しようとしていない。

薫は歯を食いしばった。

それで、いいわけがないだろ。

あの文化祭で、薫は自分にも出来ることを確認したのではなかったのか。

だとすれば、ここで踏みとどまるべきではない。君恵になんとしても想いを伝えるのだ。

「そうか、分かった。俺も協力する」

薫は、決意の顔で親友を見上げた。

「薫……」

「小野村君？」

「小野村、先輩……」

「おお、ついに目覚めたか小野村！」

全員の驚きの視線を浴びながら、そして、高らかに宣言する。

「あの有川が間違っていたことを思い知らせてやろう！」

「そうだな、そうこなくっちゃな。よし、一致団結だ」

亮介が拳を宙に突き上げ、すぐに全員が、くすくすと笑いながらそれに習った。

「よし、逆転のシナリオはここからだ！」

第九話 癒しの歌声にアンダーライン 1（前書き）

前書き、書こうと思って忘れてました。

ええ、なんだか少し前に、「こっからが佳境だ！」みたいな話をした気がするのですが、ちょっとまだそういう雰囲気の話には行けそうではありません。

前作では、クライマックスの辺りで勢いがつきすぎて、なんだか物足りない終わり方をしてしまった失敗を踏まえ、今回はもう少しじっくり落ち着いて攻めてみようかと思っています。

そのために、君恵さんの話を少し、入れてみました。

第九話 癒しの歌声にアンダーライン 1

『聖夜の歌姫』

物語の舞台は、一年の大部分を雪に閉ざされた、とある小国。

幼き頃、親を亡くし、天涯孤独の身となった少女リースはあるとき、奴隷としてその国へ売られてくる。

その後、彼女はすぐに大きな商屋の召使いとして買われることになるのだが、失敗が多く、役立たずだと、ものの一月も経たないうちに屋敷から追い出されてしまう。

食べ物を買う金もなく、その日の寝床もないリースは、空腹のまま冬の町をさ迷うことを余儀なくされ、ついに町外れの家の前で力尽き、行き倒れる。

幼き少女の命もここまでからと思われたとき、そんな彼女を救ったのは、家に一人で住んでいた若き音楽家の女性だった。彼女は少女を手厚く保護すると、家事を手伝わせる代わりに、家に住まわせることを約束する。

贅沢などは出来ないが、家族といたころのような楽しく過ごす日々、リースは、その音楽家と心を通わせ、汗を流して働いた。

そんな折、音楽家の女性が弾くピアノに合わせて歌を歌い始めたことがきっかけで、彼女は歌の才能に気がつく。

彼女の歌唱力は高く、癒しの力があると言う噂は瞬く間に町に伝わり、毎日のように酒屋や広場で歌うようになった。

時が流れ、いつしか、その噂はその小国を統べる王城にまで伝わる。その話を聞いた王子はその歌声を是非聞いてみたいと、少女は城に招かれることとなり……。

老人は体育館の隅の椅子に座りながら、パンフレットの劇のあら

すじに目を通していた。屋内は暖かく、快適な温度で、綺麗に整列したパイプ椅子が並んでおり、そこに座った入場客の談笑の声で満杯である。目の届く範囲で、空いている座席は手前の数席以外、見当たらない。

その椅子もたった今入ってきた女性のグループで埋まった。入り口付近でそれを確認した演劇部員が、今度はすぐに予備の椅子を抱えて飛んでくる。

なかなかやりおるな、あの娘。

老人は自身の計算の上を行く状況に、どこか陶醉しているように少し上を向いて顎鬚を撫でる。

まさか、本当に満席にしてしまうとは。わしとしたことが、少々見くびっていたようだな。

「しかし……」

老人は一人つぶやく。

上演までもうあまり時間も残っていないというのに、あの少女は見当たらないな。

数十分前、老人は演劇部の部長である有川久実の姿を、この場所で何度も見かけていた。他の部員と共に、準備のため、あちらへこちらへと忙しく走り回っていたのを確認していたのである。だが、一度コートを羽織り、入り口から外に出て行ったと思ったら、それっきり姿が見えなくなってしまった。

よもや、問題でも発生したのだろうか。一抹の不安が胸をよぎる。

とはいえ、彼女のことだ。

老人は考え直す。

多少、予想外の事態が発生していたとしても、持ち前の機転によつてたちどころに解決しているはずである。

きつとこれも杞憂に終わってしまうのだからという楽観的な思いがありつつ、しかし、それでも気になってしまふのが老婆心というものだ。彼の足は自然と体育館の入り口へと向かう。

温かい空気が途切れ、下足棚が並ぶ、狭いエントランスが見える。大きく開け放たれた玄関口には簡易的な受付が設けられており、数名の生徒が会場を訪れる客にパンフレットを配っていた。

こちらに声をかけるの仕事の邪魔になるか。

そう判断した老人は脇の通用口から外に出る。

すると、冬の凍てついた空気が服の裾から一気に流れ込み、老人はたまらずくしゃみをした。

「ふう……今夜は冷えるな」

上着を持ってきて正解だったと微笑むと、ふいに、エントランスの明かりが漏れ、足元の石段に誰かが腰掛けているのに気がついた。はっと動きを止めると、ドアが開いたことに気がついたのか、くしゃみに反応したのか、その誰かが振り返って顔を上げた。

「あ……」

座ったままの少女が驚きを声にあげる。

「こんばんわ、お嬢さん」

老人は紳士的に丁寧な会釈をし、彼女の隣に立った。

「こ、こんばんわ」

「うむ、誰かと待ち合わせ、かな？」

「いえ、別に約束とかじゃないんですけど。ある人を、待ってまして」

すると、少女の黒い瞳がふんわりと蛍光灯の色を灯す。老人にはそこから、どこか純粹な一途さが持つ確かなぬくもりが垣間見えた気がした。

「しかし、こんな場所で待っていては風邪をひいてしまうぞ。せめて、中に入ってはどうかね？」

「いえ、ここで待っていないと。中に入れば演劇部の誰かに見つかって、舞台裏に引っ張られてしまうと思うので」

「ふむ、演劇部の子か」

それならばと、老人は自分が羽織ろうと思っていた黒のコートを彼女の肩にかける。

「え、これ……」

「せめてそれだけでも着ておきなさい。歌姫さん」

さりげなく老人が言うと、少女が礼を言おうとした口が途中で止まり、瞳が大きく見開かれた。そして、すぐにコートの下に着ている服装を確認した。おそらく、「歌姫」というイタズラ書きが、どこかに貼りつけられているのではないかと勘違いしたようである。

しかし、当然のことながら、老人はそんな馬鹿正直な掲示物を参考にしたわけではない。

直に、何もないことが分かったようで、彼女は不思議そうに訊いてくる。

「……どうして、それが？」

「なあに、演劇部だと聞いてな、それで、もしかすると劇に出演する子ではないかと推理したわけだよ」

「でも、どうしてそれで、歌姫役だと？」

訊かれて、老人は何か音楽の音色に耳を澄ませるように目を閉じてから息を吸うように言った。

「君の声がとても綺麗だからだよ」

「……え」

「まるで聖夜に響き渡る鐘の音のような透明で、伸びやかで、それでいて温かい美しい声をしているからだ。それで、君が歌姫役なら、とても適役だと思ってね。少々願望交じりな推測ではあったが、見事的中したわけだ」

すると、呼吸が止まるように、何かに射抜かれたように、少女の瞳が一点を見つめて静止した。知らず、コートの上に置いていた手に力が籠もったようで、皺が寄っている。それがあまりにも大げさな反応に見え、老人はどうしたものかと疑問に思った。

「何か、気に障ったかね？」

しかし、少女はすぐにかぶりを振る。

「いえ、そうではなくて、『同じ』だったから、びっくりしたんです」

「同じ、とは？」

「私が待っているその人も、同じことを言ってくれたんです。私の声がきれいだって」

「ほお……」

老人は感心したように顎髭を触る。そして、少女の遠くへ向けられた瞳を覗いてから、周囲に響くような豪快な笑いを見せた。

「ハツハツハ、まさか、こんな失笑を買いかねない浮ついた台詞を、他にも口にした気障な男がおるとはな」

「え、え、どうして男って」

ふいに、少女の白い肌にぽつと朱がさしている。すぐに老人は、長年培われた鋭敏な勘から淀みなく返した。

「君のその初々しい反応をみておればすぐにそれと気がつくものだ」

「初々しい、反応ですか」

「老人の目はごまかせんよ。さては恋人かね？」

「そ、そういうわけじゃ、ないです」

老人はその返答にこみ上げる小さな笑いを禁じえない。

彼女はこう言っているが、彼女がその男性に好意を抱いていることは間違いないな。ま、さらにからかうは止めておこうか。

「ところで訊ねたいのだが、演劇部の部長さんはどうしたね？」

「久美ちゃん、ですか？」

「そうだ、有川久実さん。先ほどから彼女を見かけないのだが、ずっとここにいたのなら、どこに行っただかは知らないかね？」

「いえ、私は知りませんが。もしかして、泉田中学校の校長先生ですか？」

「ああ、そうだ。だから、彼女とは是非、上演前に一度話をしておきたかったのだがな。まあ、忙しいのだろう、邪魔しないでおこうか」

すると、少女の顔にどこか寂しげな影が差したのを見逃さなかつ

た。以前に比べて視力は衰えたとはいえ、こういう微妙な人間の表情の機微には敏感になったものだな、と老人は楽しげに思う。しかし、今はそんなことを考えるべきではない。

彼女に何かあったのだろうか。

すると、少女は横目で老人を見た後、逡巡したようにためらいがちに口を開く。

「あの、変なことですけど、聞いて貰いたいことがあるんです」

第九話 癒しの歌声にアンダーライン 2

「あの、変なことですけど、聞いて貰いたいことがあるんです」

「おや、何かな？」

「私の友達のことなんです」

「なるほど、君の……」

老人は目を細めて、それに当てはまる人物に即座に察しをつけた。話の流れから考えて、子供にでも出来る推測だ。

友達、か。

その人物にはあえて言及せず、老人は続けた。

「そのご友人がどうかしたのかね」

聞いてもらえると安心したのか、彼女は膝を抱えてほっと息を吐く。

「ええ。その子のことなんですけど、性格にちよつと強引なところがあつて、周りに敵を作つてしまい易いタイプというか、怖がられて」

「ほお」

「あ、でも私との間ではそんなことはないんですよ。対等の友達として付き合ってるんです。根は悪い人じゃないから」

「ふむ、そつだな。君のような子の友達なのだ、悪い人間とは思えない」

すると、彼女は寂しげに目を伏せる。

「でも、最近彼女、どうにも変で、何か皆に隠しているみたいなん

です。自分だけで何でもやろうとして、頑張りすぎているようで、それで、そう、そう思っんです。それが片や、周りから見ると、露骨に嫌がらせをされているみたいで。彼女、皆から孤立していて…」

混乱しながら話しているのか、少女の言葉はどうにもきこえない。脳内の迷路をぐるぐると巡っているような話し方だ。

だが、老人には一っただけ明確に分かることがある。

「君は、彼女を助けたいと思っているのかな？」

「え？」

「そういうことなのだろう？」

問われて、彼女が小さく、自信なさげに頷く。

つまり、少なくとも意思はあるということだ。

しかしそれならば、解決策はいくらでもあるはずで、彼女が自分にわざわざ相談を持ちかける理由はないと思われる。老人は原因を推量した。

ということとは、問題の解決に向かう途中で、行き詰まったということか。

「それが上手くないのかな？」

すると、案の定彼女は頷いた。

「はい。他の友達からアドバイスされて、直接話をしろって。でも、今の私には彼女を説得できる自信がなくて。私の気持ちがあきちゃんと伝わるのかどうか。不安で」

なるほど。

老人は鼻の頭を擦った。

彼も長い人生で幾度も経験していることではあるが、人間関係というものはつくづく厄介なものである。きつと彼女は友人との関係に亀裂を入れたくないばかりにしり込みし、ジレンマの渦中にいるのだろう。

何か得ようと前進すれば、その何かを失うかもしれない。

進めば後戻りできない恐怖の前で立ちすくみ、右往左往してしまう迷子の気持ちだ。生きていれば誰もが経験するであろう苦しみで、そして、そこからは容易に逃げられない。

しかし、これは同時に喜ばしいとも言える。彼女にこれほど心配されているという『友人』は本当に恵まれているのだ。

放っておいてもじきに解決の日は訪れるだろうが、せつかく彼女が自分に期待をしてくれているのだ。それに応えないというのは、老人の流儀に反した。

さて、この思春期の少女に、この老いぼれが与えるべき助言を、どれ、探してみるか。

額に皺を寄せ、さらに指で摘む。

何か、名案は……。

「……して、わしの勝手な推測だが、そのお友達はこの劇場に来る、来ているのではないのかな？」

あくまで自然にそう訊ねる。

「あ、はい。そうです」

やはりな。老人は微笑んだ。

「だとすれば、一つ良い方法がある。わしから君に教えてやれると

思うよ」

「本当ですか？」

少女の目に希望の光が灯った。

「それは、何ですか？」

「君が彼女のことをどう思っておるか、言葉ではなく、演技で表せばいいのではないかな？」

「え？」

面食らった彼女の肩から、コートがずるりと落ちる。

老人には彼女の気持ちは分からないでもない。そんな回りくどいことをする人間など、この世界にそういるとは思えない。

だが、彼女が直接的な交渉に自信がないというのであれば、これも一つの案だ。

「友達ならば、当然主役である君の演技に注目するはずだ。ならば、物語に出てくる歌姫の力を借りて、彼女に他人への思いやりを思い出させてあげればいい」

「思い出させる、ですか？」

「そうだ。この歌姫の歌には人を癒す力があるのだろうか。君の気持ちは歌に宿ってそのご友人に届くかもしれないぞ」

まるで、半分夢を見ているような焦点の合わない瞳で、彼女は繰り返す。

「私の、気持ちは、歌に宿って……」

老人はつづけた。

「演劇の本質とはそういうものであるのだと、私は思うよ」

「……」

「自らの想いを、自らの考えを、余す事無くその身を持って表現する。何よりも、誰かにそれを伝えるために、共感を抱かせるために」

老人の弾んだ声は自身が感じる以上に若々しく響いている。

「あふれ出しそうな幸福を、爆発しそうな怒りを、流されそうな悲しみを、朝の湖のような静けさを、氷壁のような冷酷さを。役者はその演技をもって、はじけ飛ぶ想像の火花を体で具現化する。台詞も動きも音楽も、感じる全てはメッセージだ」

少女の顔が老人と共に夜空の向こうを見つめた。そこに広がる遠い宇宙はどこまでも際限なく広がっていて、それが芸術の持つ無限性とリンクしているようだった。

「そして、それを見て、観客たちは何かを思うはずだ。自らに何が出来るのかを、何をすべきなのかを。何を重んじ、何を捨て、何を愛し、何を憎むかを。これが完成していない演劇、それは断じて演劇ではない。ただの独りよがりな道化の真似事に過ぎん」

「……」

老人はそこですつと息を吸う。

「だから、君が友人に何かを伝えたいのならば、その一つの方法として演劇を用いることは、何も不自然なことではない。いや、むしろ、それこそが演劇だと断言してもいい」

「は、はあ」

「八八、少し熱っぽ過ぎる台詞だったかな」

唐突な演説に気圧されたのか、少女はぐったりとしたように頷いている。これには、やりすぎてしまったかと老人も苦笑してしまった。軽く咳払いをする。

「……さて、老体に冬の寒さはちと厳しすぎる。そろそろお邪魔させていただくことにするよ」

そして、頃合いを見計らい、腰を上げると体育館へのドアを開いた。

「あ……」

「それではな、本番での君の演技、楽しみにしているよ」

「あ、ありがとうございます」

半身を屋内に入れながら立ち上がってお辞儀をした少女を振り返る。

「礼には及ばん。待ち人が早く来ればよいな」

「はい……そうですね」

「それから、そのご友人には、よろしく言っておいてくれ」

「あ、はい……」

「ふふ、青春とは、げに美しきこと、かな」

老人は不思議そうな顔をした彼女に気がつかれないように呟いて、そのままドアを閉めた。

第十話 交錯の思いにアンダーライン 1

凍てつく冬の道を苛立ちまぎれに歩きながら、有川久美ははっと左右を見渡した。

いったいあれからどのくらいの時間が経ったのだろう。気がつけば坂道を下り、耳障りなほど騒がしい街の雑踏の中に、紛れこんでいたらしい。

久美は舌打ちをする。私としたことが、感情を抑えられないままに、こんな場所まで来てしまったの？

歩行者用の青い信号が点滅を始め、それに合わせるように、目の前に先ほど言い合いをした堂野亮介の表情が、浮かんでは消える。

私が間違っていると言った彼。本当の私は違うと言った彼。

久美は俯いたまま歩いていく。

そんなこと、出来るわけじゃないじゃない。

「……出来るわけ、ないじゃない」

思わず、声に出していた。驚いて、立ち止まる。

無意識に言葉が漏れてしまうほどに、私は動揺しているというの？ 迷いが、生じ始めているの？

なんで。どうして。

混乱の兆しが、まるでドミノ倒しのように押し寄せる。

今までの久美の経験では、こんなことは一度もなかった。

いつでも誰に対しても冷静で、城を攻め落とすがごとくまくしたて、自分のペースに乗せるのが上手かった。そして弱点を見せた相手をここぞとばかりに攻撃し、自分の思うがままに場を操る。

それが、今回は上手くいかなかった。
自分は、女々しくもあの場所から逃げたのだ。あの、堂野亮介から。

こんなことって、屈辱だわ。

いつもは自分の企てのために、そこに向かう道筋を速やかに見つけ出し、邪魔になるものを片っ端から排除する。そのためには、多少強引な手も使う。なにより、行動をしている自分には迷いが無いし、目的のためだと思えば、雑多な感情などないがしろにできた。それが、自分。

満足な結果を得るために、全てを自分で操作する。

なのに、なんなのよ。

このどうにもならない気持ちは。

人ごみでこった返した交差点を横断歩道で渡って、学校の方へ方向転換をした。余計なことでタイムロスをしてしまったために、早急に学校に戻らなくてはいけない。

足を運ぶ速度が上がる。ふいに大きなプレゼントの箱を持った人とぶつかりそうになり、咄嗟に避けると、道の脇、小さなくぼみに足を取られ、電柱にぶつかりそうになった。

何、してるのかしら。

皆を驚かせてやろうと思っていた。

私が、私が全てをやって、完璧に作り上げて、その上で、皆をあとと驚かせてやろうと思っていた。

大きなホールでの演劇なんて、私たちみたいなところの学校じゃ、中々出来ないのよ。

そして、なによりも。

久美はあの老人に、自分の演劇を認めてもらいたかった。

『君が部長になった演劇部の舞台を間近で見たい』

そう生まれて初めて言ってくれた、あの老人に。

だから、そのためには、久美の指示で全員の足並みをそろえてもらう必要があった。邪魔な意思を排除する必要があった。全てが上手くいくようにあらゆる手段を講じる必要があった。

それが、やり過ぎですって。

感謝されて当然のことをしたのに。

私の気持ちも知らないくせして。

しかし、久美は驚いていることがあった。

余裕がないって、ばれてた。私でも、気がついていないことだった。

「どっつして……？」

すると、久美には今までの敵意に満ちた感情が消えていくようだった。代わりに、不可思議なぬくもりが胸に宿るのが分かる。

私が優しいって、そんなこと言われたの、初めて。

堂野君は、私のことを……。

しかし、久美は即座に首を振る。

「こんなことで、迷っててどつするのよ。本番は待ってくれないわ」

そっだ。今自分がするべきことは、どつすることも出来ない過去

の出来事をつじつと悩むことではない。

劇の開幕まではもはや、寄り道の時間は残されていなかった。今頃、舞台では自分の姿が見えないことで混乱が広がっているだろう。急がなければ。

久美の足が駆け足になった。

第十話 交錯の思いにアンダーライン 2

「あ、やっと戻ってきたわね！」

奥山紗江は、音響室に入ってきた少年を険しい目で睨みつけた。

「さっきから会場にいないと思ったたらどこに行ってたのよ！」

「……ああ、悪い悪い。ちょっと捕まってるさ」

その少年、馬場浩太はドアを閉めつつ、うそ臭い半笑いで返す。

「捕まってる？」

「そ、そう、こっこの学校で知り合いを見つけてさ。話し込んでたんだよ」

「もしかして、今までずっと？」

「ああ、うん。それが、話の長い奴でさあ……」

おそらくずっと外にいらたろう。彼は寒そうにポケットに手を突っ込み、大きな肩を縮ませていた。

それを見て、紗江は呆れる。

まったく、大事なときだというのに、この男ときたら。

「話なら劇が終わった後でもできるじゃない！」

そう一喝してからふんとそっぽを向いた。

彼が持つ底なしに能天気な気質は、いつでも紗江を不機嫌にさせる。糸の切れた凧ではないのだから、もう少し、背筋を伸ばしてちゃんと生きるべきだろうと思うのだ。

でなければ、いつか必ず、取り返しのつかない大失敗をしてしま

うに違いない。

紗江はそれを昔から肝に銘じて生きてきた。浮ついた行動や軽はずみな発言をせず、自分のすることに全て責任を負う。それくらい普段から自身を省み、律しなければ、思わぬところで道を踏み外してしまいかねない。

特に、彼のように三歩歩けば道はずれ、あっちへふらふらこつちへふらふらしているようでは、先が思いやられるのだ。こんな調子では将来ろくな大人にならないだろう。

だからこそ、ダメダメな彼に、紗江は注意をしたくなる。

「だいたい、そんな暇があるなら台本を読み直して道具の出し入れのタイミングをもう一度覚えなおさないよ！ あんただけよ、有川部長から十回以上も注意されたのは」

「ああ、そうだったか？ まあ、ぶらついてたのは謝るよ」

浩太は罪悪感の感じられない軽い口調である。

「何よ、その投げやりな謝罪は」

「それより、部長はいないのか？」

彼の視線が狭い室内を見渡す。そこは、舞台裏の階段を上り、短い通路の先に設けてある機材室だ。体育館内をぐるりと回るキャットウォークに繋がっており、舞台を真横上方から見ることが出来る。大抵、この音響室に入るのはナレーション役の有川と紗江くらいで、後の部員は真下の舞台裏で待機しているのだが、そこにいるはずの有川の姿はない。

「それが、さつきからどこかに行っちゃったみたいなのよ」

それを聞いて浩太は何か逡巡したようで、目を泳がせる。

「……そうか、戻ってこないのか」

「あんた、何か知ってるの？」

すると、彼は凶星を衝かれたように、口元を引きつらせた。

「いや、べ、別に知らないって。俺は友達とずっと話してたし」

不審な挙動に何かよからぬ隠し事の気配を紗江は感じないでもなかったが、

「そう、まあいいわ」

とりあえずそのまま流した。

劇が終わったらとっちめてやればいいし。そう考えたのだ。

「今はそれより、劇の準備にぬかりがないかどうかチェックしておいて。失敗なんてしたら許さないんだから」

「ああ」

「じゃあ、早く行って」

「う、うん」

しかし、浩太は返事をした後、その場に立ったまま、動かない。きつと遠くから見れば間抜けな顔をした銅像のようだろう。

こいつ、ちゃんと話を聞いているの？

注意をしようと再び口を開く。

「馬場く」

しかし、それは彼も同時だった。

「あいな、奥山」

「……な、なによ」

「お前は、どう思う？ 部長のこと」

「どう思っつて……」

思わず、言葉を失う。

「正直な気持ちを知りたいんだ」

いったいどういふつもりなのか。

紗江は戸惑う。彼が今までこんな質問の仕方をしてきたことはなかった。

しかし、とても真剣な瞳に、微動だにしない体はただならぬ気迫を伝えてくる。

単なる冗談ではないと感じつつ、紗江は精一杯嫌味に聞こえるように答えを返した。

「……馬場君の数千倍は頼りになる、尊敬すべき先輩よ」

が、こう言ったにも関わらず、浩太は表情を崩さなかった。

「それは、今でも変わらないのか？」

確認するようにゆっくりと、彼は訊ねる。

「さっきから、何が言いたいの？」

「こう言っちゃあなんだが、今の部長がみんなからよく見られてな

「いのは知ってるだろ？」

「……………」

「その部長の一番近くにいるお前は、今回のことをどう思ってるのかと気になってさ」

あまりにもストレートな彼の言葉に紗江は返答に窮する。

もちろん、彼が言うように今の部の空気が悪いことは十分に理解していた。部長の有川の様子が強硬なものに変わり、それまでの厳しくも平和だった演劇部が、今や独裁国家の相貌を呈している。

その変貌ぶりに、部員たちが不平を言わないはずがないのである。しかし、それを理解したうえで、紗江は毅然としたまま答えた。

「わたしは…………部長のことだから、きちんとした考えがあつてのことだと思つわ。だから、別に普段通りに接してるわよ」

「…………無理、してないか？」

「何で？」

「奥山は、部長が間違つてるって思ったことはないのか？」

ついに核心に触れる問いかけが浩太の口から出た。紗江は彼を見つめ返す。

重苦しい沈黙。そして、ややあつて、紗江はふうつと息を吐き出すように言った。

「…………さあね」

これには不思議そうにして、彼は眉をひそめる。

「おい、さあつて……………」

「私が思っているのは、有川部長なら、多少失敗したからつて、そう簡単にへこたれる人じゃないつてこと。たとえ、今は周りから嫌

な目で見られてても、後からきちんと理解し合えると思うわ」

これには意外だったのか、浩太は視線を外さないまま、ぽかんと口を開ける。

「何よ、その目は」

「……いや、奥山は立派だなって思って」

「馬場君の数千倍はね」

彼を小ばかにするように笑ってやった。

「でも、馬場君にしてはずいぶん真面目な質問をしてきたわね」

すると、浩太は恥ずかしそうに鼻の頭を掻く。

「いや、ある人の言葉を聞いてさ。今回の事に関して、俺は少々無関心、いや、避け過ぎたのかもしれないって思ってさ。考え直してみたんだ」

そこで一度、自身に納得するように頷き、

「それでもしかすると、奥山が部長と部員の皆との間で、板ばさみになってるのかもしれないって思ったりしたんだけど。どうやら杞憂だったみたいだな」

白い歯を見せてへらへらと笑う。

しかし、聞いた紗江は内心で驚いていた。彼が言ったことは間違いない真実だったからである。

有川の態度が独裁的なものになってからというもの、正直、その

真下にいる紗江は周りからの攻撃を受けていた。直接的な攻撃はないものの、部員達から忌避の眼差しで見られていることを自覚している。それはまるで目に見えない棘の柵に囲まれたような感じで、決して気持ちのいいものではない。

彼はそれに近いことを察し、心配してくれていたらしい。

『馬場君のくせに、まるっきりダメダメの能無しってわけじゃないのね』

紗江は自分を氣遣ってくれた彼のことを胸中で感謝しつつ、

「ふん、あなたは人の心配より、自分の心配をしなさいよ。ほら、さっさと準備を始める！」

と指でドアの向こうを指す。

「へいへい、つたく、本当に俺の周りにはおっかない女ばっかだなあ」

「何か言った？ 馬場君」

「い、いえ、何も。滅相もございません」

そして、まるで尻を叩かれたように出口に小走りに向かう彼を見て、紗江は思わず、笑みがこぼれてしまう。

「ふふふ、ばーか」

彼の足音が部屋から遠ざかっていった。

第十話 交錯の思いにアンダーライン 3

「おい、こつちこつち。はやくしろって」

「急かすなよ。今行くから」

「ここが、体育館の裏口か？」

か細いライトの明かりが揺れながら草むらの終わりを照らしていた。

隣の堂野が周囲を警戒するように首を巡らす。薫は山下が持っているライトの明かりを頼りに建物の手前、コンクリートの地面の上に立った。とりあえず、ここまでくれば誰かに見つかることはないだろう。

薫は入り口のドアを見て、ようやくほっと安堵する。

泉田中学校の校舎の南、体育館の背後の雑木林に、薫たちは北の校門側から回り込んでいた。

通常であれば、わざわざ裏口ではなく、正面の玄関から入るのだろうが、今回は状況が状況だけに安全策を取ることにしたのだ。というのも、もしも有川が正面玄関で見張っていれば、薫たちと鉢合わせということになり、全ての計画が丸つぶれになってしまいかねない。

多忙な有川が会場の正面玄関で見張るほど余裕があるとは思えないが、万が一、もしものことがある。念には念を。

亮介は鋭い目つきでそう言っていた。彼は一度気を張ると瑣末なことでも注意を怠らない。

「中では今頃、席が客で埋まってるんだろっな」

薫は館内を想像しながら呟いた。

きつと有川は今頃会場となっているこの体育館内部で部員たちに最後の打ち合わせを行っているのだろう。

計画では、薫たちはここでしばらく演劇が開始するまで待った後、演劇部員たちによって中に入れてもらえる手筈になっている。それまで、少し寒いがここで待機していければならなかった。

薫はようやく着替えた服で、襟元を寄せながら、ドアの脇に座り込んだ。体の放熱を少しでも防ぐには、小さくなるのが一番であると思われたが、大して意味があるように感じなかった。足首の辺りがすうすうするのだ。それだけでも、背筋の辺りぞくぞくとしてしまい、寒気が体中に伝播する。

うす明かりの中で堂野が歩いてきたのが分かった。薫の隣で、壁に寄りかかる。

しばらくして、彼が訊いた。

「声の調子は、大丈夫か？」

「……ああ。申し分ないよ。当分使ってなかったけど、問題はないと思う」

薫は喉の辺りを摩りながら答える。

「そうか、文化祭の時みたいなことになってしまうと、と心配したんだが。なにしろ、今回は誰も助けられないからな」

「亮介、任せとけて。前みたいに調子が悪ければ気付くから」

苦笑いしながら、薫は友人に親指を立てた。

だが、正直笑い事ではない。文化祭本番で背筋に悪寒の走った失敗を薫は今でもはっきりと覚えている。

声真似の力を使いすぎ、喉に負担をかけていたことに気付かないまま本番を向かえ、クライマックスのシーンで声が出なくなってしまうのだ。

あの時は機転を利かせた堂野によって、君恵が代わりに声を出してくれたが、それがなければ劇は大失敗に終わっていただろう。

すると、ライトの紐をくるくるといじっていた山下が屈みこんだ。

「試しに何か真似をしてみたらどうだ？ この作戦じゃ、薫のその力が重要なんだからよ」

言われて、薫は山下を一瞥し、

「試しに何か真似をしてみたらどうだ？ この作戦じゃ、薫のその力が重要なんだからよ」

と全く同じ声で鸚鵡返しをやってやった。

すると山下が顔をしかめ、堂野が笑った。

「その様子だったら心配はないな。本番は一発勝負だ。台詞を噛まないようにだけ、気をつけてくれ」

「了解だよ。これでも一度は舞台を経験してる。本番の緊張には少しは慣れてるつもりだ」

堂野が信頼の眼差しで薫の肩をぽんと叩いたのに対し、山下はまねされたことが不快だったのか、ライトの紐いじりに戻っていた。

クリスマスイブの夜は音もなく静かだが、確実に、ずんずんと深まっていく。

こんな場所においても、今頃、人々は浮かれ気分の只中にあるのだ

ろつと想像すると、不思議と心が浮き足立つ思いだった。そして、意識もせずに彼女の表情が思い浮かぶ。

「須藤さん……」

彼女は今、劇の準備をしているのだろうか。幕が上がるのを、今か今かと待っているだろうか。

作戦の本番を待つ緊張と、彼女を思う気持ちと同時に胸に押し寄せ、心臓が強く拍動していた。

今度こそ、絶対に、彼女に思いを打ち明けるのだ。薫はそう決意している。

文化祭の後のような、不甲斐ない結果になるなど、もう嫌だった。そう、友人の期待にこたえるためにも、自分はやり遂げなくてはならない。

それを思い出して薫は顔を上げる。

「亮介、ありがとうな」

短くも、心のこもった感謝の言葉だった。

「何がだ？」

「今回の作戦。ラストシーンを書き換えるとき、わざわざ俺にチャンスをくれたんだろ？」

「……さあ、何のことやら。たまたま思いついた話がそうだっただけだ」

「嘘つけ、それで俺が出てくる必要はないだろう？」

「だから偶然だよ」

あくまでしらを切る親友に、薫はもうこれ以上追及しないことにした。しつこい追求は野暮というものだ。胸の内でもう一度だけ感謝を告げ、制服の下に隠し持ったプレゼントをぎゅっと力を込めて掴む。

「薫」

すると、短く、彼が呼ぶ。

「どうした？」

「人を喜ばせたいって思う気持ちは、どんな感じだ？」

「人を喜ばせる？」

薫は首を傾げる。堂野は薫が懐に抱えている君恵へのプレゼントを見ていた。

「演劇だつて一緒だろ。人を喜ばせたい。人を感動させたい。自分の思いを伝える場なんだつて、有川は言っていた」

「へえ、そうなんだ」

彼女がそんなことを語る場面など、薫には想像がつかなくて、感心するようにため息をついた。

彼女と亮介は放課後によく話をしていたようだが、劇について語り合うほどだったとは、意外だった。

堂野は目を細めて闇を睨む。

「俺はこの作戦を単なる嫌がらせなんかにはしたくない。彼女に俺の思いを理解してもらつたための手段にしたいんだ」

そう語る親友の表情は薄暗がりによく確認できないが、どうも薄

っすら赤みが増している気がした。

「でも、そんなこと、俺は自分からしたことないから、不安で。薫に気持ちを伝えるってどうということか、聞きたくてさ」

ふーん、と薫はなぜか妙に嬉しくなる気持ちを抑えながら、現時点での答えを返す。

「別に、不安でいいんじゃないか？」

「え？」

すると、驚きで彼は呆気にとられたようだ。あまり見せない意表を衝かれた顔で、口を開けている。

「いいって？」

聞かれて、薫は彼女へのプレゼントを選ぶときのあのどうしようもない、馬鹿みたいに空回りをする気持ちを思い出す。

それはどこか、からだの芯を温める暖炉の火のようで、それでいて何度も同じ道を行きつ戻りつする迷子の気持ちだった。掴みようがなくて、うざりたい、ふわふわふらふらした綱渡り師の心地を、薫は感じている。

でも、それは今の自分に欠かすことのできない、宝物であることに気がついていた。

「俺も偉そうに言えないけど、堂野の中にある大事な気持ちは、きっと大事になればなるほど、言い辛いものなんだよ。だから、苦しくなる。上手く伝えられるか不安で、困る。でもさ、俺はそれで良いと思う」

「それで、いいのか？」

「ああ、きつとその気持ちに慣れてしまっよりも、うだうだしたり、怖くなったり、迷ってる自分を感じてる方が、その分、相手のことを強く思える気がするんだ。おそろくそれって、嘘偽りのない、裸のまんまの自分だから、大丈夫。それで一番上手くいくと思う」

「薫……分かったよ」

堂野は満足そうに頷く。

「そうか、そういうもの、なんだよな」

「だと、思うよ」

すると、彼は気合を入れるように、一度だけ両手をぱちんと合わせてこう言った。

「よし、薫は須藤さん。俺は有川だ。それぞれの方法でぶつかるとぞ。充分、ベストを尽くそう！」

「ああ！」

薫はにやにやしながら、立ち上がり、同じくにやにやした彼の拳と拳をつき合わせる。

背後の扉がノックされ、静かに開いた。

第十話 交錯の思いにアンダーライン 4

吹奏楽部部长、芦沢千葉は、薫たちとの入念な打ち合わせの後、会場となる体育館の部隊の横、吹奏楽部の演奏位置にいた。

赤い絨毯が敷かれたその一区画には、部員それぞれが演奏する楽器が並べられており、その手前に彼女の立つ指揮者台がある。

劇の最終調整のため暗くなった体育館内で、彼女は譜面台を覗き込んでいるところだった。

「これくらいの明かりがあれば、本番中、演奏に差し支えないわね」
そう言って、次に部員たちの顔を見回している。

「皆、オーケー？」

彼らは千葉の周りに弧を描くように座っており、すぐに彼らは口々に了解の言葉を返した。

それを聞いた彼女は、今背後を振り返り、体育館の二階部分である細い通路からの照明に小さく頷いた。明度、良好のサインである。光の向こうに見えた照明系の少女は不安げに見ていたが、千葉の顔を見て、すぐにほこんだ。

おそらく、上手くいっているか心配だったのだろう。千葉は自分が周囲でどんな風に恐れられているのか、知らないわけではない。見たところ、千葉の後輩らしき彼女の様子は、演劇部とは言え、その噂話を聞いていたに違いなかった。丁寧に会釈をし、通路を走っていく。

しばらくして、会場に再び明かりが灯り、観客の騒音が戻ってきた。上演時間まではもうまもなく、と言ったところだろうか。

しかしそれにしても、本番中に生の演奏をさせるとは、有川も中々面白いことをするものだ。

千葉は改めてそう思いながら、どっさりと台の横の椅子に腰掛けた。

おそらく、臨場感溢れる演奏によって、場の雰囲気をもさらに盛り上げようという、列記とした目論見があるのだろう。それにもちろん、従来のCDによる演奏でも十分に演出効果は期待できるのだが、現在進行形で行われている劇に対し、的確で即座に対応が出来る生の演奏はそれ以上に劇の完成度を上げることが出来る。彼女はそれを見込んでいたのだ。

しかし。

そのせいで、吹奏楽部が大きな迷惑を被ったことを、千葉は忘れていなかった。

不服ながら、この仕事を引き受けてしまったことが、今は甘すぎる判断だったと後悔している。

まさか、合同練習中も、あの有川からいろいろと事細かに指示をだされるとは思っても見なかった。胸中でため息をつく。

演奏にかけては、こちらの方が何枚も上手なはずなのに、彼女はそれでも信頼が置けなかったらしい。指揮者の千葉を差し置き、音が雑だの、テンポが遅いだの、逐一指摘していったのだ。

そのせいで、何度もやり直しをさせられるし、おまけに、途中から演奏曲を二つも増やされるといふ有様だった。こんなもの無理だとなつき返そうとすると、『吹奏楽部もこの程度か』とやんわりと示し、ほくそ笑んでくるし（それで意地になった千葉も悪いが）。

それに、千葉は吹奏楽部の体裁のことも気に掛かっていた。

演劇部と並び、二大文化部と称され、勢力も部員数も拮抗している吹奏楽部が、今回のことでまるで無抵抗に頭を垂れ、演劇部の軍

門に降ったのではないか、と周りから見られている可能性がある。あまり話が広まれば大きなイメージダウンとなり、後に新入部生の減少にも繋がりがねない出来事なのだ。

近いうちに何かしら対策を立てなければならぬかもしれない。

「つたく、虚仮にしてくれるじゃないの」

しかし、そこで千葉はくすりと笑みをこぼす。

まあ、辛酸をなめるのはここまで。今に見てなさいよ、目に物を見せてやるんだから。

先ほど堂野たちと計画した有川への反撃は、ぬかりなく打ち合わせを済ませ、今はもう、準備万端と座っているのだ。

私がやられっぱなしだと思ったら、大間違いよ。

そうほくそ笑んでいると、舞台裏から見覚えのある人間が顔を出した。駆け足でこちらに向かってくる。

「どうだった？」

と聞くと、その少年、馬場浩太は頭をさげながら、周りに聞かれないように声を潜める。

「皆、協力してくれるそうです。面白そうだからって。それに責任は全部堂野先輩が取ってくれると聞いて、俄然、やる気を出したみたいですよ」

「そう、それはよかった。部長や奥山さんには伝わってないでしょうね？」

先ほど、会場に戻ってきていた有川の姿を思い出しながら念を押すと、彼はすぐに首を振り、激しく反応する。

「ま、まさか、そんなはずないじゃないですか」

「そう、ならいいんだけど」

「はい」

そこで千葉があることを思い出す。

「あ、それから、須藤さんにもしゃべってないでしょうね？」

これは今回の計画で、主役の彼女を驚かせるためと堂野が提案したことで、そのために実は最後のシーンで小野村薫が劇中に登場することになっているのである。

しかし、彼は単に彼女を驚かせるためだけと言っていたが、その役目を小野村にやらせるということは、間違いなく彼への別の意図があつてのことに違いないと千葉は思っていた。

すると、馬場は不安そうに目を伏せる。

「それが、さつきからいないみたいなんですよ」

「はあ、いない？」

「はい……」

「主役でしょうが……」

思わず素っ頓狂な声を出してしまう。すると彼は、俺に言われても、と微かにぼやいた後で、

「どこにいったのかは分かりませんが、でも、おかげで伝達はずくに終わりました」

と報告した。

「……」

千葉は落ち着きなく、目を観客の向こうに動かす。
何か、あったのかしら。

千葉の中で数週間前の記憶が蘇る。

「あの、芦沢先輩？」

「……分かったわ。とりあえず、彼女のことは置いておいて、後は実行だけよ。あなたは自分の役を全うしなさい」

「はい！」

馬場はびしりと敬礼をし、戻っていったのだが、それから千葉はしばらくの間、なんとなく釈然としない気持ちのままだった。

腕組みをして落ち着きなくずっと客席を眺めたり、部員たちに何度も点検をさせ、席に座っていた。

時折、これから演奏すべき曲を鼻歌で口ずさみながら、話し声で雑然とした会場の天井に見つめ、そして、数日前、彼女が真剣な表情で自分に頭を下げてきたときのことを思い出していた。

あの子、とても必死だったわね。

そんな回想をしていたときだった。

「あのう、芦沢さん？」

聞き覚えのある声に、千葉は顔を上げる。背後に、今回の演劇で
主役を演じるはずの少女が立っていた。

「須藤さんじゃない。あなたどこに行ってたの!？」

「えっと、ちょっと外に……へへ」

彼女は罰が悪そうに舌を出し、誰かの物なのか、肩に羽織っているコートを寄せた。その下は綾坂中の制服である。それを見て、ぎよっとした。

「ちよつとつて、服、着替えてもないじゃないの！ 本番まで時間がどれくらいだと思ってるわけ？」

「ああ、人を待ってて、それで遅れちゃって……その人、結局来なかったんだけど」

寂しげな表情を見せた彼女に、何か直感のようなものが千葉の脳裏をよぎった。

「もしかして、それは小野村君のことだったり？」

「え、どうしてそれを？」

「どうやら、凶星だ。」

「まさか、本当に当たってるとは……」

この二人、やっぱり両思いなわけ？

「……？」

千葉は不思議そうにしている彼女に首をぶんぶん振って「まかす。」

「そ、そんなことよりも、早く行きなさいよ。私と話をしてる時間なんてないでしょう？」

「そ、そうなんだけど」

すると、彼女の視線が床に向き、どこかもじもじとした様子になる。千葉は顎に手を当て怪しんだ。以前から大人しそうな子だとは思っていたが、これは何か言いたいことでもあるのだろうか。

「どづしたのよ?」

訊ねると、やはりおどおどと答える。

「……私、芦沢さんにどうしても話したいことがあって
「何? 聞いてあげるから、ほら、早く言いなさい」

つい、ぶっきらぼうになりながらも、千葉は続きを促す。

「実は、この前のことの、答えが一つ出たの」

「この前の、こと?」

「私が、久美ちゃんにきちんと考えを伝えるっていう話」

「ああ」

千葉はすぐに合点がいく。ついでしたが、考えていたことだったからだ。

「答えが出たって?」

「うん」

彼女が胸に手を当てる。

「私はね、私なりの方法で、久美ちゃんに思いを伝えることにした
「よ」

「……あなたなりの、方法で?」

てつきり、有川と腹を割って話す踏ん切りがついたのかと思っていたが、それはどうやら勘違いだったようだ。

「そう。私は、やっぱり臆病だから、久美ちゃんと腰を据えて話し合うのはちよっとまだ無理」

「……」

「でもね、それとは違う方法でも、久美ちゃんに伝えられるって知ったんだ。だからね、それを試してみようと思って」

「ふうん、なるほど」

「どう、かな？」

「それが、あなたの出した答えってことよね」

別の方法で、か。

千葉は安心する。

それがどんなものであるのか、聞く必要はないだろう。彼女が一つ、自身の結論を導き出したこと、それが聞けただけでも充分な気がしていたのだ。

「いいんじゃないかしら」

「え？」

「あなたが、『選んだ』んでしょ？　なら、私はそれでいいと思う」

この返答にどれほどの意味があるとも、千葉は思っていない。なぜなら、そもそもこれは彼女と有川の問題であって、二人の関係をどうするのかは、彼女が決めることなのだ。

はつきり言って、千葉が口を出すことではない。

それに、これからその有川にイタズラを仕掛けようとしている立場であるため、言葉の端に後ろめたさも滲んでいないわけでもない。それでも、彼女は丁寧にお辞儀してくれる。

「ありがとう」

「い、いいのよ」

「……ねえ、千葉ちゃん」

「え、千葉ちゃん？」

突然呼び名が変わったことに驚く。

「それって、私のこと？」

「うん、そうだけど」

千葉が驚いたのも無理はない。

いままで、名前で自分を読んでくれる友人など、家族以外、周りには誰一人いなかったのだ。そのため、まるで彼女がぐつと目の前に寄ってきたようで、胸がどきりとした。

「あれ、いけなかった？」

「え、いや、別に、いいわよ。あなたの好きに呼べば？」

動揺が態度に現れていたのか、彼女が微笑む。

「ふふ、ありがとう」

それが妙に気恥ずかしくなり、手持ち無沙汰に千葉は時計を見て、舞台裏の入り口を指差した。

「ほ、ほら、早くいかないと、劇に遅れるわよ！」

「あ、そうだね。うん」

ようやく行ってくれるのか。

ほつと胸を撫で下ろす。

「じゃあ、主役、頑張りなさいよ」

「千葉ちゃんも、頑張ってね。それじゃ」

そう言っつて、彼女は手を振り、駆け出す。と、あることを思い出
し、千葉は呼び止めた。

「須藤さん！」

大事なことを言い忘れていた。

「え？」

「小野村君、劇を見に来るわよ！」

「本当？」

すると、ふつと彼女の顔が安堵に緩んだ。それはまるで、真冬に
咲いた向日葵のようで、彼女の周囲に穏やかな陽光が差し込んだか
のようだった。

千葉は笑顔で頷く。

堂野との約束では、彼が来ることは彼女に知らせてはならないの
だが、これくらいならいいだろう。

「ええ、だから、思う存分演技に集中しなさい」

「は、はい！」

緊張と喜びの入り混じった顔で頭を下げ、彼女は舞台裏に駆けて
行くのを千葉は見送った。

これで、万事オーケーね。

上演開始のベルが鳴ったのは、それからすぐのことだった。

第十一話 ラストシーンにアンダーライン 1 (前書き)

すいません、更新が遅れていました。
これからは、完結まで出来るだけ短い期間で更新していきたいと思
います。

第十一話 ラストシーンにアンダーライン 1

自分が主役だったことを思い出したのは、舞台の裏に衣装を着て立っていたときだった。

こんな初歩的で、且つ、最重要の事項を忘れていたのか、と君恵は我ながら恥ずかしくなった。

もちろん、それは数十分間の一時的な忘却に過ぎなかったが、その間、君恵の脳内を満たしていたのは、自らの友人のことだった。

有川久実。

彼女を自分はどうしたいのか。

それを、会場の外、凍てつく石段の上で薫を待ちながら考えていた。彼女が会場に入っていくのをひっそりと見ながら、考えていた。彼女に伝えるべき気持ちは何なのか、を。これから選び取るべき友人との関係、を。

ベルが鳴り、場内にアナウンスが入る。

君恵は足踏みをして、いやがうえにも駆け上がる緊張感を抑えた。

さあ、これからが、自分の腕の見せ所だ。これまでの練習の成果を見せるべき、本番の場だ。そして、自らの思いを伝えるべき……。

君恵は目を閉じる。

久美に、それを見せよう。

幕は音もなく滑るようにながら上り、舞台に向かって突き抜けるライトの明かりが、夜空を穿つ、綺羅星がごとくきらめいている。誰かに後ろから押され、君恵は駆け出した。

会場の誰もが、息を呑む音が聞こえた。

さあ、第一声だ。

自分は両親が死に、悲しみに暮れた少女だ。

両手で顔を覆い、崩れるように、舞台の床に倒れ伏す。

「嗚呼……お父様、お母様」

君恵の中で、純真な優しき心を持つ幼き少女は、心を引きちぎられるような悲鳴を上げていた。彼女と一体化し、君恵は現実の世界でそれを表現する。

間を置いて、悲劇的な曲が舞台の横から聞こえてくる。

劈く悲鳴のようなバイオリンの音色。

それに合わせて身をよじった。

その友人はここに来ているのではないかね？

あの老人に言われたことが蘇った。

そう、彼女なら、自分に一番近い場所で、自分の演技を見てくれている。なぜなら、彼女は、この劇を作り上げた張本人なのだから。演劇部の部長なのだから。

あの如才無い久美ならば、主演である君恵の僅かな表情の違い、声の響き、髪の毛のなびき方さえ、微細に見ているのではないだろう、と君恵は思う。彼女はそういう人間だ。

だから。

だから、久美ちゃん、きちんと見ていて。私のこと。

切なる願いを込めて、君恵は演技の中に身を投じていった。

有川久美は舞台を見ながら、すぐに、いつものようでない違和感を感じ取っていた。

特に誰かが演技を誤っているわけではない。場面の切り替えもスムーズで、吹奏楽部の演奏も申し分なく、劇の雰囲気は底辺か

ら支えていた。

なのに、何なの。

この筆舌に尽くしがたい、焦燥感のようなものの正体は。

音響室で、奥山紗江と二人しかいない部屋の中で、久美は椅子に座ったまま、顎に手を当てる。背もたれがぎしりとゆがみ、組み替えた足が床に当たって、音を立てた。

そしてもう一つ。

感じる。

劇中で時折感じる、視線。

どうやら、それは、誰か特定の人物からだけ、自分に送られているようだった。

「どうしたんです？ 部長」

久美の腑に落ちない表情に、落ち着かなさそうな奥山紗江が隣に立つ。

「先ほどから、何か唸ってますけど」

「う、ん。ちょっとね」

久美には珍しい、断言ではない、曖昧な返答に、ますます紗江は不審そうに眉をひそめる。少し考えたように首を捻った後で、

「何か、指示を出してきましょうか？」

そう提案してきた。

「ちょっと待ちなさい。別にいいの」

「いいんですか？　今回は特別な意味のある劇なんですよ。気に入らない部分があるなら、即急に手を打った方がいいと思いますけど」
「いえ、本当にいいの。もう少し見させて！」

久美の大声に驚いたのか、彼女は黙って椅子に座った。

「は、はい」

しかし、彼女が指示を出す提案をしてきたのには頷ける。

今回の劇の出来、観客の反応次第では、この学校の校長から、もっと大きなホールでの、演劇の発表を約束されるのだ。

それを唯一知る紗江は、久美と同じく、今回の劇をなんとかして成功させたいと思っているのだろう。だから当然、部長である久美が上演中の劇になんらかの不審感を抱いている様子が、看過できず、気が気ではない違いはない。

しかし、久美が感じているのは、劇の完成度如何の話ではなく、それとはまた別次元の事なのだ。

例えるならば、操り人形。

糸を人形の手足に繋いで、歩かせたり、躍らせたりする、アレだ。そう、今回の劇はまるで、自分が操っていたはずの人形が、実は電池が内蔵されており、久美の意思ではなく、人形自身が久美の指示に合わせて自分の意思で動いているような、そんな錯覚にも似た感覚なのである。

繋がっているはずの糸に、実は伝達の役目は備わっておらず、単なるお飾りに成り下がっている。

だが、今回は特にその人形が、有川にとって不都合な動きをして

いるのではない。全く自分が思い描いたとおりである、そこに奇妙な感覚の齟齬そごがあった。

劇は中盤に差し掛かり、主人公の少女が、音楽家の家でピアノに合わせて歌い始めるシーンだ。

歌姫の誕生の場面である。

君恵の伸びやかな歌声が会場に響き渡る。湖畔を撫でる風のような爽やかさと、穏やかな波を思わす優しさが溶け込んだような、歌声。

「夜道を照らす月の光、妖精たちと水辺のダンス」

ふいに、目が合った。

「ランプを持っていこう。はぐれずにいよう」

ほかならぬ、歌姫。

須藤君恵だ。

「ねえ、夜が明けるまで、まだもう少し」

彼女が、ふわり、微笑んだ。

その瞬間。

何かが、頭の中を駆け巡った気がした。

「あ、あ、あ……」

知らず、出所不明の感情と共に、声が漏れる。背後でガタリと席を立つ音が聞こえ、紗江がまたしても不審げに久美を呼んだ。

「有川、部長？」

「あ、私……」

口を覆おうとした手が震えている。

「どうしたんですか？」

「……いや、何でもないの」

振り返って、首を振るが、紗江は半信半疑のようだ。さすがに、いつもの自分と行動が違いすぎること気がついたのだろう。

なにしろ、自分の中で盛りかえるような動揺を隠せていないと思っただ。軽く笑って見せるが、それが果たして笑顔なのか、驚愕の顔なのか、困惑顔なのか、悲しい顔なのか、それすら分からない。筋肉が痙攣しているようで、自然な状態を保てないのだ。

「もしかすると、気分が悪いんですか？」

「そうじゃないの。平気よ。大丈夫だから、ここで見させて」

見させて、なんて。

口を衝いて出た言葉が、さらに久美を揺さぶった。自分がここにいなければならぬのは『当たり前』なことではないか。

それでも、久美には不思議なもので、なぜだが、この劇を最後まで観覧しなければならぬ、という使命感に取りつかれていたのだ。まるで、自身が一人の観客にでもなったような気分である。

もはや、この舞台の頂点から俯瞰ふかんしているのは、自分ではない。そんな気もしていた。

「これは、どういふことよ」
「有川部長……」

紗江はいまだ不審げだったが、久美にかける言葉も見つからないのか、それきり黙ってしまった。久美も彼女に意識を向けなかった。劇を見ていたい。このまま、最後まで。

そしてついに、聖夜の歌姫はクライマックスだ。

観客達が水を打ったように静まり返り、事の成り行きに目が奪われているのが分かる。久美も同じだった。歌姫である君恵が、王国の城に呼ばれ、王座の前へ連れられてくるところだ。久美はナレーシヨンを読む。

物語では、ここで彼女が歌を披露し、それに魅了された王子が彼女を自身の妃として迎え入れ、ハッピーエンドとなる。

吹奏楽部の演奏に一層熱が入り、君恵の歌声が軽やかに無理なく耳に届く。このとき久美には、君恵の後ろにいる、真の歌姫が見えている気さえした。いつでも淑やかで優しく、卑しさの欠片もない純真無垢な少女の姿だ。

そんな一種の幻覚さえ見せる君恵の演技はすばらしく、おそらくこれまでで一番の出来ではないだろうか。久美は思う。

これは、間違いなく大成功の劇になる。
そう、確信していた。

ところが、そこで予想外の事態が発生した。
音響室の扉が、なぜか、ゆっくりと開いた音がしたのだ。
ぎょっとした。

立ち入り禁止のはずの、上演中、その扉が開くことなど、まずありえない。

「誰!？」

首を回して、目を疑った。

長身の少年がのっそりと、どっしと立っている。

「堂野、君？」

彼は無表情に部屋に踏み入ると、止める間もなく真っ先に久美の隣をすり抜け、小型マイクのスイッチを入れた。

「あなた、何を！」

「し、静かに。上演中だ」

「そんなこと分かって……」

彼が伸ばした手で、口を塞がれる。

そして、もう片方の手を丸め、舞台に向かって親指を立てた。

その途端、だった。

どこからか、『自分の声』が聞こえてきた。

「少女の運命は王子と結ばれ、華やかなものになるはずだった。しかし、そこには王国リノンドンのある思惑があった……」

「……!」

これは、まさか。

「よし、始まったな」

そう言って、堂野は満足げに笑った。

第十一話 ラストシーンにアンダーライン 2

しんとした場内に響く、滑らかなナレーション。息継ぎをしながら続く。

「王国リンドンの黒き思惑、それは、この少女リースを利用して王国の隣国であるヒュンデハルグから、身代金と、自国にとって有利な条約を結ぶことにあつた。それは小国であるリンドンを、他国と同等の力を持つ国にするための、またとないチャンスなのである」

「しかし、たかだか奴隷の身分である彼女が、どうやってそんなことを可能にするのか。常識で考えれば、あまりにも荒唐無稽で、突飛過ぎる話である。しかし、そこには当然、ある秘密がある。それは彼女の体に流れている、ある王家の血筋だ」

「このある王家とは、隣国の王族、ヒュンデハルグ家の血だつた。リースの瞳の色は王国では珍しい、湖の底のような薄い緑がかつた青。これこそが、その王家の血筋であることの、紛れもない証拠なのである」

聞き覚えのない、久美の声。さらに一度息継ぎをして、尚も続く。

「そして、そのヒュンデハルグでは現在、王の子孫が不運なことに病気や事故で次々と亡くなっており、王の座を受け継げる者が不在の状態が続いている。これは国家を揺るがす、非常事態であり、王国ではどうにか王家の血を継ぐ者はいないかと血眼になって探している状況なのだ。つまり、リンドンにはヒュンデハルグの眼前にリースという餌を吊り下げ、その弱みにつけ込もうと計画しているの

だった」

説明が終わり、無言の空白が訪れる。

その間、君恵は硬直した表情のまま、立ち尽くしていた。

全く記憶に無いナレーションだったのだ。

脳内の台本のページを、虚無の心地で幾度もめくるが、ここに来てまた新たな話が語られるなどという状況は、もはや熟考するまでもなく、ありえない。

部長である久美が本番中に筋書きを書き換えることなど無理があるし、たとえそうだったとしても、主役である君恵に話を通っていないのは、おかしい。

じゃあ、これは？

この状況は、何なの？

急速に処理速度を落とした脳内で、必死に状況の理解に徹する君恵だったが、ありうる可能性は一つとして思い浮かばない。

そして、さらに君恵を混乱させたのが、周囲の演劇部員たちの対応だった。

何と、この予想外の事態に対して、誰一人取り乱している様子が全くないのである。まるで初めからこうなることを知っていたかのような落ち着きぶりなのだ。

だとすれば、主役の君恵が妙な動きをするわけにはいかない。そう考え、パニックになる気持ちを必死で抑える。

すると、王子に扮した少年がそっと近寄り、君恵に耳打ちをしてきた。

「大丈夫だ」

「へ？」

やはり異変に気がついてるだろうか？

「いいから、続けるよ」

「え、でも」

混乱している君恵を置いて、劇は進む。王子役の少年は片手を空に向けて大きく突き出し、恍惚として、甘いため息をついた。そのまま、まるで夢見るような瞳で、君恵に微笑む。

「見目麗しき歌姫よ。そなたの歌声はすばらしい。我が妃として王室に招き入れたいと思うが、どうだ？」

すつと、手を差し伸べてくる。

君恵は、じつと王子役の少年を見つめた。

物語ではここで、「喜んで」と君恵が王子の手を取ることになっているのだが、果たして、その通りであっていいのだろうか。

先ほどのナレーションがあった後で、すんなりとハッピーエンドになるとは思えない。

おもむろに、腕を持ち上げようとしたとき。

そこで、またしても異変が起きた。

どこからか、物が壊れるような、破壊音が響く。
効果音、だわ。

すると、弾かれたように王子が家来達に振り向く。

「何だ！」

「た、ただいま、様子を見てまいります」

おどおどと顔を見合わせた家来たちは数名で舞台の袖に消える。すると、程なく、激しい騒音がした。

どうやら複数の人間が戦い、斬りあいの乱闘をしているようだ。いったい何が起きているのだろう。こんなもの、いくら考えてもストーリーのどこにもない。

不安げに王子役の少年を見ると、彼も、

「どうやら、この神聖なる王城を汚す、不届きな輩が入ってきたようだ。私も向かおう」

と、眼光鋭く、腰元の剣を抜き、駆け出していつてしまった。

舞台には、数名の貴族たち、若い音楽家、君恵だけが取り残される。

しばらくして、斬りあいの音が、止んだ。

場に静寂が満ちる。

君恵にはこの後の台詞など、分からない。どうすれば……。

と、そこへ。

舞台のそでから、一つの小柄な影が躍り出た。いや、影ではない。その者は身を覆い隠すほどの黒衣を纏っているのだ。君恵ははっと身構える。

すると、その正体不明の何者かは、鋭い短刀らしきものを振り回しながら、くるくると身軽に回転しながら、君恵のそばによつてきた。

「あ！」

声を上げるが、君恵には逃げる暇もない。

背後の人々は悲鳴を上げながら右往左往しており、助けに来る人間も、当然いない。

これから、どうなる？

と思った矢先。

顔まで布で覆い隠したその人物はそつと口元の覆いを外し、こう言った。

「お嬢様、お迎えに上がりました」

君恵の中の記憶で、ピンと弾かれたような気配があった。

その台詞に、聞き覚えがあったのだ。

間違いない。最近有名なドラマ「都那賀一郎の事件簿」主人公の決め台詞である。

その思わぬ言葉に、君恵は放心し、さらに混乱してしまう。

しかし、その人物は言葉を続けた。

「私は、隣国ヒュンデハルグからのスパイです。あなたをこの王国の魔の手から救い出すため、参上しました」

台詞を言い終えた彼が、すつと顔を上げる。

きらりと光るライトが、その表情を照らし、舞台上、彼の正体を晒した。

そこにはなんと、君恵が良く知る、少年の顔があった。

「え、まさか」

息が、止まった。同時に、鼓動が早まる。彼が、ゆっくりと言葉を紡ぐ。

「ようやく見つけました。その瞳の色、我がヒュンデハルグ国、王家の血筋であることは間違いありません」

「え、え？ どうして……」

「さあ、お嬢様。詳しい説明は後です」

王子の代わりに彼が、手を、差し出してくる。

「時間がありません。私を信じて！」

手を取るべきか、取らざるべきか。

君恵にあるのはその選択肢のみだった。

第十一話 ラストシーンにアンダーライン 3

「小野村君、小野村君ね！ 彼に私の声を真似させたんでしょ！
そこをどきなさい！」

久美は怒りに震えながら、目の前の少年に迫った。体が激昂し、熱くなるのが分かる。

しかし、先ほどから数メートルの間隔で対峙している堂野は至って冷静だった。

操作盤を背後に、自身の大きな身体を利用して、マイクの電源をどうにか落とそうとする久美の侵入を落ち着き払って、邪魔していた。

残念ながら、その強固な守りは久美には突き崩せそうにない。

事実、狭い室内の中、久美はそれまで何度も彼の背後へと回り込もうと試みたのだが、その度に、彼の長い手に押し返されてしまうのだ。まったくもって卑怯だった。

久美は心中で悪態をつく。

自分の体で楯を作るなんて、反則よ。

しかし、それで諦める久美ではない。

頭の中では次なる作戦が浮かんでいる。

「なめないで！」

そう叫び、堂野が出していた前足を強く踏みつけると、彼がひるんだ隙について、再度突破を試みた。

彼がたじろぎ、僅かに空いたスペースに身体を滑り込ませる。こ

うなれば操作盤までは目と鼻の先だ。

憎き小型マイクの電源スイッチに手を伸ばし　と、手が宙を搔く。

振り返ると、後ろ向きの堂野に肩を掴まれていた。あつという間にその場から押し出されてしまう。

ダメ、だったか。

すると、堂野が懇願するように言った。

「有川、頼む。静かにしてくれ」

「ふざけないでよ、堂野君。邪魔なんてさせない。今回の劇が私にとつてどれだけ大切なものか、あなたは知らないのよ!」

「違う」

彼は首を振る。

「何が、何が、違うって言うのよ!」

助けを呼ぼうと背後を振り返るが、背後では、じたばたともがく紗江を後ろから馬場が羽交い絞めに使っていた。

「馬場君、放して!」

「申し訳ないけど、いくら女性からの頼みでもそれは出来ない」

「どうして! 裏切り者!」

なるほど、こいつも最初からグルか。

久美の眉間に皺が寄る。

男子二人と女子二人、認めたくはないが、そこには圧倒的に埋めがたい力の差がある。

しかし、当然、それで簡単に降参する気はなどない。久美は演劇部部長なのだ。

確かに力では負けるものの、喚き、叫ぶことで、彼らの計画を妨害することは出来る。

せめて、あらん限りの暴言をたたきつけてやる。

「何とか言いなさいよ!!」

久美は堂野を睨みつけて大声で罵った。

「有川、違う。俺は邪魔をしにきたわけじゃないんだ」

すると、彼は眉をひそめて俯く。

「うそ!」

「本当だ。有川が作った劇を台無ししたいわけじゃない」

「なら、何よこれ!!」

「これは、だな」

「ストーリーがまるで違うじゃない!!」

久美は感情を撒き散らすように、彼の言葉を遮って怒鳴った。

「歌姫はこれで王子と結ばれてハッピーエンドなの! 全部私が話を作った! ここから逆転の展開なんて、ありえないのよ! 王子は悪役じゃない! 上手くいくように計算してた! 全部完璧だった!」

いっそこと、彼の顔を殴ってやろうかと思った。

しかし、

「知ってる」

間髪入れず、彼は答える。

「知ってる？」

「ああ、知ってる」

その言葉に、久美は再び愕然とする。

そうか、と思う。

そうか、『知っている上で』、彼はこんなことをしているのか。

『知っている上で』、自分を邪魔をしているのか。

久美の中で数週間前、放課後の教室で彼と話した記憶が蘇っていた。

内容は、演劇部に入らないか、副部長にならないか、に始まりつて、演劇、芸術のことから、日々の何気ない生活ことまで、会話が広がっていったことが思い出される。

最初は面倒くさそうに相槌を打つだけに徹して彼だったが、次第に、久美の話に耳を傾けてくれ始め、少しずつ、返事を増やしてくれた。

親密に、仲良くなれていると思っていた、彼、堂野亮介。

そんな彼への信頼が、ガラガラと音を立て、崩壊していく。

「なら、どうして！ あなたが、私のことを分かってくれてるなら

……」

私は、こんな劇を作りたい。

久美の理想を笑って聞いてくれていたのに。

「あなたなら、分かってくれていると思っていたのに」

そんな堂野が、自分の劇をぶち壊しにすることが、屈辱だった。そして、何よりの侮辱だった。

「私の話を聞いてくれた、あなたなら！」

公園の時のような我慢はもう出来なかった。

「どうして？ そんなに私のやり方が気に入らないの！ ねえ、どうして！」

無意識に、久美は彼の服を掴み、揺さぶっている。

「答えてよ、ねえ！」

自分の叫びが、部屋にこだまする。

それが、鳴り終わったとき、ようやく彼が口を開いた。

「もちろん、あんたが一生懸命やってるのは知ってるし、あんたの気持ちも知ってる」

有川が、「あんた」に変わっていた。

「え？」

「でもな、俺はそれを踏まえた上で」

「……」

「あんたに、言いたいことがあるんだ」

思いつめたような、彼の張り詰めた表情。

すると、何の前触れもなく、まるで始めからそうしようと考えていたかのように、久美を、そっと、抱きしめた。

久美は、抱きしめ、られた。

「あつ」

途端に、くたん、と力が抜ける。

抵抗する力が、奪われてしまった。いや、正確には抵抗しようとする意思が、非常に希薄となってしまったのだった。振り上げた手が力なく彼の胸に置かれる。

素直に、温かい、と思った。

堂野君って、

あつたかいんだ。

このまま身を委ねたいとすら、思ってしまうそうになる。ゆっくりと、彼が耳元で優しく囁く。

「一人で、何もかも支配して、自分が理想とするものを一途に信じて、良かれと思ってやったことが、過ちを招くことがある」「さ、さっきの、説教の続きをしようって言うの？」

彼が近すぎて、言葉が上手く紡げない。

「聖夜の歌姫」

彼は劇のタイトルを唱えるがごとく言った。

「それが、何？」

「彼女は、皆を幸せにしたかった」

「だから？」

「そのために歌を歌った。道行く人に、酒場に集う人々に、村人に、商人、奴隷、子供、大人、老人、女性、男性、国王に会って、王国全体に歌を届けようとした。良かれと思ってだ」

彼はそこで間を置く。

「だが、さつきも言ったように、それが過ちを呼ぶことがある。見てください。これは俺が書いた話だが、彼女が歌を歌い、有名になったことで、王国に上手く利用されてしまうという、悲劇にもなりかねない」

「なにそれ、全部架空の話じゃない」

吐き捨てながらも、久美は真横にある堂野の顔を直視できなかつた。それはきつと、心の中で、彼の言葉に、負けていたからだだった。彼はそれを知っていたのだろう。構わず言葉を続ける。

「それでもだ。同じことは現実にも起こりうる。有川、今のあんただ」

彼はぐつと久美を抱く手を強める。

「今のあんたはあの歌姫と同じだ。最善を尽くしたつもりが、自ら

道を踏み外した。このまま前に進んでも、周りについてこないぞ」

「……だったら」

「うん？」

「だったら、どうすればいいの？」

問いかげながら、その問いの意図を、久美は理解出来ていなかった。それは、突然久美の舞台を邪魔した彼への「答えてみる」という、投げやりな挑戦だったのか、自らの過ちを認めた素直な心の声だったのか、判然としない。

でも、妙に、自分らしくない、自信が皆無で、覚束ない声だった。

すると、彼は何も言わずに、抱きしめていた手を離すと後ろを向いて、指をさした。

指し示す先は舞台だ。

中央に、見覚えのある少年と君恵が立っている。彼が、君恵に向かって、手を差し出していた。

「あの手に、掴まればいい」

「穏やかに、彼は告げた。」

「え？」

「簡単なことさ。助けは、いつだってある！」

凜と響いた、彼の答え。

それこそが、彼が言いたかった言葉。
伝えたかった言葉。

助けは、いつでも、ある。

久美の中にぱっと光が差し込むようだった。

「助け……か」

小さく、確かめるように、呟いた。

自らの内に差し込んだ光が風を呼び、砂埃でもやもやと煙るだけだった視界に、そつと新たな道を示してくれた気がした。立ち止まっていた自分が、その方向に向きを変える。光を見つめている。

そんな不思議な、イメージ。

久美は少なからず、幸福な気持ちを感じていた。
と、

「掴め、掴め」

ふいに、隣の少年がそう呟いていることに気がついた。
久美は彼の横顔を見つめる。

「掴め、掴め、掴め、掴め……」

何度もそう唱える彼の必死の形相は、先ほどまでの冷静さはすっかり消え去り、勝利を信じ祈る、一途な信者のようだった。
久美は、彼と同じように前を見た。

「君恵」

彼女の表情は、久美からは見えない。

「……」

しかし、それでも、彼女が今、意志を決めたのが分かった。

「あなたは、選ぶのね」

少女の手がふわりと差し出される。
そつと、今、薫の手を掴んだ。

「よし！」

瞬間に、隣の堂野が叫んだ。

「走れ！」

「え？」

「走れ！ 薫！」

第十一話 ラストシーンにアンダーライン 4

手が触れていた。

薫は意識する。

間違いなく、それは、君恵の掌だった。

薫は、それを、それと認識して、それをぐっと握った。それを、確かに掴んだのだ。

顔を上げると、そこには未だ君恵の戸惑いと驚きの混ざった顔がある。こみ上げる喜びの感情を堪えながら、薫は、力強く頷いた。

「お嬢様、行きますよ」

「私の、国に戻るのですか？」

薫には台詞があったのだが、この君恵の台詞はもちろん彼女のアドリブだった。

さすがは演劇部といったところだろう。

役を演じるとは、ただ覚えただけの台詞をその通りに喋ればいいだけなのではなく、どんな状況にも臨機応変に対応できる柔軟性を備えていなくてはならない。

「そうです」

その咄嗟の機転に合わせるように、自信を持って薫も頷く。

「さあ、逃げますよ」

君恵の手を引く。一步前に進んだ。

それは舞台の袖に向かってではなく、舞台の手前、客席側である。

それがどういうことなのか、すぐに君恵には理解できたようだ。隣で小さく頷く。

会場からはその様子を見て、小さくどよめき上がる。

薫は小さな騒ぎに臆することなく、舞台の淵まで歩み寄り、彼女と共に、飛び降りた。

宙に黒衣とドレスが踊り、着地する。

ここまでは万事良好。

さあ、これからが一仕事だ。

心の中で呟いて薫は息を吸い込むと、客席に向けて、大声で叫んだ。

「どいてくれ！」

その一言に、ざわめいていた観客たちが動きを止める。

「道を作ってくれ！」

堂野から言われた通り、もう一度叫ぶ。

すると観客達はこれを舞台と席が一带となった一つの演出と思っ
たらしく、互いに顔を見合わせつつ、座席間のスペースを狭めよう
と立ち上がる。じりじりと通路の幅を広めてくれる。

一本の逃げ道が目の前に出現した。

よし。薫は拳を強く握る。

「どいて、どいて」

そう言いながら、薫は君恵の手を引いて走る。有川が集めた観客
たちの間を、波を掻き分け走る船のように、薫は突っ切った。

その間、観客たちの反応など見ていられなかったし、背後の君恵も、そのまた背後の舞台にも、注意を向けることはなかった。舞台がどうなっているのか、これから劇はどう終了するのか。薫は知らされていなかった。

しかし、後は、堂野が全てを上手く終わらせてくれる。それだけの情報を知っていて、それで充分だった。

薫がこれからすることは二つ。

会場から出る際に、舞台に向かって一礼すること。

それから、君恵を連れて、とりあえず安全な場所まで逃げることに。

ただそれだけで、これが、重要な任務だった。

勢いのついた姿勢のまま、薫は急ブレーキをかける。

目の前が体育館の入り口だった。身体を停止させ、彼女と手をつないだまま、客席に向き直る。

息を整え、頃合いを見計らって、薫は君恵に囁いた。

「礼をするよ」

「え？」

驚いている彼女に構わず、薫はお辞儀をする。すると、君恵は咄嗟に対応してくれたらしく、ドレスの端を持ち上げ優雅なお辞儀をした。

そして、一瞬の沈黙の後。

割れんばかりの喝采が、観客から送られた。あまりのことに、薫は最初、何か爆発が起こったのかと思った。

あれ、会場には爆弾が仕掛けられていたのだけ。

しかし、それが違うと気付いて、呆然とするのもつかの間、ふいに目が舞台にいった。

そこでは先ほどの王子役の少年が、家来に何かを命じている。おそらく二人を捕らえろ、とか、そういう類のものに違いない。

「おい、逃げろ！」

唐突に、誰かが叫んだ。

声の出所は定かではなかったが、観客の誰かであることは分かった。

続けて、

「早く！」

少女の声。これまた、観客席からのものだ。

「追いつかれるぞ！」

薫の知らないうちに、吹奏楽部の演奏が始まっている。クライマックスに向けて疾走感のある、合奏だ。

きつと芦沢はほくそ笑んでいるだろうな。

そんなことを思い浮かべながら、口元を引き締める。まだやることは残っているのだ。

「須藤さん、また走るよ」

薫の言葉に、君恵は目で頷いた。そこには、先ほどの戸惑いは微塵もない。

「うん。私のことを、守って」

これはアドリブなのか？

驚きつつも、

「お任せあれ！」

と、薫は答えていた。

声援を受けながら、薫は汗ばんだ手の平をまた強く握りなおす。それに応えるように、君恵も握り返してくる。

どうしようもなく、胸が高鳴った。叫びたいほどに、うれしかった。

このまま、彼女を誰も知らないところまで、連れ去ってしまおう。彼女の手を握ったままで。

老人は笑っていた。

「これは傑作だな」

いったいどのような事情があったのかは知らないが、それはなかなか奇妙で、そこそこに滑稽で、存外に意外だった。

数分前のこと。

やや、なにやらハプニングがあったようだぞ。

と老人は異変に気がついた。

劇中に、いきなりナレーションが入った時である。

他の演技者たちは泰然と劇に集中していたが、主役である須藤君恵を注視していた老人は、彼女の目が一瞬泳ぎ、顔つきが驚きを示したことを感じた。

その後も、平静を装いつつも周囲に忙しく彼女が視線を動かしていたことや、舞台上に登場した黒衣の少年の顔を見るや、さらに困

惑の色を濃くしたことを見て、確信した。

「面白いこともあるものよのう」

そして、今、その少年が、君恵の手を握ったまま場外へと消えた。

「現実が虚構を喰ったかよ」

老人は茶化すように言う。

「いや、それとも、あの少女の思いが勝り、全てをあるべき姿に戻そうとする力が働いたか」

そう思って、もう一度笑った。

「若い者はこうでなくてはな。この老いぼれに、面白いものを見せてもらった……さて、後はあの部長にやるべきことがあるか……」

最終話 聖夜の歌姫にアンダーライン 1 (前書き)

ついに、最終話です。ようやくこの作品も終わりが見えてきました。

当初は去年のクリスマスに完結させるとか公言しておきながら、もう三月ですね。春ですね。

作者の見るに耐えない有言不実行性を晒してしまい、お恥ずかしいばかりです。他の作品と一緒に書くなどという離れ業に挑戦した報いでしょうか。すいません。

今日の投稿はかなり急いで見直しをしたので、もしかすると、文がおかしいと思われる箇所が多いかもしれません。よろしければご指摘してもらえれば、嬉しいです。

最終話 聖夜の歌姫にアンダーライン 1

「事情があるんだ。とにかく、しばらく走るよ」

体育館の出口で、薫は靴を履くと、走りながら君恵に話しかけた。

「事情？」

彼女はかかとを鳴らしながら、訊いてくる。

「実は、僕達は演劇とは関係なく、本当に逃亡中なんだ」

一言で全てを納得してもらえるかとてもなく怪しかったが、とりあえず、薫は現状を簡潔に話した。

「へ？」

彼女は当然のことながら目を丸くする。

「それって、小野村君が劇に出てきたり、シナリオが変更になったりしたことと関係ありなの？」

「あるっていうか、それがほぼ原因なんだけど」

「どういこと？」

困惑気味の君恵の顔。

薫は唸る。

できることなら、薫は今ここで彼女に全てを話したかった。激情した有川が追いかけてくる危険性についても。

しかし、如何せん、現在は走行中の上、逃亡中なのである。

息継ぎに喘ぎながらのトラブルの全容説明は、困難を極めるだろう。今は保留にしたほうが良さそうだ。

「とにかく、後から説明する。今は走ってついてきて」「う、うん」

彼女が了解してくれたところで、薫たちは校門を抜ける。

街路樹が植わった歩道にはちらほら通行人の影が見えた。

薫は一瞬、自分たちの格好が異質であることに、彼らから不審な目を向けられるのではないかと身構えたが、すぐに考え直す。今はそんなことを思っている場合ではない。

彼女を安全な場所まで連れて行くことが薫の使命である。目指すべきは先ほどの公園だ。

幸い、後ろからの追っ手はいなかった。

冬の凍てついた風を突き抜けながら、目的地へひた走る。

通行人たちは皆、薫が走る方向へ向かって歩いているようで、薫たちを振り返りながら見て、首を傾げている。

大方、クリスマスだからと浮かれて、仮装している若者、という感じに見られているのかもしれない。

薫は余計な思考を意識の追いやる。

鼓動がうるさかった。

呼吸音さえ、耳障りだった。

足の裏で地面を蹴り、跳ねるように走った。ともかく、早く遠い場所まで行かなくては。

と、ふと君恵の事を考える。

彼女は衣装、つまりドレスのまままで走っているのだ。薫は幾分身軽なマントだが、彼女のフリルのようなドレスでは走りに邪魔なところの上ないだろう。

「須藤、さん、上手く走れる？」

薫は首を回して訊ねる。

「うん、大丈夫だよ。それより、あれ……」

彼女の不思議そうな声に、薫は再び前方を見て、はっとした。数時間前の公園が道の先に見えてきたのだが、さっきと明らかに様子が違うのだ。妙に、明るい。

「あ、れ、いつの間に？」

公園全体がぼんわりと柔らかい光に包まれていた。闇が囲むクリスマスイブの夜に、そっと舞い降りた聖夜の灯。

まるで妖精たちが集まり、お祭りをしているように、様々な色のイルミネーションが輝いていた。

円形の公園がなんとも言えず幻想的に浮かび上がり、中央に聳える針葉樹には飛び切りの飾りが施してある。

赤や青、黄色や緑、紫にオレンジ。

まるでその場から憂鬱や不機嫌の感情の類が全て消え去ったかのように、喜びの光が、穏やかに温かく、華やかにきらめいていた。

いつの間にか人々が集い、いまや、そのイルミネーションを眺め

るざわめきで溢れている。どうやら、通行人たちはこれを目当てに集まっていたらしい。

「は、ああ」

薫は白い息を吐く。

先ほどまではこんな装飾がされているなど、全く気がつかなかった。

予想外の事態に薫の脳内はパニックになる。

人が多すぎる。

と言うのも、実は、薫はこのとき、ある決意を持って、彼女をここまで引つ張ってきていた。

それはもちろん、彼女へ自らの想いを告白することである。

しかし。

こんな場所に彼女を連れてきて、告白できるのか？ 人影のない公園だからと思って覚悟を決めていたのに。

と、薫の中では動揺が広がっている。

逃げ出したい気持ちだが、以前までの自分を連れてくる。

文化祭の前。

コンプレックスの塊だった、薫だ。

青白い顔をした少年が、遠くから自分を見つめていた。

いや、違う！

薫は首を振る。

自分は想いを成し遂げるために来たのだ。今さら、背中を見せて自らに臆病者の烙印を押す気にはなれない。
なら。

なら、ベストを尽くせ！

公園の門まであと数メートルだった。

と、そういえば。

ふいに山下の顔と同時に、薫は数週間前の記憶が蘇る。以前山下が堂野と自分を呼び出し、散々豪語していた言葉を思い出したのである。

『告白にはシチュエーションが必要だ』

「あ………」

考えてみれば、劇場から抜け出した後、公園に向かえと言ったのは、山下からの指示だったのだ。

「あんのやろっ」

薫は舌打ちをする。

上手いこと考えやがって。

おそらく、彼は最初からここでクリスマスイルミネーションがあることを知っていたのだらう。今回の作戦はさすがに想定外だっただらうが、初めから、薫にここで君恵へ告白させるつもりだったに違いない。

本当に、憎たらしい奴である。

しかし、となれば、これは山下の考える、最高のチャンスという

ことか？

ロマンチックな雰囲気と言えば、申し分ないだろう。深刻なほどに余計なお世話感是否めないが、悪友の良き計らいは、無下には出れない。

薫は公園に人影のない入り口から入りこみ、人ごみとなっている一角を避け、中央の木の背後に周りこんだ。ここなら、誰も見ていない。

集まっている人々は、なにやら公園の奥の聖歌隊らしき一団の歌声に聞き入っている。薫たちがいる場所からは人の姿は見えない。ツリーの豪華な光だけが、薫と君恵を照らし出していた。

そこでようやく、薫は手を離れた。

「須藤さん」

向き直り、君恵を見る。

彼女は薫と同じように息を切らしており、左の手で汗を拭いた。

「な、なに？」

「突然のことで驚いていると思う」

「う、うん。劇の方は大丈夫なのかな？」

その問いに、薫は無理やり笑顔を作った。

「大丈夫、堂野が上手くしてくれることになっているから」

「ああ……なるほど」

彼女は合点がいったようだ。

「堂野君なら安心だね」

と、笑って頷く。どうやら彼女も堂野を信頼しているようだ。

しかし、今は彼女と劇の心配をするよりも、成すべきことがある。

男、小野村薫。ここまで周囲の人間にお膳立てをしてもらって、彼女との関係に何ら進展がないというのでは、全く持って立つ瀬がない。

それでは、この小野村の名が廃るといふものだ。不甲斐ないことこの上ない。

まあ、それは過言というやつかもしれないが。

とにかく、それはさておき、薫には長い間、彼女に対して持ち越してきた想いがある。抱いてきた、熱い想いがある。

今この瞬間に、誰にも邪魔が入らないこの場所で、それを打ち明ければ、いつ打ち明けると言うのだ。

恋の女神はそう何度も微笑んではくれない。山下の受け売りは何か癩だが、確かにその通りなのだ。

幸運はいつだってようやく決心がついた頃にはタイミングを逃しているものだ。

今と思う瞬間でなければ、いつ何時不粋な邪魔が入るともしれない。そういうことだって考えられうる。

文化祭の時は邪魔こそ入らなかったものの、あと一歩のところまで踏み出せず、結局機を逸してしまったのだ。

あのとときの二の舞を踏むのは御免だ。

薫は腹を括る。

よし、行くぞ。

行くぞ、行くんだ。

絶対、やるんだ。

っていうか。薫は思う。

こんな下らない御託をだらだらと脳内で並べている時間こそが、甚だ無駄だった。

さあやれ、いまやれ。

脳内の小人たちは急かしたてる。

薫は息を止めて、君恵の両目を見つめた。そのイルミネーションの明かりを灯した、綺羅らかなる瞳を。

やっぱり、彼女は綺麗だ。だから、好きなんだ。薫は再認する。

「須藤さん」

「小野村、君？」

妙に張り詰めた声に緊張したのか、彼女は怪訝そうに首を傾げる。

「伝えたいことがあるんだ」

「伝えたい、こと？」

「そう、俺は、ずっと、ずっと……言いたかった」

今自分はどんな顔をしているのだろうか。

困惑？ 焦燥？ 喜び？ 恐怖？ それとも、安堵？

薫は君恵の手を、今度は正面から握る。じわりと汗が滲む感触がする。もはや、言い訳のしようがないほどに震えている。

「私、に？」

「そう、俺は、俺は」

薫はすべてがスローモーションになったように思えた。まるで自分の唇が自身のコントロールの軸から離れてしまい、ただ慣性の法則に従い、同じ動きを繰り返す。

「俺は、俺は、須藤さんのことが、ずっと」
「……」

彼女が手を握り返してくる。

「うん。落ち着いて。聞いているから」
「僕は、須藤さん、君のことが」

次の瞬間だった。
なぜか、体が大きく傾いた。

え？ うそ？

前のめりになり、思わず、目の前の君恵にぶつかりそうになる。否。違う、ぶつかるはずの彼女はその場にいなかった。

彼女は薫の足元に屈みこんでいる。

薫の手を引つ張ったのも、彼女だった。薫は、しゃがみこんでいる彼女に接触しないように、同じように屈みこむ。

「ど、どうし
し、静かに」

彼女が口に指を当てる。そして、無言のまま、視線をツリーの向こう側、人々が集まっている辺りに向けた。薫に見てみる、ということなのだろう。

わずかばかり、腰を上げて、薫は土留めの上から覗いてみる。

「あ……」

見覚えのある人物がそこにはいた。演劇部顧問の村松である。

「でしよう?」

「ど、どうして? 確かに、今回の劇、会場にはいなかったみたいだけど」

いつもならば、演劇部の本番では客席の前の辺りに座っているはずなのだが、今日は見ていなかったのである。

それについては特に意識をしていなかったもので、考えてもいなかったが、顧問の教師にしては異例の事態だ。

「会場に行きたくなかったのかな?」

「どうして?」

「うーん」

君恵は考え込み、すぐに思いついたと指を鳴らす。

「小野村君が来るって聞いたからじゃない?」

「俺が?」

「だって、ほら、前に村松先生のこと驚かしたんでしょ？」
「あ、ああ！」

彼女の指摘で薫も忘れていたことを思い出した。かの教師とは、一月前の文化祭において、ちよつとしたいざこざがあり、それに対して堂野たちが対抗策を講じてくれたのだ。

だが、このことで、村松は薫のことを極端に恐れ始め、授業の時間でさえ、あまり近くに寄りたがらないのである。

「それがまさか、こんな時に仇になるとは」

薫はもう一度だけ顔を上げ、ツリーの向こう側で聖歌隊を眺めている、教師を視認する。やはり、いる。

「どうしよう、もしも劇の上演中にここにいることがばれたら大問題だよ」

確かに、それは彼女の言う通りだが、薫から見て村松とは案外か
なりの距離があるようだった。それに、聖歌隊の歌に集中している
らしく、ツリーの辺りには目もくれない。

「大丈夫、とりあえず、ここにいれればばれないから」

薫が彼女を安心させるために言う。

今は、彼が何もせず、立ち去ってくれるのを待つしかない。

と、

彼にうごきがあった。立ちつかれたのか、方向転換すると、なぜか、薫たちの入る方向に向きを変え、ツリーの土留めの上に腰掛け
たのである。

すぐさま、薫は腰を下げ、口を押さえる。この距離では声さえ聞こえてしまう可能性もある。

君恵にもその行動の意味が分かったようで、同じように口を塞いだ。

見つかつてはまずい。どうする？ どうする！

すると、ふいにぐっとぬくもりが薫のそばに寄って来た。

「へ？」

須藤君恵が、すぐ、真横にいた。

静かに。

彼女は口の動きでそう伝えてくる。おそらく、彼女は出来る限りくつついていれば、村松にはれないと踏んだのだろう。

確かに、二人で離れて隠れているよりは、この方が幾分、見つかりにくいかもしれない。だが、しかし、これは至近距離過ぎた。

薫はいやがうえにも、文化祭の時ことを思い出す。

君恵が、薫にキスをしてくれたときのことだ。

それくらい、距離に感じたのである。

心臓が落ち着きなく拍動する。

これは、村松にばれるかもしれないという恐怖なのだろうか、それとも、恋する彼女が傍にいるからなのだろうか。

どちらにしても、これでは、彼女に告白が出来なかった。声が出せないのでは、自らの想いは伝えられない。

もはや、機を逸したか？

とも思うが、そこで、薫は思いつく。

そうだ、想いの伝え方は、一つではない。
言葉がダメなら、他にもある。

しかし。

しかし、それはいささか、今の薫には勇敢すぎ、さらに危険性があり、そして、想いの伝達法として、曖昧だった。

だが、他に方法はないのだ。
もたもたしている時間はあまりない。

薫は自らの内側で心の太鼓を叩く。邪念を振り払うように自らを鼓舞した。

ええい、もう！

心の底が熱くなる。

ここまで来たんだ！ もう、後悔はしたくない！

薫は、もう迷わずに君恵の肩に手を伸ばした。戸惑う彼女をぐつと眼前に引き寄せる。

「これが、僕の気持ちだ」

薫は口だけを動かして、彼女に伝えた。

それが、上手く理解されたのかは知らない。しかし、君恵の瞳はそれを聞いて大きく見開かれていた。

薫は、顔を寄せる。

彼女はどうするのか、と思うが、顔を近づけるも、避ける気配はない。

ただ、真っ直ぐに、薫を見ていた。ただ、その瞬間を待っていた。

そして、

何の偽りもなく、

どうしよつもないくらい一瞬で、

薫と君恵の唇が触れ合っていた。

最終話 聖夜の歌姫にアンダーライン 2 (前書き)

はい、物語も大詰めですね。

読者の皆様、ここまでお読みいただきありがとうございます。

一応予定では、次回で完結ということになります。

予定では明日、完結部分を更新するつもりです。

正直、この小説はきちんと完結が出来るか不安だったのですが、なんとか、ここまで漕ぎつけました。正直、息切れ気味です。でも、よく投げ出さずにがんばったな、オレ。

ええと、今回の部分、推敲が荒くなっているので、また今度修正すると思います。

最終話 聖夜の歌姫にアンダーライン 2

いつの間にか村松は立ち去っていたが、しばらくしても、薫と君恵は言葉を交わさなのままだった。

もちろん、声を出したところで問題があるわけではないが、お互いに先ほどの行為の気恥ずかしさに口を閉じ、目を伏せているわけである。

薫としては、ここでもう一度彼女に正式に告白をするべきではないかと考えあぐねていたが、いつまで経っても胸の鼓動が収まらず、踏ん切りもつかず、浅く呼吸を繰り返しているのみである。突拍子もない思い切った行動により、暴走してしまった脳内は、もはや冷静さの欠片もなく、建設的な行動の一切を妨害していた。

そもそもが、薫の中に秘めていた精一杯の勇気を全て使い果たし、見事底を着いた状態であったので、今からさらに、彼女に改めて告白するなど、体から魂を抜き取られるに等しいことである。

すると、そのまま沈黙が流れるうちに、周りの騒音に加えて、遠くから数人の慌ただしい足音が聞こえてきた。

君恵がふつと顔を上げる。

「あ、皆が来たみたい」

皆、と聞いて、薫は動揺を忘れ、目を向ける。すると、そこには公園に向かって走ってくる同級生と後輩の姿があった。

芦沢に山下、馬場に奥山、それから出来れば再会は遠慮願いたい演劇部部长、有川も来ていた。

「げ、やばい」

薫の眼前ではすぐさまSOS信号が点滅し、今すぐにも君恵と逃亡再開と踏み切りたかったが、当の彼女は既に彼らに向かって小走りで駆けて出していた。もはや、全てを甘んじるしかなさそうだ。

「久美ちゃん！」

真っ先に君恵が有川に話しかけている。

「劇の方は？」

出し抜けの質問に、彼女は息を切らしながらも眼鏡の位置を直し、はつきりと答えた。

「無事、終了させたわ」

少女の顔がほころぶ。

「よ、よかったあ、どうなったのかと思ったけど」

薫も安堵した。何はともあれ、最悪の結果は免れたようだ。

「そんなことより、君恵」

有川が彼女を見つめている。

「え？」

それがいつになく優しげなぬくもりに満ちた眼差しであったため、薫は何事かと目を丸くする。

「あなたの気持ち、きちんと伝わったわ。ありがとう」
「え、ほん、とう？」

君恵が驚きに口を押さえていた。

「本当よ。歌姫はいつだって自らの悲劇的な境遇に、自分を見失うことはなかった。自らが周りに支えてもらっていることに感謝の歌を歌い続けていたのよね」

そして、
目を疑う。

あの有川が、君恵の前で、
頭を、下げた、のだ。

「私が、間違ってたわ。いろいろ、ごめんなさい」

薫には何が起こっているのか、一切理解できなかったが、君恵が、彼女に頭を下げさせるような、とんでもないことをしたのは分かった。啞然と口を開く。

しかし、そこで君恵はなぜか首を振った。

「違うよ、久美ちゃん」

「え、何？」

「気持ち伝わってくれてうれしいけれど、私に謝ることなんてないの。謝るなら、迷惑をかけた他の部員さん達と一緒に謝りに行く。私は、分かり合えただけで、満足なんだから」

「君恵……」

何も言わずに、自然に、どちらからともなく、二人が握手をする。
「ありがとう」

感謝の言葉がまるでイルミネーションの光のように有川の口からこぼれた気がした。

それが、二人の思いが通じ合った瞬間だったのだ。

この様子をその場の全員が眺めていた。薫も例外ではない。目を瞬かせ、唐突すぎる感動の和解シーンに自身に迫っているはずの危機を忘れていた。

と、

そこで、残酷にも有川と目が合った。

やはり、全てがこれで何事もなく終わるはずはないのである。君恵をゆっくりと脇へ避け、真っ直ぐに薫に直進してくる。

そして、

「小野村君」

つい今しがたまでの素直な表情から一変、いやらしい顔で接近した。

「は、はい」

「あなた、やってくれたわね」

それが本気の怒りの表情ではなく、薄ら笑いでのご発言というのが、さらに怖気を誘う。理性がある怒りというものは一時的な感情

の放出だけで終わらない、手の届かない底深さを持っていることがあるからだ。

薫は自分が群れからはぐれた一匹の子羊で、有川がそれを襲う牙の長い狼に変貌したかのような気持ちに苛まれた。

これから自分が煮て食われるのか、焼いて食われるのかを想像し、吐き気すらしてくる。

「か、顔が近いよ。もう少し、落ち着こう。お、穏便にさ」「
「全くもって、予想外に劇をかき回してくれたじゃない？」

しかし、薫の願いは聞き入れられず、さらにぐいぐい彼女は身体を近づけた。もはや、逃げ場などないというように。

「そ、それはですね」

冷や汗が首筋を辿る。

ここではさすがに下手な言い訳は出来なかった。素直に謝るが一番だと判断した薫は、すぐさま、頭を下げ、

「ご、ごめんなさい。ど、土下座でも何でもしま」

しかし、途中まで言いかけて、有川が口を塞ぐ。

「ま、今回のことは、臆病者の小野村君にしては、よく頑張ったほうじゃない？」

「……？」

「その度胸は褒めてあげてもいいわ」

突然態度を翻し、邪気なくにんまりと笑った彼女に、薫は言葉を

なくした。

「とりあえず、もう終わったことよ」

「それで、いいわけ？」

お咎めなし、ということだろうか。

しかし、薫には、本当に彼女が今回のことをこれほどあっさり諦めるとは思えなかった。なにしろ、彼女が今回こそはと必死に作り上げた演劇である。自らの目的のために手段を選ばない彼女がこれほど呆気なく、簡単に薫を許すものだろうか。

いや、そんな馬鹿なはずがない。いつもの彼女なら例え、薫が地球の反対側に逃げたとしても追って来て、責任を取らせるだろう。

しかし、彼女は言う。

「私が言うんだから、良いのよ。これで一件落着」

「で、でも、怒ってる、でしょ？」

さすがにいたたまれなくなり、おずおずと薫が尋ねると、彼女は急に顔に皺を寄せ、鬼の形相で睨んできた。

「それはもちろんよ。でも、今ここで全てをあなたにぶちまけて欲しい？」

「え、遠慮します！」

薫はぶるぶると首を振って、拒否した。

すると、やはりあっさり和有川は背を向ける。その背中では威圧的に真っ直ぐ伸びていたものの、薫たちに対する怒りの発露ではないようだ。

釈然としない気持を抱えたまま、しばらく薫は所在無げに立ち尽くしていた。

いつの間にか、君恵は後輩の馬場と吹奏楽部の芦沢から事件全貌の説明を受けているようで、もう一人の後輩、奥山はと言うと、有川となにやら話を始めている。そこに不穏な気配は感じられなかった。

どうにも納得がいかないが、事は穏便に終われそうだ。

しかし、薫には、もう一つ気になったことがある。今回の作戦の責任者である堂野の姿が見えないのだ。

いったい彼は今どこにいるのだろう。それを有川に尋ねようとして、背後から誰かに抱きつかれた。

「おい、小野村」

「何だ、山下か！」

ぐいぐいと無遠慮に人の頭を撫でてくる粗忽者には薫も覚えがあったのですぐに彼と認識できた。

「亮介は？」

と訊くと、彼はあからさまなため息をつく。

「何だよ、俺に対して一言も労いの言葉はないのか？ お前は寝ても覚めてもすぐに堂野の話だな」

「「うちや」「うちや」言わずに、どこにいるのか話せ！」

薫は山下の拘束を振りきり、睨みつけた。彼はやれやれと肩をすくめる。

「大丈夫、無事だよ。すぐに来るから安心しろ」

「そうか、こっちに来るのか」

「安心、だな。」

すると、山下がイタズラっぽく薫を見下ろす。筆舌尽くしがたい不快感だ。

「何だよ、その笑みは」

「いやな、言いたいことと訊きたいことがあるんだが……まずは、言いたいことだな」

「は？」

彼はベンチに座りつつ言う。

「小野村、何で有川が今回のことをこの程度で済ませてくれたと思う？」

気になっていたことだ。

「やっぱり、理由があるのか」

「それはもちろん」

「なんだ？」

彼は意味ありげに指を立てる。

「堂野だよ」

「亮介が何かしたのか？」

「いやあ、まあ、あんなことを有川に言い出すとは、夢にも思っ
てなかつたし」

何のことだか意味が分からない。

「どついつことだ。もつたいぶらずに言え」

「つまりだな、あいつは男らしく責任を取ったんだよ」

「責任、ねえ。だが、具体的じゃないな。要するに何をしたんだ？」

「小野村君、察しが悪いわね」

声がして振り返ると、そこには芦沢が立っていた。腕を組み、あきたような半眼で薫を見ている。

「彼は引き受けたのよ」

「……何を？」

「だーからー」

「副部長さ」

突然、違う人物の声が現れ、肩に手が置かれる。

いったい、いつの間に現れたのか、薫の横に、すらりとした長身の少年が立っていた。

「り、亮介、お前」

驚いている薫を尻目に彼は淡々と説明する。

「それ以外にじっくりくる責任の取り方はなかったしな。何より、有川から頼まれてたことだ、一番納得してもらえと思っただ」

半ば夢うつつの状態で薫は驚愕していた。

「うそ、だろ？」

「残念ながら、嘘じゃない」

「だとしたら、冗談か？」

「申し訳ないが、冗談じゃない」

「じゃあ、夢か？」

「すまんが、夢でもないと思うぞ」

「じゃあ、幻覚、いや、やめよう。現実逃避は空しいだけだ」

薫は脱力して肩を落とす。

力を入れていないと、その場にしゃがみこんでしまいそうだった。

副部長だと？

演劇部の？

いったいどこから沸いてきた話だ。聞いていた気もするが、幾分、展開が唐突過ぎた。

「ま、そういうわけだ。薫」

「はあ……」

「言っただろ、俺は芦沢さんと違って部活にも入ってないし、無くすものはないって。だが、何にも縛られていないからこそ、これは逆に与えることが出来るってことだ。有川の欲しているもの、俺という人材を、な」

「……亮介って」

薫は少し冷静になり、半眼で見上げる。

「何だよ、その目は」

「本当に空恐ろしいよ。端からそれを計算済みで全てを引き受けてたってことか？」

彼は大仰に手を振った。

「そんなわけないだろう、それはあくまで責任の取り方の一つではない。もちろん、他の採算が取れない部分に関しては俺をこき使えって話してるんだ」

「それで有川が納得したのか？」

「まあ、彼女だって今回のことで周りに対しての非を認めてくれたし、それでチャラにしようだとさ」

「……」

しかし、彼はそこでため息をつく。

「だが、今回のことは少々いらぬお節介過ぎたかもな」

眉間の辺りを指で押さえながら、表情に影を作る。

「どうした？」

「俺は日々をのんびんだらりと暮らすただの帰宅部で、相手は多数の部員を統率している演劇部の部長だ。こんな自分が彼女に物申すだなんて、おこがましい話だと思わないか？」

「……確かに、そうだな」

ある程度こちらも被害を被ったことに違いないが、本来これは部外者の自分たちではなく、部内の人間が率先して解決すべき問題であるのだろう。薫は思う。

自分が出る幕ではなかったと、彼は考えているのだろうか。

しかし、彼の目の色は揺らいでいない。

「でも、彼女は、俺の言葉を聞いてくれた。俺はさ、それだけ彼女に信頼されていたってことだよ。俺は、それを実感した」

「……」

「それと同時に、彼女のために一生懸命になっている自分も強く実感したんだ。きっとこんな気持ちは初めてだな。それを知って、改めて、副部長をしてもいいと思った。彼女を支えてやりたいと思っ

た」

そう話す堂野の表情はいつも以上に生き生きとじていて、薫は、何も言えずにその親友の横顔を、ただ見ていた。

そうか、

そうか、きつと彼女と彼女はこれで互いの想いを伝え合えたのだ。作戦は少々乱暴で強引だったかもしれない。憤慨されて、絶交されて、関係の全てを壊していたかもしれない。

けれども、それでも、彼らは本音の部分で向かい合うことが出来たのだ。

これにはきつと、堂野が必死さが伝わったのだろう、と薫は思う。彼がいったいどんな風に有川に語りかけたのか、知らない。

けれど、それは有川の怒りを追い越し、間違いなく、彼女の心へと届いたのだ。

人の目に見えない彼女たちの信頼の糸に運ばれて。

そう思って、深呼吸三つ分の沈黙の後、

「……そうか、亮介がそう考えてたんだったら、俺はもう何も言わないよ」

と薫は静かな声で言った。

「薫……」

「でも、せめて俺に一言ぐらい相談してくれてもよかったんじゃないか？」

冷たい口調で言うと、彼はばつが悪そうに頭を掻いた。

「ああ、それは、ごめん。謝るよ」
「でも、本当に入っちゃうわけ？」

そこで訊いたのは芦沢だ。彼女は未だに信じられないらしく、訝しげに口を尖らせている。

「今まで帰宅部で本ばかり読んでいたあなたが？」

「今さら女々しく前言撤回、なんてことは言わないって」

「そうだよな、誰かさんと違って、亮介はいい加減な性格じゃないしな」

ちらり、と薫はわざと山下を眺める。

「薫、それは誰に向かって言ってる？」

「だから、誰かさんだよ」

「俺を見ながら言うことと何か関係しているのか？」

「さあな」

「……」

すると、なぜか無言で山下は薫を見ている。

「な、なんだよ。文句あるのか？」

「いやな、薫、こっちに来い」

「うん？」

山下は薫の首を掴み、公園の植え込みの傍にしゃがみこむ。そして、意味ありげに周囲を確認し、声を潜めてきた。

「今度は訊きたいことのほうだ。お前、俺が言ったとおり、きちん

とやることはやったんだろっな？」

「やること？」

薫は首を傾げる。すると、彼はにやにやと笑みを浮かべながら薫の肩を揺さぶった。

「ここでおとぼけはなしにしようぜ、友人。やることつつたら、
「つだよ。須藤さんにきちんと言うこと言ったのかってことだ」
なるほど、そういうことが。

「ああ、それはもちろん」

「言ったのか？」

山下の眼差しが期待に満ち、らんらんと輝いている。
しかし、

「肯定は、できない」

薫は言った。

「やらなかったってのか？」

口をあんぐりと開け、あからさまに彼は落胆した。その様子がありにも大仰で気の毒になり、薫は首を振る。

「違う、もちろん、気持ちには伝えるだけ伝えたさ」

「つまり、告白したってことだな！」

「まあ、そう、なんだけど……？」

薫は曖昧に言葉を濁す。

告白ではなく、キスをしたなどは、とてもじゃないが、口外できない。代わりに言うべき言葉を脳内に探すが、見つかる見込みは薄かった。どうしたと言えればいいのだ。

「なんだよ、微妙で釈然としねえな。はっきり言えって」

もじもじとしている薫に、山下は痺れを切らしたのか、不満そうに言う。彼はいつだってせっかちだ。いっそ白状してしまうかと、薫の心が折れそうになる。

「ええと、つまりだな……要するに……」

しかし、

「ああもう、そんなこと言わせるな!」

と暴発してしまう。

「何を怒ってる？ どっちなのかって聞いてるだけだ」
「……………」

薫は思わず、閉口した。

「気持ちは伝えたんだな？」

山下のしつこい追及。

「ま、まあな」

仕方なく首肯した。
すると山下が景気のよく手を叩いた。

「ようし、上出来だ！」

彼はとにもかくにも他人の色恋事が楽しいらしい。嬉々として薫に顔を寄せた。

正直、薫は友人として付き合うのはもう金輪際遠慮したいと思い始めている。

「それで、肝心の彼女からの返事は？」

彼は舌なめずりをするように訊いてくる。

「それは……」

もちろん、無言だったのだから、聞いているわけがない。返答に困惑する。

すると、そこで第三者が会話に割って入ってきた。

「あ、山下君と小野村君、そこで何してるの？」
「へ？」

振り返ると、須藤君恵だ。片方の眉を上げて、薄く微笑している。

「怪しいなあ、男二人で内緒話？」

「いや、これはだね」

山下が突然のことにたじろいでいた、無理もない、内緒で君恵の話をしていたのだから。噂をすれば影という言葉があるが、この場

合、話を聞かれて影ではないか、と怖くなった。
寒気がする。

と、彼女がぐいと薫の腕を掴んだ。

「ねえ、小野村君、借りていい？」

「へ、え、と」

山下が目をぱちぱちとさせる。

「まだ話をすることがあるの？」

君恵の言葉には命令するような凄味はなかったが、どこか有無を言わせない気迫を感じさせた。悪友の頬が引きつる。

「う、ううん。もう、ないけど」

「そ、だったらいいね。向こう行く、小野村君」

すると君恵は振り向き、穏やかな笑顔を見せてくれた。

最終話 聖夜の歌姫にアンダーライン 3

亮介の前で興奮気味の奥山紗江が音響室での事の顛末を芦沢に語っている。まるで、ドラマのストーリーを語っているかのごとく、彼女はいつもの真面目さはどこへやら、はしゃいでいた。

「それで、有川部長、堂野先輩に抱きしめられて」

それを聞いて盛り上がったいた芦沢が驚愕し、頬を赤らめる。

「ええ！ 堂野君って、見かけによらずやるわねえ。そんな、大胆なことを」

亮介は少し小首を傾げるだけで大した反応も返さなかった。

「そうか？ なんとなく思わずやったんだけど」

「なんとなくやったですって？」

「まあ」

「……最近の殺人犯みたいな言い方するわね。将来危険人物になりかねないわ」

「危険？」

ええ、そうよ、と彼女は罵るように言う。

「一度に世に出れば、恐るべき女たらしに変貌すること請け合いよ」
「……冗談は止めてくれ」

辟易としながらも、亮介は自分の行いがそんなにも常識外なものだっただろうか、と思い返す。しかし、外国では挨拶程度に気軽な

抱擁はあると知っている。

これくらいは許容範囲だと思っていたが、少しやりすぎたということだろうか。

「ああ、もう！」

すると、会話を外から聞いていたらしき有川が亮介と芦沢の間に入ってきた。どうやら、かなりご立腹のようである。不機嫌そうに芦沢を睨んでいる。

「そのことはどうでもいいの！」

その焦燥感丸出しの様子が普段見かけないものだったので、亮介は興味深かった。

「あらあら、ずいぶんとらしくないじゃない有川さん。何をそんなに熱くなってるの？」

芦沢が格好の標的を見つけたといわんばかりの表情で言う。それに対し、有川はと言うと、まともに取り合っていないと手で払った。

「私は熱くなつてないわ。芦沢さん」

「さあ、どうかしら。頬を赤らめちゃって、かわいいわね」

どうやら、彼女たちの攻防は若干芦沢に傾きつつあるようだった。あの有川が怯み、後れを取っているようである。

さすがに旗色が悪いことを感じたのか、そこで有川が反撃に出た。どこか憂いた顔で顎に手を当てる。

「そういえば、話によると、今回の計略の発案者はもともとあなただそうね」

「う、ええ、そうよ」

芦沢が苦虫を噛んだ顔になる。

「なるほど、じゃあこの場合、一部損害責任を取らせるってこともあるか」

しかし、言葉が終わるか終わらないうちに、亮介が叫んだ。

「有川！」

肩を掴んで振り向かせる。

「え？」

「芦沢さんには責任はない！ 言っただろ、全部俺が責任を取るって。損害があるならその損害分も俺が引き受ける」

急に目を伏せ、たどたどしくなる彼女。

「え、いや、それは」

「それじゃ、不満か？」

「わ、私は」

口ごもる彼女が面白いのか、芦沢が意地悪く笑う。

「あらあら、見つめあっちゃって。妬けるわね」

「な……別に何も無いわよ！」

「ふふふふ」

亮介が視線を下に向けると、有川が制服の裾を強く握り締めているのが見えた。

「芦沢さん、あなたには今回個人的な恨みが出来たわ」

「あれ奇遇ね、それは怖いわね。背後を取られないよう、充分気をつけないと……お互いにね」

どうやら、このまま放置すれば、さらに熱き火花が飛び散ることは間違いなさそうである。亮介は彼女たちをなだめる。

「まあまあ、せつかくのクリスマスだ。喧嘩は」

と、有川のポケットから何かのメロディーが流れてきた。

「どうした？」

「携帯、電話だ」

彼女は急いで取り出し、通話ボタンを押すと、すぐに耳に当てた。

「はい、はい。え、それは……」

彼女の丁寧な口調からして、目上の人物からの電話のようだが、内容は分からない。

「はい、えー！」

と、有川がいきなり驚嘆した。

亮介たちは顔を見合わせるが、やはり誰もわからないようだ。すると、ようやく話が終わったのか、彼女は顔を上げる。

「誰だ？」

「泉田中学校の校長先生」

「え？」

となると、今回の劇の出来の話だろうか。数週間前、山下がこの事について話していたことを亮介は思い出す。

「ど、どうだったんだ？ ホール、貸してくれるって？」

「え？」

「あっ」

気づいて、瞬間的に口を塞ぐ。なぜなら、彼女にしてみれば、今回の話は亮介に話してはいないはずなのである。不審に思われ、追求されてもおかしくない状況だ。

そして、案の上、眼鏡の縁を押さえながら、眉をひそめた彼女。

「どうして堂野君がそのことを知っているのか分からないけれど……」

しかし、ここまで言いかけたが、尋問よりも喜びの欲求の方が勝っているらしく、

「そうなの！ 劇は大成功だったって！」

と、まるでねじが飛んだかのようにその場で跳びはね始めた。

「え、本当ですか！」

奥山も仰天して目を丸くしていた。

「何の話？」

と唸っている馬場と芦沢は置いておいて、

「こんなこともあるんだな」

と亮介は驚きを抑えつつ、深呼吸をして、空を仰ぎ見、呟く。
すべてのしがらみから解放されたような、ほっとする開放感がそこにはあった。

空には……夜空には、地上よりも遙かに多く、ばら撒いたような光の粒が広がっていて、静かに世界を見守っているようだった。

今日はクリスマス。

何が起こつても、不思議じゃない。

と、

「不思議なこともあるものね」

隣で有川がいきなり言うので、亮介は苦笑してしまった。彼女も自分と同じようなことを思っていたのか。

感動の熱からもう冷めたのか、視線は亮介と同じ、空に向けられていた。

「まあ、そもそも、最初からそのつもりだったとも考えられるかな。有川は元から、演劇については群を抜いていると思うぜ」

しかし、褒めたにも関わらず、傍で佇む有川を見ると、彼女は少ししんみりと首を振った。

「でも……きっと違うわよ」

「何が？」

「これは、堂野君のおかげ」

「え？」

「きっと、あのままの劇じゃ、私は認められなかったんじゃないか
って思うの」

「そうとも思えないけれど」

亮介は否定するが、彼女は頑として首を縦には振らない。

「私がそう思うんだから、そうなのよ」

「……全く、わがままな理屈だ」

でも、悪い気はしないな。

「ふふふ」

すると、ふいに服を引っ張る人物の存在を感じて、見ると、彼女
だった。

亮介に、手を差し出している。

「握手しても、いいかしら？」

「いいけど？」

亮介も手を出す。

すると、彼女は恥ずかしげに、目を泳がせつつ言う。

「助け」

「はい？」

「ほ、欲しいから」

亮介はなるほど、と全てを了解する。

「……ああ、喜んで」

と彼女の小さな手を包む。

「これから、よろしく」

「ああ、こちらこそ、な」

「ねえ、これって、何て言う曲か知ってる？」

公園の西側の広場での聖歌隊の合唱を聞いていると、ふいに君恵が訊いてきた。

「なあ」

薫は逡巡するが、

「知らないけど」

曲名を探り当てるには至らなかった。力なく首を振る。

聖歌隊はボランテアなのか、老若男女、様々な人間たちが入り混じっていた。皺の深い老人や、恰幅のいい中年男性、大学生くらいと思しき若い女性や、学校帰りのような少年もいる。

皆、白いおそろいの衣装を着て、片手に歌詞カードを持っている。

僅かな風によって揺れるロウソクの火のように、彼らは体でリズムを刻み、声を揃えて歌っていた。薫と君恵はしばらく何も言わず、ただ流れ来る曲に酔いしれている。

薫には、何をせずとも、この瞬間がとても満ち足りている気がしていた。

隣に、君恵がいる。

今日一日であまりにもいろいろなことが急展開に進んでしまっただけで忘れていたが、薫が求めていたのは、この瞬間だったのだ。

今ここで、もう一度、彼女に先ほどの答えを問いかけるべきかとも思ったが、なぜか言葉はいらななかった。

何もせずとも、胸の中の穏やかなひだまりのような心地を彼女も共有している気がしたのだ。

と、ふいに、

「ラララ〜」

彼女が曲のメロディーを口ずさみ始めた。

「ラララ〜ラ〜」

薫は目を擦る。

彼女には何かが宿った気がしたのだ。

何か、いつもの彼女と違うような。いや、彼女なのだが、彼女であつて、彼女ではないような。

驚いている薫の前で彼女は聞いた曲をそのままに繰り返して、歌う。歌詞のない、ラララというメロディーだけの重複だったが、それは不思議に力が漲ってくるようで、安らぎに満ちた歌声だった。

まるで、先ほどの劇の……。

「そうか」

薫は一人で納得し、

「やっぱり、須藤さんは聖夜の歌姫だな」

確認するように呟いて、君恵の手をそっと取った。

軽く咳払いをして、脳内のストックしてあった、

薫の、アンダーラインの力を、再生させる。

ノートがパラパラと捲れた。

そして、あるページで止まる。

今なら、アレを渡せそうだ。

「お嬢様、寒くありませんか？」

自分はドラマや演劇の主人公じゃない。

「え？」

「もしよろしければ、お渡ししたいものがあるのですが」

かっこよくもないし、女みたいで、背も低い。

「渡したい、もの？」

薫はマントの下から君恵へのプレゼントを取り出す。
温かそうな赤いマフラーだ。

「これを、私からのプレゼントです」

けれど、こんな自分でも、劇場から彼女を連れ去ったのだ。

歌姫は、幸せにならなければならない。

自分は、彼女をそうさせたい。

「くれ、るの？」

「はい、これで冷えません」

薫は彼女の首にそのマフラーを回した。ふんわりとした毛並みが彼女を包んでいる。

申し分なく、似合っていた。

「ありがとう」

「どういたしまして」

少しは、きまっていただろうか。薫は思いながらお辞儀をする。

「ふふ、とっても大事にするね」

「そんなに、お気に召されましたか？」

とても嬉しそうな彼女に、薫は、不思議そうに尋ねる。

「うん、だって……」

君恵が目配せして、

「『赤い糸』で編んであるんだもの」
「へ？」

赤い、糸？

思わず、薫はアンダーラインを引く。

それは、いつたい？

その真意を訊ねようとしたが、

「ラララ〜」

君恵はそ知らぬふりで、再び歌を歌い始めていた。薫は呆然とする。

歌姫は、歌に逃げていたのだ。

何だよそれ、

ずるいなあ。

思いながらも、薫も曲を口ずさんでいた。音楽というのは余計な
思いもかき消してくれる。

今この瞬間だけでも、わずらわしい悩みとは距離を置いていたい。
そう思っていた。

憂鬱な感情は、こんな夜には似合わない。

世界は、優しい光の粒に包まれている。

最終話 聖夜の歌姫にアンダーライン 3 (後書き)

読者の皆様、作者のヒロユキです。

今回で、この作品もようやく、最終回となりました。他の作品でもよく言っていますが、当初の予定よりも大幅に話の内容が増えたため（僕が書くといつもこうなります）、このように完結が遅れてしまいました。すいません。

さらに、今回は、おそらく生涯で初めて？の続編小説というものに挑戦したのですが、そもそも続編の予定のない作品に手を出してしまったため、いろいろと配慮が足らなかつた点もあると思います。

しかし、こんな未熟者の作者の作品に最後までお付き合いいただき、本当にありがとうございます。短いですが、これからも小説の上達に向けて、邁進していきたいと思っておりますので、もし、少しでもこんな奴の小説を気に入っていただけましたら、応援よろしくお願いします。それではノシ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8380i/>

君の言葉にアンダーライン ～ 聖夜の歌姫 ～

2010年10月8日23時57分発行